冒険ゲームブック

ファンタシースター

アリサの冒険

大出光貴　著

双葉文庫　ゲームブックシリーズ

ファンタシースター

アリサの冒険

大出光貴　著

FUTABASHA GAME BOOK

双葉文庫

冒険ゲームブック

ファンタシースター／アリサの冒険

大出光貴／S・ハード

双葉社

PHANTASY STAR/ALISA's Adventure

by Studio Hard Co., Ltd. and

Mitsutaka Ode

Copyright © 1989 Studio Hard Co., Ltd.

Illustrations by Kunio Aoki

Character and Licenser

© SEGA Enterprises

First Published by Futaba-sha Books Co., Ltd.

3-28 Higashi-Gokencho, Shinjuku, Tokyo, Japan

ファンタシースター／アリサの冒険

CONTENTS

プロローグ……4
この本の遊び方……9
登場人物……13
ファンタシースターの世界…16
ゲーム……20
エピローグ……278
行動記録紙……282
あとがき……284

プロローグ

「どうしたの、兄さん!?」

少女の叫び声が、人垣をふたつにわけた。その間から現われたのは、いる青年の姿だった。彼の顔や手は血まみれだ。

青年のまわりには、装甲に覆われた武装警察官――アーマー・ポリスたちのようであった。

た。そいつらの銀色のボディには、返り血がべっとりとついている。

は、間違いなくこのアーマー・ポリスたちのことをこそこそと嗅ぎまわりやがって！　これ以上痛い目にあいたくなかったら、これからは、せいぜいおとなしくしていることだな」

「ラシーク様のように、その場を立ち去った青年を見おろし、あざ笑うように、うつ伏せに倒れていく。

馬を蹴ちらすように、

冷たいコンクリートの上には、瀕死の青年と少女だけがとり残された。

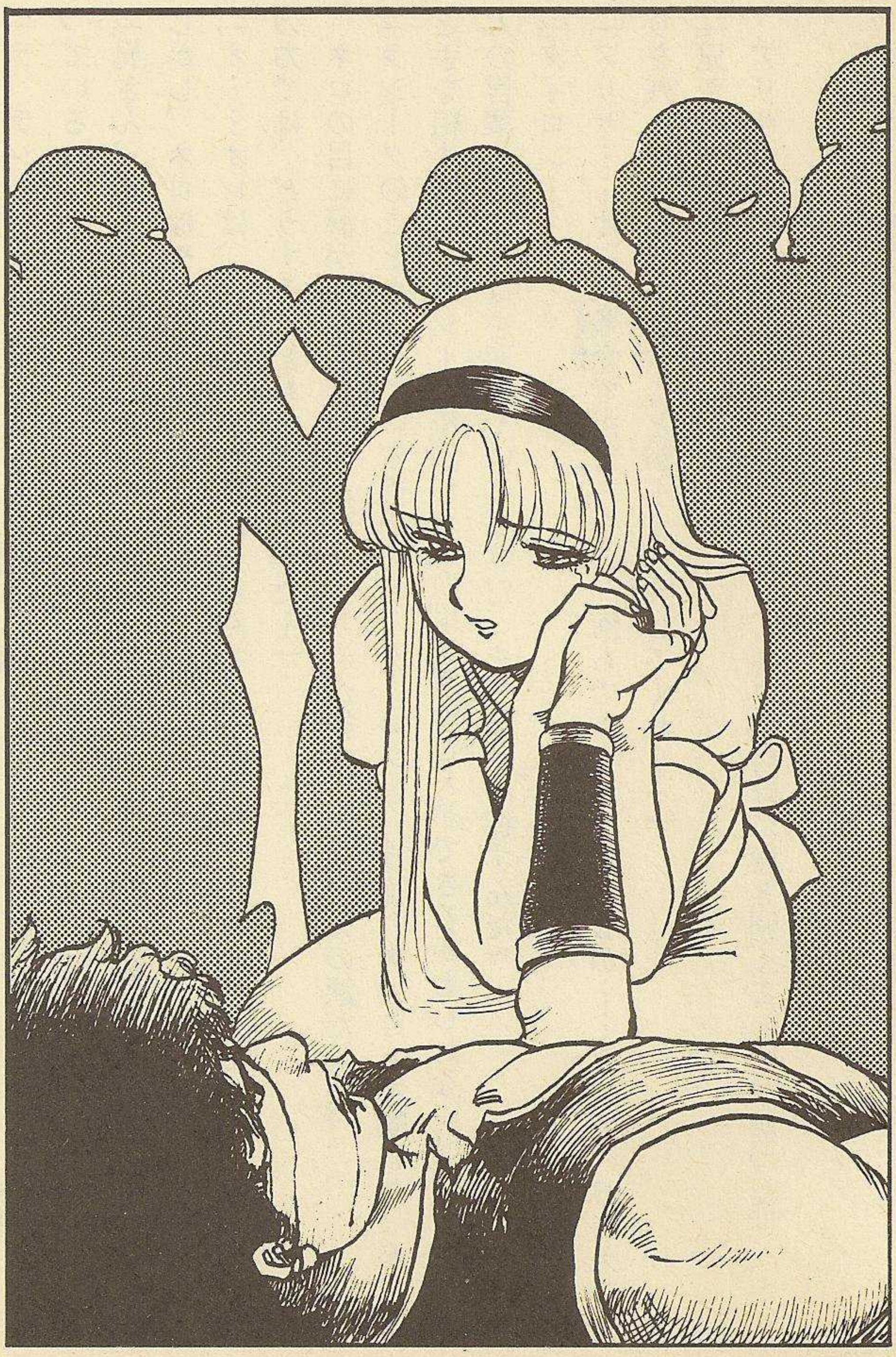
「ア……アリサか……」

青年の口が弱々しく動いた。

「ネロ兄さん、何があったの!?」

アリサと呼ばれた少女は、血まみれの兄の手を握りしめた。

プロローグ



「ラ、ラシークは、この星に大きな災いを招いてしまった。……世界は今……破滅に向かっている」

「兄さん、あまりしゃべらないで」アリサは、苦しそうな兄を心配して黙らせようとした。しかし、ネロはやめようとしない。

「オ……オレは、ラシークが何をたくらんでいるか探っていたんだ。だが……オレひとりの力では、どうすることもできなかった！」

ネロの目に涙が浮かんだ。それは、アリサが初めて見る、兄の涙だった。

「ラシークのことを聞いた。か、彼と手を組めば……ラシークを倒し、この星を救うことができるかもしれない。タイロンという強い男のことを探っている途中で……タイロンを連れているそうだ。そ、それを探すんだ」

「タイロン……それは残念でたまらない。何もできなかったことが……そして、おまえひとりを残して死んでしまうことが……。許してくれ……」

「アリサ……オレ

「兄さん、兄さん!!」

アリサの声が悲鳴に変わった。しかし、ネロの目は二度と開くことはなかった。

時は——A342年。

プロローグ

アルゴル太陽系。その第1惑星パルマは、国王ラシークのもとに繁栄をきわめていた。近くの惑星を植民地として開拓し、その開発計画も順調に進んでいた。

またパルマ星の宇宙空港からは、第2惑星モタビア星行きの星間連絡船が絶え間なく行きかい、数年後には第3惑星デゾリス星にも宇宙空港ができることになっていた。

ところが、この年の春、不気味なウワサが流れはじめた。ラシークをはじめとする支配階級の貴族たちが邪教に取りつかれ、ラシークの永遠の命とひきかえに、このアルゴル太陽系を売りわたしてしまったらしい。

そのウワサは、現実となって現われた。各惑星のいたるところに奇怪な怪物が現われ、人々の暮らしを脅かしはじめたのであった。――何か、とてつもないことが起ころうとしていた……。

アリサは、パルマ星の中心都市カミニート居住区で育ち、今年15歳になる少女だ。兄のネロは18歳。宇宙空港で、荷あげ作業員として働いている。ふたりは、両親を幼いころに亡くし、兄妹で肩を寄せあって暮らしてきた。

ネロは、人一倍に正義感が強い青年だった。流れている不気味なウワサを聞きつけ、国王ラシークについて調べていたのだ。

だが――その彼はたった今、死んだ。

やがて、夕闇があたりを包みはじめた。街はひっそりと静まりかえっている。ラシーク

が戒厳令を敷いてからというもの、街は以前の活気を失ってしまっていた。

アリサは、もう一度兄の名をつぶやいた。彼女の目に涙の跡は残っていたものの、瞳は強い力に満ちていた。

「アリサはあなたの意志を継ぎます。兄さんの命をムダにしないために、戦いにいきます。きっと見守っていてね、兄さん」

アリサは、ネロが腰につけていたショートソード（短剣）を胸に抱き、そう誓った。

はたして、ラシークの秘密をあばき、倒すことができるのか？

アリサの長い旅が今始まった。

⇩1へ

この本の遊び方

1　ゲームの進め方

兄を殺されてしまったアリサ。15歳の少女にとって、敵はあまりにも強大です。はたして、アリサはラスボスを探し出し、敵を討つことができるでしょうか？

この本では、読者の皆さんのために、いろいろな結末が用意されています。そのうち、ハッピーエンドにたどりつける確率はごくわずか。大半の人は、怪物にやられたりして、使命を果たせないまま終わってしまうでしょう。

アリサの運命を左右する分かれ道が文章の最後にあります。その方法は単純なルート選択だったり、アイテムの有無による振り分けだったりとさまざまです。そのつど指示に従って、自分の進むべき道を選択していってください。

2　行動記録紙の使い方

ゲームを進めていくうち、アリサのポイントや冒険の条件は次々と変化していきます。そのつど、行動記録紙に書き換えていってください。

■バトルポイント（バトルP）

はじめにバトルポイントを決めます。このポイントは、ゲーム中に遭遇するさまざまな

敵との戦いに使います。また、運試しに使用することもあります。

282ページにあるふたつのバトルP表のA～J欄にそれぞれ、0～9までの数字をいれます。続き数字でも、バラバラでもかまいません。ただし、ひとつの表の中で同じ数字を二度使わないでください。具体的な使用法については戦闘方法の欄で説明します。

■アリサと仲間たちのポイント（各ポイントに上限はありません）

●戦闘ポイント（戦闘P）

アリサたちの、戦闘能力を表わします。初期値は0です。武器を入手した時や敵を倒した時などにプラスされ、傷を負った時にマイナスされます。

●ヒットポイント（HP）

アリサたちの体力を表わします。初期値は10です。体力増強剤（ペロリーメイトやルオギニン）を飲んだり病院に行くとプラスされ、敵にやられるとマイナスされます。

●マジックポイント（マジックP）

アリサたちの魔法（超能力）の力を表わします。初期値は0です。魔法を使うとマイナスされます。

※魔法を使うのもある）、魔法を使うとマイナスされます。

に従ってください。

に必要なポイントと、実際に消費されるポイントは違います。本文の指示

この本の遊び方

●お金（メセタ）

アルゴル太陽系で使用されているお金の単位は、メセタといいます。初期値は0です。

■アイテムリスト

アリサは、旅の途中で武器やその他のアイテムを手に入れるもの、戦って手に入れるもの、交換して手に入れるもの、戦って手に入れるものなどいろいろです。入手したものは、みんなアイテムに記入してください。

■A～Jのアルファベット・チェック

ゲーム中、「Aをチェック」など、A～Jのアルファベットをチェックするという指示があります。そのときは、アルファベット・チェック欄のあてはまる記号に印をつけてください。

■病院について

旅の傷をいやすために、各都市に病院があります。（病院にて、傷の手当が可能）と書いてある時のみ、行くことができます。行くか行かないかは、あなたの自由です。行く場合

には、本文中の指示に従ってください。また、と書いてある場合、20メセタ払ってHPをプラス4させることはできません。

3 バトルの方法

まず敵の強さを出します。敵キャラクターのポイントに、バトルPを足した数値がそれです。

次に、アリサの強さを出します。戦闘Pに、シャーキン 5＋バトルP（1のA）この場合、バトルポイント表の1のAを見てください。仮に3とすると、5＋3＝8となり、8がシャーキンの強さです。

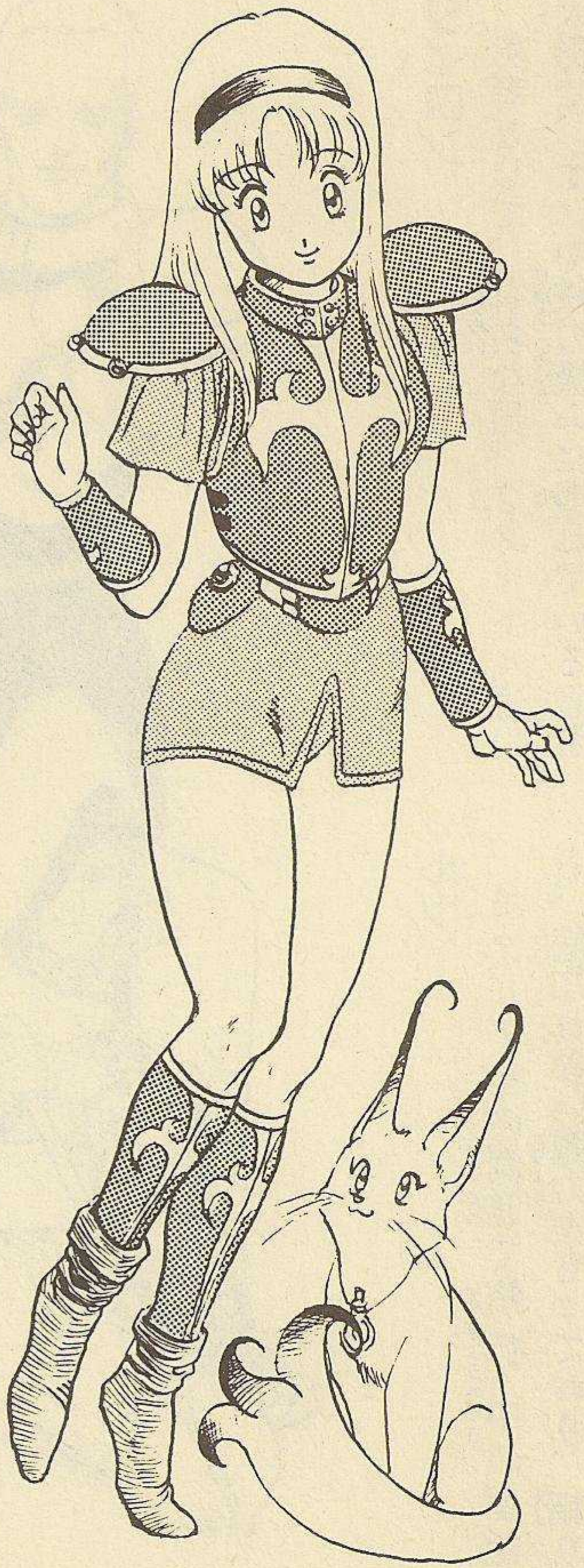
アリサ 戦闘P＋バトルP（2のF）このときのアリサの戦闘Pを見てください。それにバトルP表の2のFの数字を足します。仮に4＋5＝9とします。

8対9で、アリサの勝ち。「敵よりPが上」という項目に進みます。もし、同点の場合は、両者のバトルPをひとつずつずらしてください。AならB、FならGというようにです。もしJのときはAにしてください。

■何度も書いたり消したりしますので、記入は鉛筆で行ってください。また、本に直接書きこむよりも、メモノートを使ったほうが遊ぶのに便利です。

登場人物

ファンタシースターの世界を駆けめぐるのは、この3人と1匹！　はたして、どんな冒険が彼らを待っているのか!?



アリサ

このストーリーの主人公。15歳の女の子で、超能力が使える。かなりのジャジャ馬娘だが、本当は優(やさ)しい心の持ち主。兄を殺された彼女は、復讐(ふくしゅう)の旅に出たが……。

ミャウ

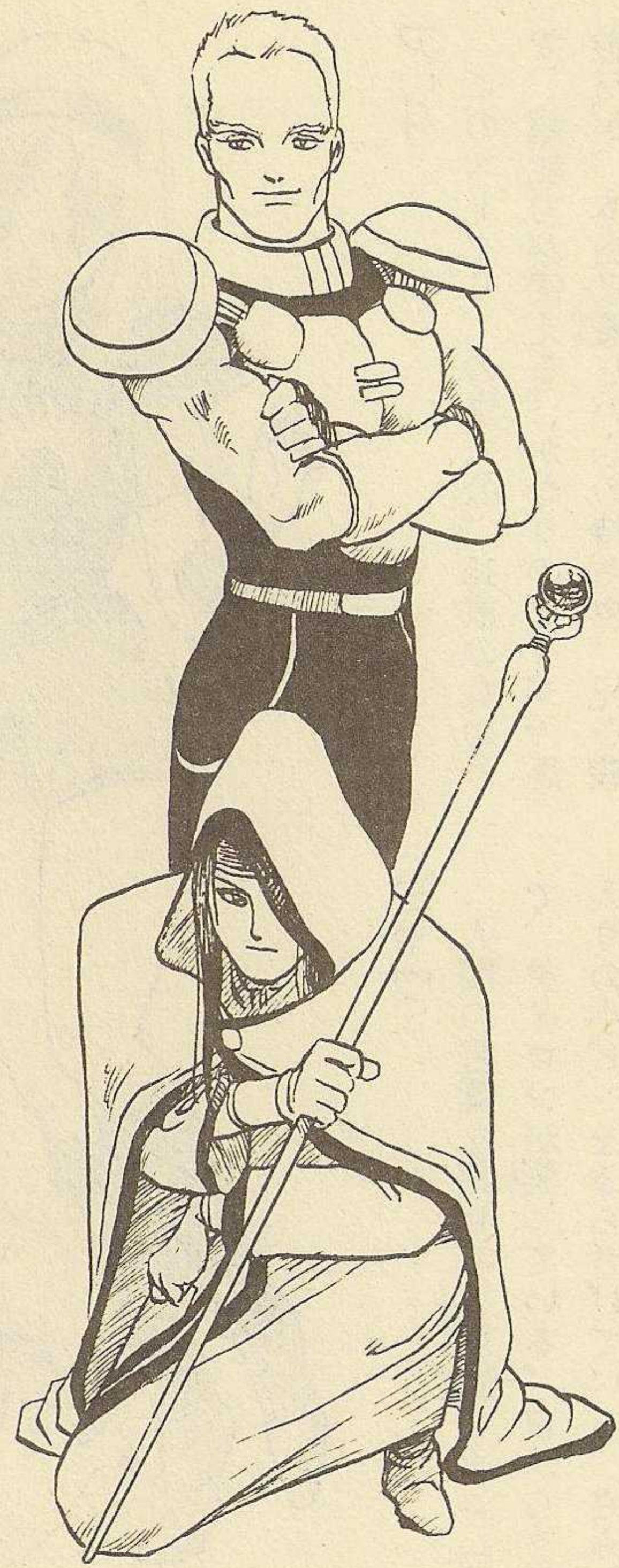
人間の言葉を話せる不思議(ふしぎ)なネコ（？）で、タイロンが飼(か)っている。首からクスリ入りの小ビンをぶらさげている。さらに、ミャウには大きな秘密(ひみつ)が……？

タイロン

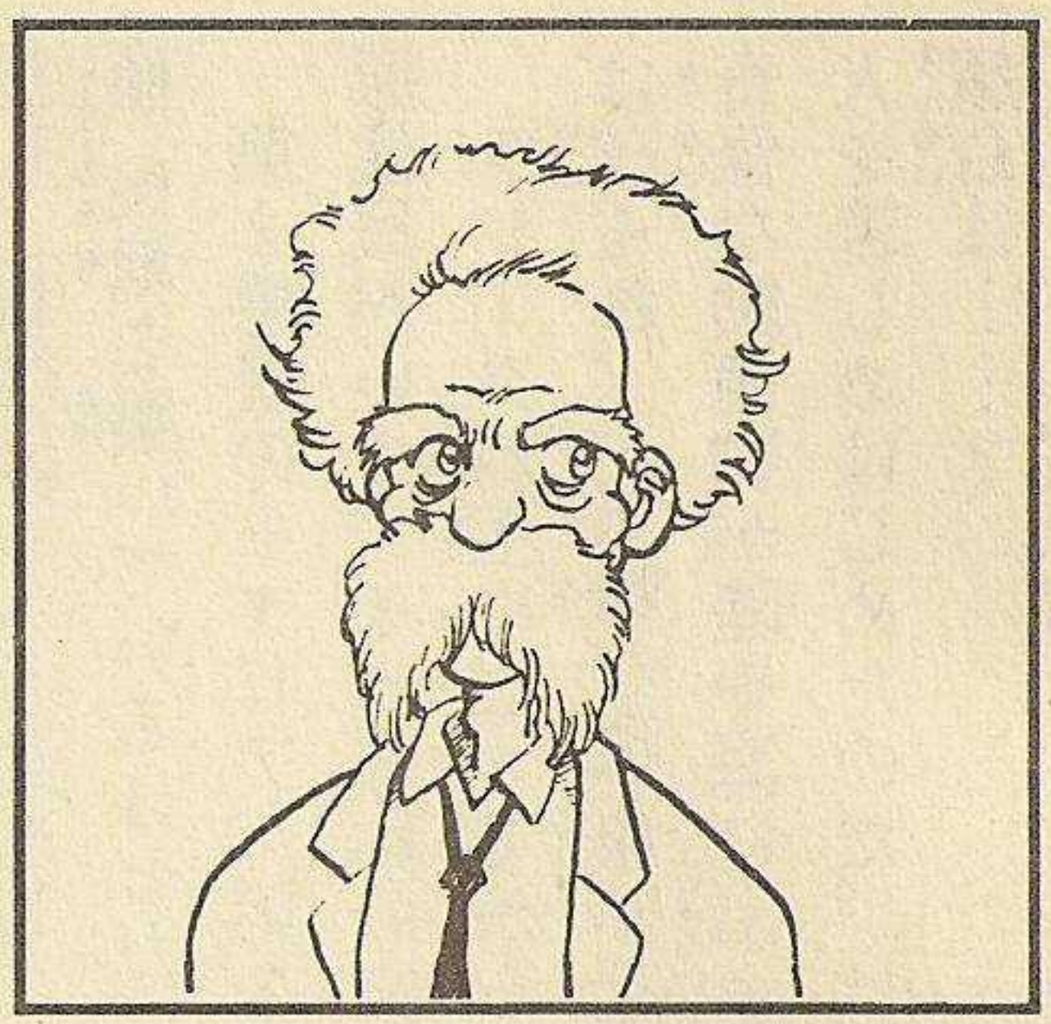
勇者として、有名な男。2メートル近い大男で、オノや銃の扱いに慣れている戦闘のプロ。外見に似ず、意外とユーモアのセンスもあったりする。

ルツ

モタビア星の洞窟で修行中の超能力者。底知れない魔力をもっており、頼りになる男。ものすごい美形だが、性格がどことなくおかしいようである（？）。

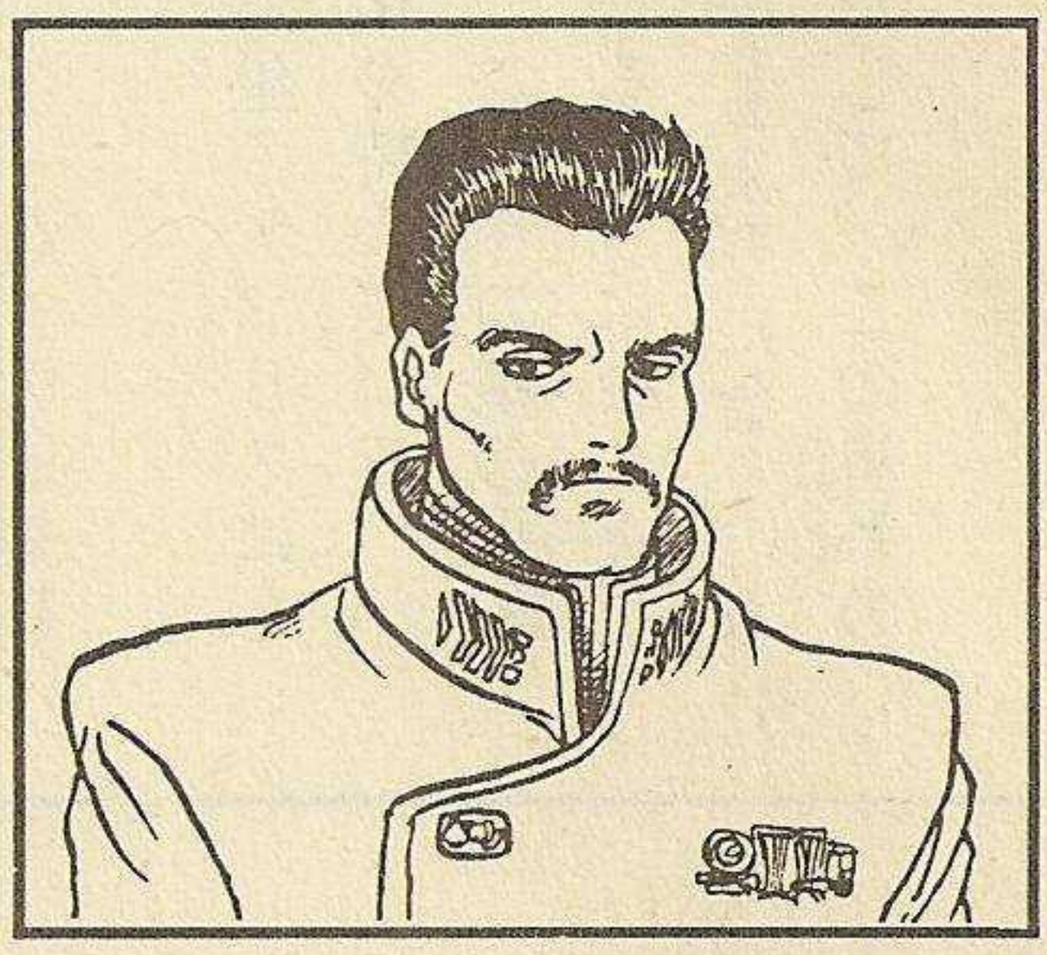


登場人物



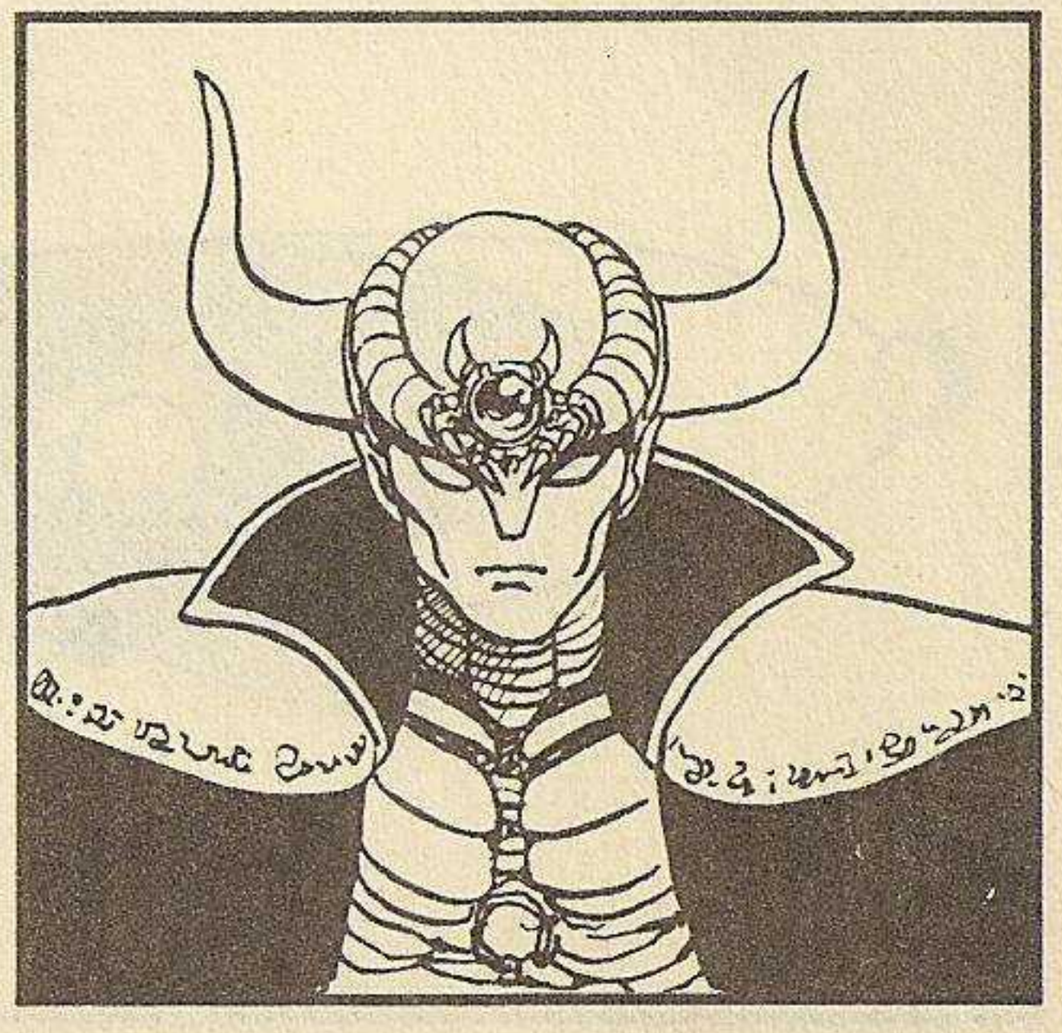
ルベノ博士

パルマ星最大の科学者。なんといっても、この人はたった一カ月分の食費で、宇宙船を作ってしまうのだ。気が狂ったとされて、牢獄に閉じこめられているが、けっこう生活を楽しんでいるようだ。



モタビア星総督

アルゴル太陽系第2惑星の支配者。でも、ラシークが太陽系の実権をにぎってからは、影が薄いのである。そんなわけで、アリサたちを助けてくれたりする。いい人である。



ラシーク

とてつもなく悪いヤツである。王だったのだが、自分の永遠の命と引き換えに、アルゴル太陽系を邪教――『混沌』のものに売り渡してしまった。この男のせいで、アルゴルはもう破滅に向かって一直線！

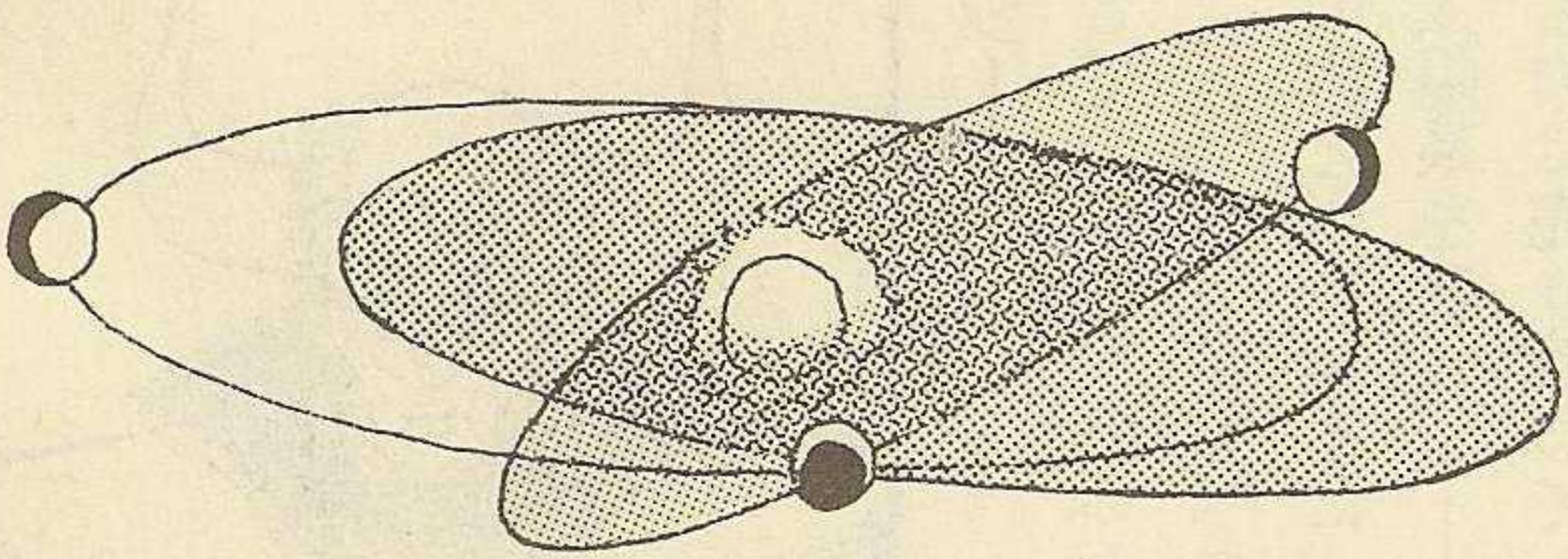
ファンタシースターの世界

ファンタシースターは、地球から遠く離れたアルゴル太陽系が舞台だ。アルゴル（太陽）のまわりを、3つの惑星がまわっている。別名、3惑星連合。

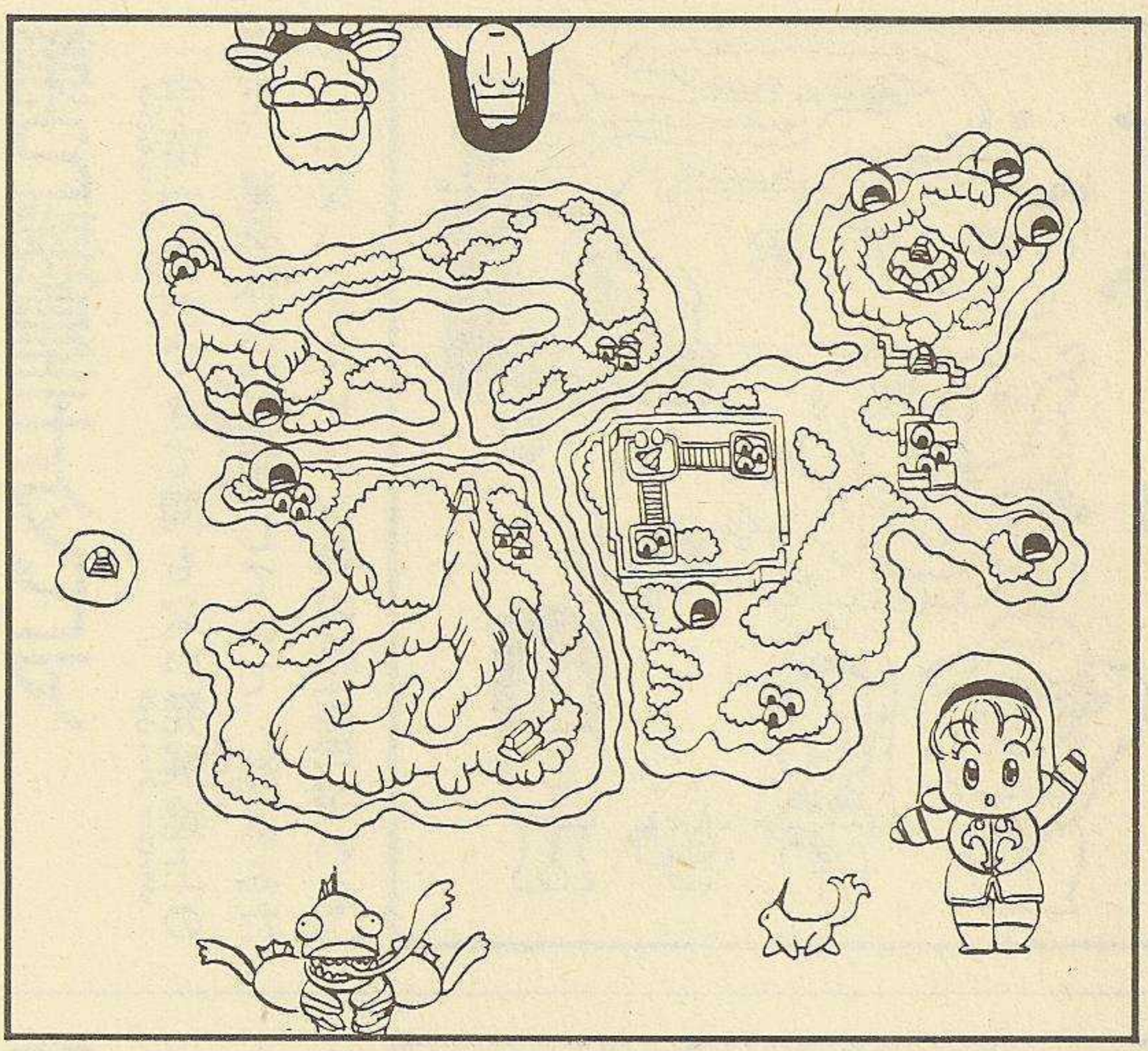
第1惑星のパルマ星に住んでいる人々は、現在の地球人とほとんど変わらない姿をしている。たびたび、科学はもっと発達していて、近くの惑星に植民地を築いているほどだ。

第2惑星のモタビア、第3惑星のデゾリスにも原住民がいて、それぞれの文化を持っている。

ラシークが王になってから、これらの星の平和は破られ、不気味な現象が起こるようになった。奇怪な動植物が陸や海に出現するようになり、人を苦しめはじめたのだ。はたして、この星系の運命は……？



第1惑星パルマ



地球と同じように、海が大きく、陸地も緑に覆われた星だ。

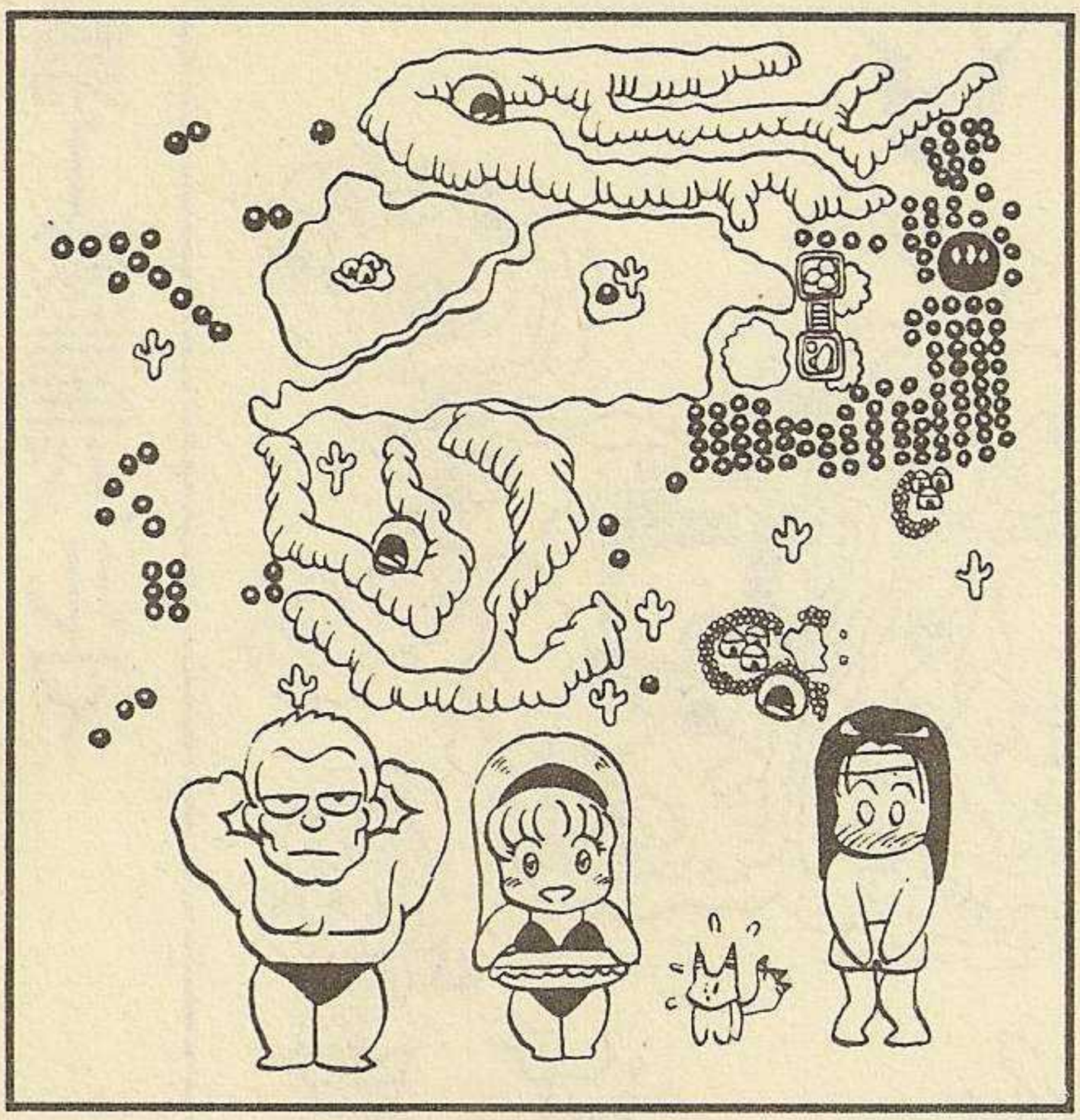
文明も古くから発展し、今ではモタビア星やデゾリス星にも進出、開発するにいたっている。

アリサが冒険をスタートするのは、この星だ。

地形が複雑で、草原、森、海岸、丘、溶岩地帯、洞窟、島とバリエーションに富んでいる。また、町や村の数も3惑星中、一番多い。いろいろ見たり、聞いたりするといいだろう。牢獄や塔なども重要なことが多いので、要チェック。そのかわり、手強い敵がわんさといる。心してかかれ！

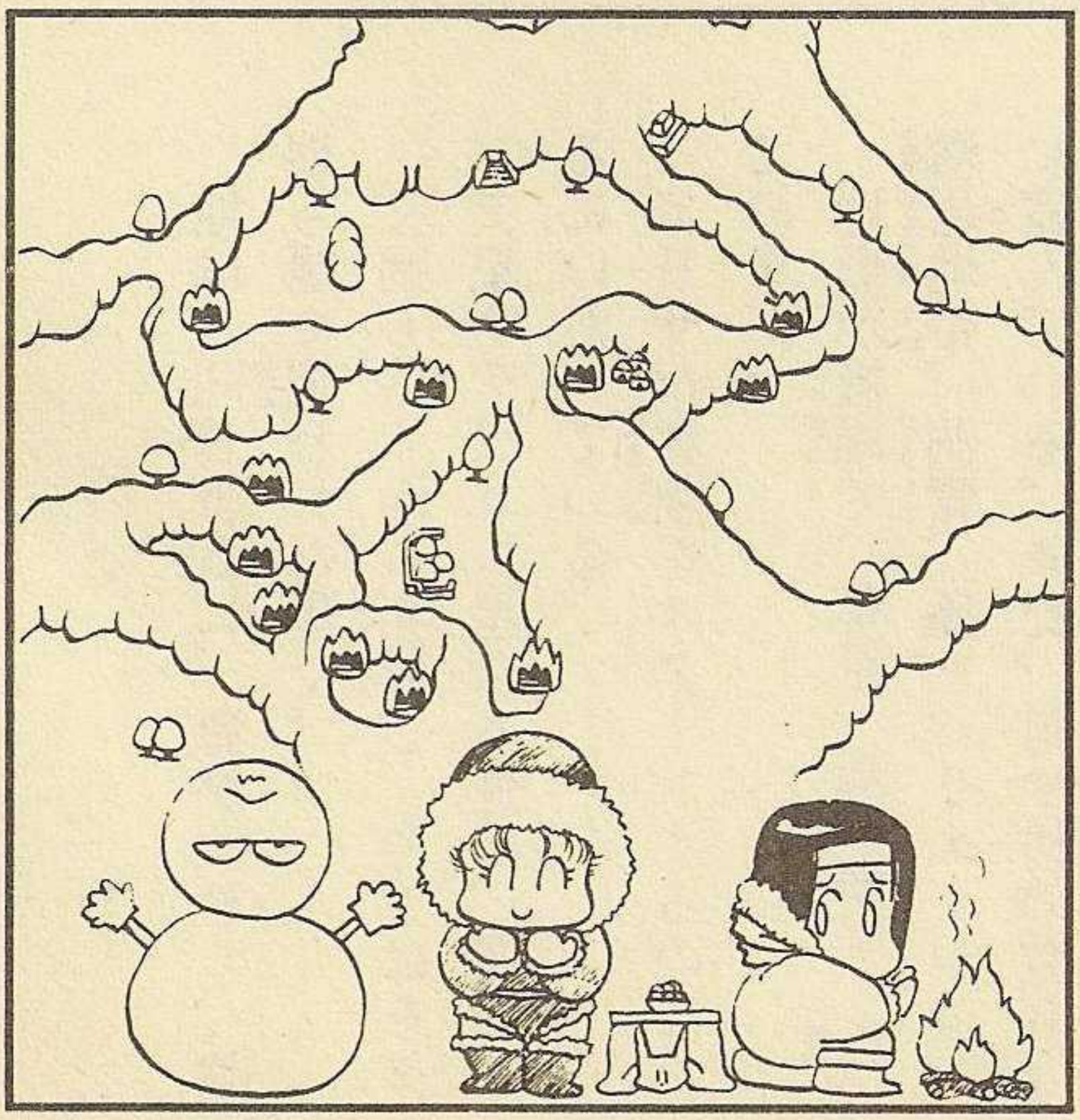
第2惑星モタビア

宇宙空港ができて間もない発展途上の星だ。星全体が砂漠化していて、湖はふたつしかない。モタビアン系の原住民がいる。



第3惑星デゾリス

雪と氷の星だ。パルマからの移民は、スクレという町にいる。また、デゾリアン系の原住民が小さな村を作っている。



ファンタシースター

アリサの冒険

ネロの遺品を整理していたアリサは、地下倉庫の中で宝箱を見つけた。

「50メセタもあるわ。きっとラシークを倒すために集めていた軍資金なのね」（50メセタ入手）

宝箱の中には、ショートソードも入っていた。その短剣を握りしめるアリサの目に、死んだ兄の姿が浮かぶ。

――旅の途中でタイロンという強い男の話を聞いた。彼を仲間にすれば、ラシークを倒せるかもしれない。タイロンは、人の言葉を話すネコを連れている。

これが、兄ネロの残した最後の言葉だった。

「タイロン……。いったい、どんな人なんだろう？」

アリサの長い復讐の旅が、今始まった。まず、その第一歩は、

●兄の友人ネキセを訪ねる ……⇩21へ　**●アーマーショップへ行く** ……⇩68へ

2

戦闘後、アリサたちはすぐに宇宙空港に着いた。

（空港内の病院にて、傷の手当てが可能。10メセタ払うと、HPがプラス2される）

なんとかその日の最終便に乗りこみ、一行はモタビア星のパセオに到着。すぐに総督の

屋敷を訪ねてみる。

「ナンダ、オマエタチハ？」門のところで、警備のロボットが前をさえぎった。「ナニ、総督ニ会イタイ？　贈リ物ハ持ッテキタカ？　甘イモノダゾ」

●チーズケーキがある……⇨153へ

●ふたつともない……⇨28へ

3

金髪のクニヌーヌの店。

「え、言葉を話すネコですか。もの好きですねぇ。50メセタでどうですか？」

●やめて、黒髪のほうの店へ……⇨56へ

●50メセタ払う……⇨77へ

4

血走ったひとつ目でガンを飛ばしたデビルバットは、アリサめがけて急降下！

アリサは肩から鮮血をほとばしらせてうめいた。怪物の羽はカミソリのように鋭かったのだ（HPマイナス1）。

「このーっ、乙女の柔肌になんてことをするのよ！」アリサは、ズタボロになるまでデビルバットに切りつけた。どうやら、血を見ると逆上するタイプらしい。怪物は、目を点に

して息絶えたのだった（**戦闘Pプラス1、プラス10メセタ**）。

そのまま進んでいくと、森のはずれに出た。思ったよりも小さな森だったようだ。

●このまま平原へ行く……⇩18へ

●海岸へ行く……⇩101へ

5

シオンのアーマーショップは、ヨロイの専門店だった。今着ているレザークロスより丈夫なライトスーツが、30メセタで売っているが。

（買う人は、マイナス30メセタで、ライトスーツをアイテムリストに書きこむこと。そして、戦闘Pプラス1。買わない人は、なにも書かないこと）

店を出たアリサは、その足で港のほうに向かった。

⇩106へ

6

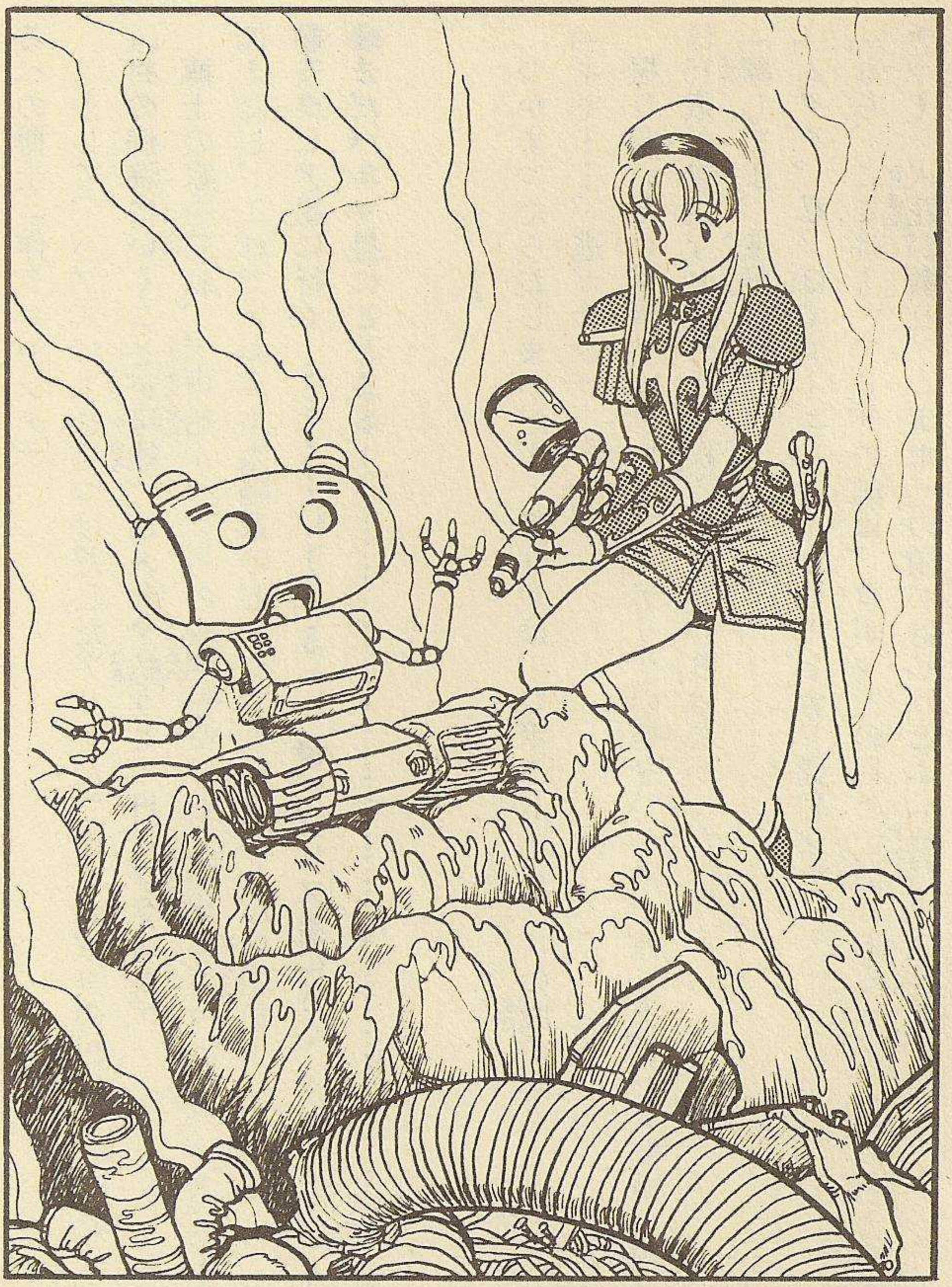
アリサは、ポリメテールをスクラップ置き場にまきちらした。そのききめは強力で、あらゆるものがドロドロに溶けていく。――そしてラコニア製のものだけが残った。

「見つけた！　このロボットがハプスビーかしら？」

「動かないな。蹴飛ばしてみようか」

「ヤ、ヤメテクダサイ」ロボットは、急に立ち上がった。「ワタシハぷすびーとイイマス。

5~6



6●ポリメーテルの効き目はものすごく、ロボットはすぐに見つかった。どうやら、これがハプスビーのようだが。

るべの博士ニ作ラレマシタ」

こうして、ハプスビーを見つけだしたアリサたちは、ガシコの村にもどった。

（村の病院にいくことが可能。20メセタ払うと、HPプラス5）

博士の家を訪ねね、宇宙船ルベノ号の説明を受ける。操縦ロボットのハプスビーも仲間に加えたし、これでアルゴル太陽系のどこにでも行くことが可能だ！

●モタビア星に行く……⇨165へ

●まだパルマ星にとどまる……⇨405へ

●デゾリス星に行く……⇨207へ

7

つかまったらおしまいだ！　アリサは、ロボットの間をくぐった。

「ギギ……。逃ガサン」

振り向いたロボポリは、すばやくアリサの襟をつかんで持ち上げた。

は15歳の少女など子ネコを扱うのと変わりはなかった。

「離してよ、変態ロボット！」

「ムダダ。私ノ手ハ万能ロボポリの頭がはじけとぶ（戦闘Pプラス1）。

「なら、ここはほでいーニしょーとそーどナド通用シナイ」

チッ！　火花が散り、ロボポリの目の位置にあるカメラをつらぬいた！　バ

間一髪、レザーシールドが、破片からアリサを守ってくれた。

「こっちよ、アリサ！」

アリサは、ビルとビルの間に飛びこんだ。

「スエロおばさん！」

「しっ」そこに潜んでいた女性は、口の前に指を立てた。

残ったロボポリは、気づかないまま通りを歩いていく。

「もうだいじょうぶよ」その女性は、アリサの唯一の肉親、叔母のスエロだった。「危険だから、仇討ちなんてやめなさい……なんていっても聞く娘じゃないわね。でも、戦いで傷ついたときは、いつでもうちにいらっしゃい。ヒール（治療）のマジックで治してあげるわ。絶対、無理をしないでね」

「ありがとう、叔母さん。兄さんの敵を討つまで死ぬわけにはいかないわ」

アリサはスエロの手を強く握った。

40へ

8

「あれれ、いっけない！　入口にもどっちゃったじゃないの。えーい、あたしは方向音痴なんかじゃないぞ！」

アリサは、再び洞窟の奥に入っていった。

110へ

……アリサ 9

「おはよう、アリサは悪夢から目覚めた。あのイロンが聞いてもキャットフードがなくならない夢を見たらしいぜ」

「まさに悪夢よ。怪物に襲われて、あたしたちが全滅する夢」

「げっ！　不吉な。オレは、かわいこちゃんの大群に襲われる夢だったし、ミャウなんかは、いくら食っても――あ、総督だわ」

「それにしちゃ、そっちも顔色が悪いわね。――」

「あー、そのまま、そのまま。今日は、キミたちにこれをあげよう」

総督は、1通の封筒をアリサに渡した。

「パセオの北に、『マハルの洞窟』というのがある。そこに、ルツという超能力者がいるんだが、この手紙を持って会いにいくがよい。きっと心強い味方になってくれるはずだ」

「ありがとうございます」

「なんのなんの。ラシークを倒して、きっとここへもどってくることを信じているぞ」

●Dにチェックがある……⇩73へ

●ない……⇩122へ

9〜12

幸運にも助けられ、アリジゴク帯を突破したアリサたち。なんとか、でたどりついた。

洞窟内に入り、T字路の所まで進む。すると、そこで後方にシャッターが落ちた。

「ち！　とにかく進むしかないようだな……」

●東に進む……⇩119へ

10

●西に進む……⇩58へ

11

これだけのロボット・ポリスを相手にして、まともに戦うつもりはない。要は、ヤツらの足を止めればいいことだ。

アリサは、ロボポリの頭をすばやく攻撃した。正確な一撃でTVカメラを叩き割っていく。降下してきたロボポリたちは、すべてアリサの剣のえじきとなった（**戦闘**Pプラス1）。

⇩65へ

12

トリニダの牢獄。アリサたちは、いきなり正面から入っていった。

「オイ、オマエタチハ何者ダ？」

背後の扉が閉まり、前からはロボットが現われた。

「うわっ、いきなり見つかっちゃった。だれよ、むしろ正面からのほうが意外性があって、うまくいくって言ったの」

●ロボットと戦う……⇩105へ

13

「ふん、的がいっぱい飛んでやがるぜ」

タイロンは不敵な笑みを浮かべると、ニードルガンをホルスターから抜いた。

発射される針は、長さ0・01ミリのスーパー・ハイ・スチール・マンガン製。高圧のガスにより1秒間に500本以上が発射される。まともにくらえば、人間などアッという間にサボテンのようになってしまうのだ。

タイロンは、空に向けてトリガーを引いた。

体中をつらぬかれたゴールドレンズどもが、おもしろいように落ちてくる。

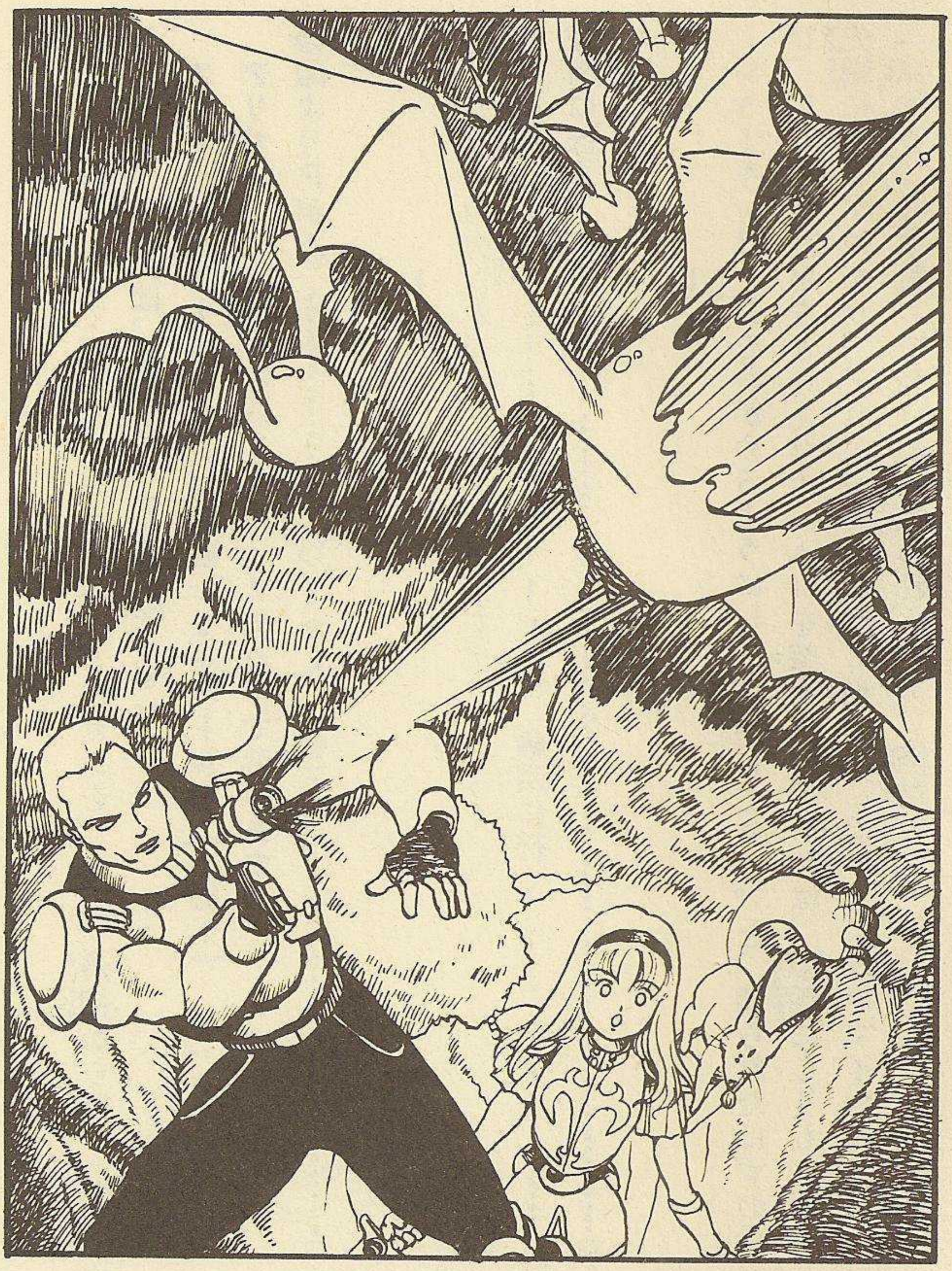
ガス・カートリッジをすばやく交換し、さらにトリガーを絞る。

空を覆うだったゴールドレンズの大群は、もうまばらに飛んでいるだけだ。

このタイロンという男、単なる筋肉だけの男ではないようだ。近代兵器の知識を持ち、その扱いもたしかな腕を持っていた。

●なんとか話してみる……⇩157へ

13



13● 「的がいっぱい飛んでやがるぜ」タイロンは、ニードルガンを発射した。ゴールドレンズを次々と撃ち落とす。

「すごいわ、タイロン！」
「ゲームはここまでだ」タイロンはニードルガンをしまい、最初(さいしょ)からちかえた。「お次は、あのガイコツ野郎(やろう)だぜ」
スケルトンとゴールドレンズ数匹　6＋バトルP（1のI）
アリサたち　戦闘(せんとう)P＋バトルP（2のD）で戦います。
●敵よりPが上……⇩38へ
●下……⇩71へ

14

またしても分かれ道だ。このT字路をアリサは？
●東に行く……⇩113へ
●南に行く……⇩61へ
●西に行く……⇩80へ

15

シャーキンは、腰(こし)をかがめるようにして上陸(じょうりく)してきた。と、切られたはずの舌(した)がまた伸(の)び、アリサの右足をとらえた！　ふいを突(つ)かれたアリサは、砂浜(すなはま)にしりもちをつく。舌の先端(せんたん)にはトゲがあり、それが彼女の皮膚(ひふ)に食(く)いこんでいた（HPマイナス2）。
「痛(いた)つ！　2枚舌ってわけか。嫌(きら)われるぞお、怪物(かいぶつ)め！」

シャーキンは巨大な爪を広げ、アリサににじりよってきた。その肉切り包丁のような爪にかかっては、アリサなど料理前の肉の塊のようなものだった。

（こうなったら、いちかばちかだ）アリサは、再び舌を断ち切った。

「シャッ！」バランスを崩したシャーキンは、目の前に飛んでくる何かを見た。次の瞬間、その何か――アイアン・ソードが、深々と半魚人の頭をつらぬいていた（**戦闘Pプラス1、プラス40メセタ**）。

「ふー、やっとやっつけた。――あれ、あの町がシオンかしら」

アリサは、岬の先に見える町に向かって歩き出した。

16

マンイーターどもは、わさわさと触手をうごめかし、アリサの前後にまわりこんだ。

前のヤツの胴体に裂け目ができたかと思うと、そこから何かが噴き出した。

アリサは、すばやく身をひねり、敵の本体に剣をふるった。ハクサイトよりたやすく、マンイーターは真っ二つ！

もう1匹！　振り向いた瞬間、アリサの体に何かがかかった。ジューッ！　白い煙がのぼり、武具を焦がしていく。溶解液だ！

「キャア！」

⇩72へ

すき間から入りこんだ1滴が、アリサの脇腹を焼いた（HPマイナス1）。
「このーっ、跡が残ったら、どーするのよ!!」
アリサはひるむどころか、猛然とそいつに切りかかった。怒りのパワーが爆発！　1分後にはマンイーターはみじん切りになっていた（プラス40メセタ）。
「サラダにもなりゃしない。――おっと、早く宇宙空港に行かなくちゃ」

アビオンの塔を出たアリサたち。さて、これから？

●メデューサの塔に行く……⇩411へ
●デゾリス星に飛ぶ……⇩165へ
●モタビア星に飛ぶ……⇩405へ

117

平原を歩くアリサの耳に、ブーンという音が飛びこんできた。1メートルもありそうなハエが、草原をはうように飛んでくる。モンスターフライだ！

アリサ　戦闘（せんとう）開始（かいし）

●敵よりPが上……⇩32へ
●下……⇩66へ

118

タランチュラは、口から糸を吐き出してきた。
それにからまれないように、アリサたちはすばやく攻撃した。
の胴を裂き、アリサの剣が頭をつらぬく！
「よし、いいぞ。タランチュラを倒すには、速攻が一番だ。完全に糸をはられたらやりにくくなるからな」

●東に行く……⇩111へ

●南に行く……⇩189へ

190

鮮やかにアリサの剣が舞った。
剣がもとの鞘に収まると同時に、ウイングアイの残骸が地面に落ちてきた。
間に2匹ともやっつけたアリサは、大きく息をついた。
道の先は行き止まりになっていた。しかたなく、あともどりする。

⇩110へ

211

兄の友人ネセの家は、カミニートのはずれ、宇宙空港ゲートのすぐそばにあった。
「タイロンを探しているんだって。たしか、シオンで見たっていう話を聞いたな」

「シオンって、あの港町の」
「うん。――キミの兄さんから、この壺をあずかっていたんだ。ラコニアン・ポットといって、大変貴重なものだ。きっと、あとで役に立つよ」――**（ラコニアン・ポット入手）**
「これ以上、力になれなくてごめん……」――突然、目を伏せた。
アリサは、黙って首をふり、ドアを閉めた。
そのとたんだった――。アリサの前に、銀色の巨人が立ちふさがった。
「ありさダナ。我々ト一緒ニ来テモラオウカ。反逆罪ノ容疑デ逮捕スル」
ロボット・ポリスだった。それも2体！　はやくもラシークの手が伸びてきたのか!?

●レザーシールドを持っている……⇩76へ

●持っていない……⇩86へ

22

「ヘビのくせに、寒い所が好きなんて……。だから、低温動物っていうのね」
「なんか違う」――などと言っているうちに、フレームリザードが飛びかかってきた。アリサが身をかわし、大蛇は壁に激突した。
怒りの声をあげ、振り向く大蛇。だが、そのすぐ上からタイロンのオノが落下した。ズ

22〜24

ン！　アリサたちをにらみながら、フレームリザードの首が転がった。
先が行き止まりになっていたので、一行はもと来た道を引き返した。

23

パトリロ居住区内に入った。この、カミニートから一番近い居住区でアリサはふたつの情報を得た。ひとつは、ここのアーマーショップが剣の専門店だということ。ふたつは、海岸線をずっと東に向かえば、港町シオンへたどり着くということだった。
シオン。ネキセの言葉の中にあった町。タイロンがいるという町ではないか。一刻も早くシオンに行きたいアリサだが……。ここは、

●アーマーショップへ行く　……⇩62へ

●さらに情報を集める　……⇩92へ

24

「あれじゃ、一方的よ。茶色いほうはショートソードしか持っていないじゃないの」
言うが早いか、アリサは飛び出していった。タイロンとミャウもそのあとを追う。
青い直立ネズミの群れ　15＋バトルP（1のH）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2の1）で戦います。
●敵よりPが上　……⇩135へ
●下　……⇩97へ

●下　……⇩140へ

アリサは、男から聞いたツールショップに足を運んだ。パトリロ居住区で助けたヒゲ男の名を言うと、店の親父はすぐに御禁制のロードパスを出してくれた。しかもタダ！

「やったね♡これがあれば宇宙空港にも入れるわ」（ロードパス入手）

●アーマーショップへ行く……⇩5へ

25

十字路に出た。

●東に進む……⇩311へ

●南に進む……⇩303へ

26

●西に進む……⇩327へ

●北に進む……⇩240へ

27

「ケケケ、ドコカラ食ッテヤロウカ。頭ガイイカ、ソレトモ尻ガイイカァーッ」

飛びかかってくるマンチコート！　アリサは、うろたえずに剣を突き出した。

グサッ！　剣先がみごとに、獣の額をつらぬいた！

「でかい図体のくせして口先だけなんだから」

アリサは、黒髪のクニヌーヌの店へ向かった。

（戦闘Pプラス2、マジックPプラス1）

⇩77へ

25〜30

「ナァニィ！
「えーっ！　せっかくここまで来たのにそんなことくらいで。こうなりゃ強行突破よ！」
警備ロボット9＋バトルP（1のG）
アリサたち戦闘P＋バトルP（2のA）で戦います。
●敵よりPが上……⇩46へ
●下……⇩75へ

28

甘イモノヲ持ッテイナイダトォ！　ナラバ、ココハ通セナイナァ！」

29

（いちかばちかだ！）アリサは、必殺の気合いをこめて切りかかった。
だが、剣は怪物の向こう側にすっと吸いこまれてしまった。
「剣が効かない！」
飲みこまれたのは剣だけではない。アリサの体は、そのままナイトメアの体に吸収され
⇩9へ

30

血走ったひとつ目でガンを飛ばしたデビルバットは、アリサめがけて急降下！
一見あわてたように見えるアリサだが、じつは冷静だった。すれ違いざまに剣をふるい、

デビルバットの羽を切り落とす！
羽を失った怪物は、目玉だけとなり森の小道をゴロゴロと転がっていった（戦闘Pプラス1、プラス10メセタ）。
●平原へ行く……⇩18へ
そのまま進んでいくと、森のはずれに出た。思ったよりも小さな森だったようだ。
●海岸へ行く……⇩101へ

31

北の壁にドアがひとつ。東西に通路は延びている。
●東に進む……⇩181へ
●ドアを開ける……⇩114へ
●西に進む……⇩128へ

32

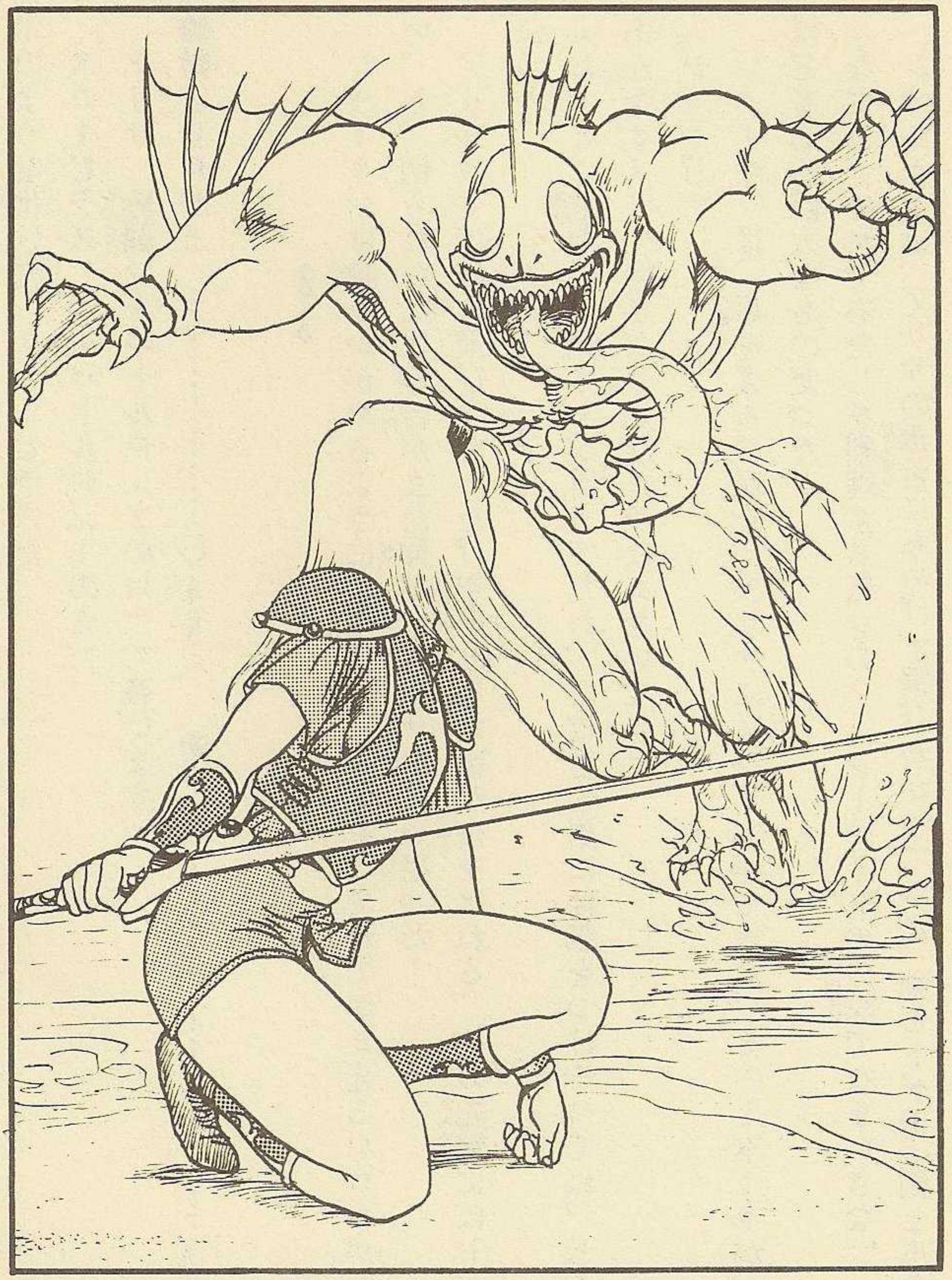
アリサは草むらに身を沈めつつ、剣を上に突き出した。
ズズッ。肉を切り裂く手ごたえが伝わってくる。
すぐ上を通過しようとしたマヌケなモンスターフライは、真っ二つになり、地面に転がった（戦闘Pプラス1、プラス5メセタ）。
ホッとするまもなく、別の羽音が聞こえてきた。今度は、鋭い牙とシッポを持ったトン

31〜33

ボのような化物、スコーピラスだ。
スコーピラス　1＋バトルP（1のA）
アリサ　戦闘P＋バトルP（2のH）で戦います。
●敵よりPが上……⇩45へ　●下……⇩89へ

33

シャーキンは腰をかがめるようにして上陸してきた。てかてかと光るウロコが気持ち悪い。と、切られたはずの舌がまた伸び、アリサの足を狙った！
アリサはすばやく飛びすさった。空振りした舌が宙をはねる。その先端にはトゲがあるようだ。
「おっと、危ないわ、2枚舌の男には気をつけろってね。ところで、あんたオス？」
「シャッ!?」
シャーキンは爪をぎらつかせ、アリサににじりよってきた。その1本1本が、ナイフほどもある巨大なものだった。
「なによ、それであたしを料理する気なの？　シーフードの分際でなまいきな」
シャーキンは、アリサの毒舌にもめげず飛びかかってきた。剣とトゲ舌、剣と爪の戦い！



33●シャーキンは、爪(つめ)をぎらつかせ、アリサににじりよってきた。
「シーフードの分際(ぶんざい)でなまいきな！」と、アリサ。

一進一退の攻防が続く。

「あっ！」慣れない砂地に足をとられ、アリサがしりもちをついた。

シャーキンは、しめたとばかり覆いかぶさろうとする。

「よるな、息が魚くさい！」アリサは必死で砂をつかむと、目の前の醜悪な顔に叩きつけた！　よろめくシャーキンの胸を刺し、とどめを刺す（**戦闘Pプラス2、マジックPプラス1、プラス40メセタ**）。

「ふー、やっとやっつけた」肩で息をし、立ち上がるアリサ。「あの町がシオンかしら」

彼女は、岬の先に見える町に向かって歩きだした。

⇩72へ

34

「やーねえ、きったこそ泥よ。あー、やだやだ」と言って、おばさんは眉をひそめた。

そうかもしれないし、反政府活動の一味かもしれない。どちらであろうと、アリサには助ける気はなかった。ここで騒ぎを起こしてラシークに動きをさとられるのはまずい。

男はロボット・ポリスに麻酔弾を撃ちこまれ、どこかに運ばれていった。

アリサもここが潮時のようだ。次は（アイアン・ソードがあれば、シオンへ、なければ店へ）。

●シオンへ……⇩101

●店へ……⇩62

「ケンカをふっかけられない限り、ムダな戦いは避けたほうがいい」と、タイロン。
アリサたちは、直立ネズミに見つからないようにあともどりした。大岩の反対側に回りこむ。

⇩170へ

35

宇宙船は何事もなく、モタビアの首都パセオに着陸した。
時間をムダにはできない。さっそくアリサは、クニヌーヌという商人を探し始めた。
〝言葉を話すネコ〟がそういるわけじゃない。珍獣・奇獣を扱うマーケットを歩き回ったことに、「えー!?かいがあって、クニヌーヌの居場所はすぐにわかった。——しかし、困ったんって、ふたりもいるのォ？　金髪のクニヌーヌを訪ねる……⇩3へ
すネコ〟を持っているんですって？　どうしよう……」

36

●金髪のクニヌーヌを訪ねる……⇩3へ
●黒髪のクニヌーヌを訪ねる……⇩77へ

37

L字形の曲がり角に出た。

●東に行く……⇩80へ
●北に行く……⇩61へ

35〜39

頭上を気にしない分、アリサたちは戦いが楽になった。
タイロンがゆうゆうとスケルトンを打ち砕き、アリサは残っていた
き落とした。
「まあ、こんなものですな」（戦闘Pプラス2、プラス50メセタ）

⇩2へ

38

39

「もしかしてこれがタイロン？」
へたぶんそうだ。早く、アリサ、早く！〉
「はいはい、この薬をかければいいのね」
アリサは、ミャウの首にかかっている小ビンを取った。中には、
殊な薬品が入っている。
シューッ。
らかみを帯びたちまち石像の表面が変化を始めた。灰色一色だったものが色づき始め、柔
やがて、ひとりの大男が息を吹き返してくる。
「う……。おや、ここは？　それにキミは？」大男――タイロンは目
アリサは、事情を説明した。

「そうか。ありがとう、助かったよ。石になっているのは退屈でいかん。しかし、メデューサにしてやられるようでは、ラシークは倒せそうもないな」

「あたしの兄さんも、ラシークを倒そうとして死んでしまったわ。死ぬ前に、あなたの名前を言い残して……」

「そうだったのか」タイロンは、遠くを見るような表情をした。「よし、キミの兄さんのためにも、力を合わせてラシークを倒そう！」

一声鳴いて、ミャウが主人の肩に飛び乗った。――さて、それじゃ、この陰気な洞窟を出るとしようぜ」タイロンは持っていたオノを持ち直した。

⇩70へ

40

アリサは、カミニート居住区の外に出た。ここから先はまったくの無法地帯。どんな怪物が出るかわからない。しかし、ここでびびっていては、打倒ラシークなど夢のまた夢だ。

さて、どちらのほうへ向かうか？

●平原……⇩59へ

●海岸……⇩101へ

●森……⇩18へ

40〜42

「きゃーっ！　あたし、ネバネバしたものは受けつけないのよ！　納豆とかトロロとか」

グリーン・スライムが、アリサの胸に飛びついてきた。

きゃーきゃーきゃー言いながら彼女は、それをひきはがし、地面に叩きつけた。さらに激しく死闘は終わって、めためたにスライムを踏みつける。

道の先が行き止まりになっていたのでした……。

「はぁ、はぁ……今夜変な夢見そう」

バサバサ……。急降下してきたウインドアイは、その鋭い羽でアリサを襲った！　頬と手から、すっと血が細く流れる（HPマイナス1）。

だが、アリサはあともどりした。

「このやろ、こめかせ、怪物2匹をなぎはらった。

地面に落ちたウインドアイをさらに踏みつける。

「思い知ったか！」――あら、この先は行き止まりだわ。もどんなきゃ」

⇩110へ

⇩61へ

今までに受けた傷が気になったアリサは、
「怪物と戦ったなんて。ムチャしちゃダメよ」と驚き、ブロンドの看護婦は、
スイッチを入れた。
まもなく体はもとどおりになり、アリサは治療装置の
飲んだ（**マイナス10メセタ、HPプラス2**）。薬局でもらったペロリー・メイトという薬を
元気になったとたん、アリサは再び町の中へ。

443

市内の病院に行った。

444

ガシコの村にやってきた。
（**病院にて傷の手当てが可能。10メセタ払うと、HPがプラス2される**）
ルベノ博士の家を訪ねたが、ネズミ1匹いなかった。村人の話によれば、
ったという理由で、トリニダの牢獄に入れられたという。
「どうもあやしいわね。とりあえず、その牢獄に行ってみましょう」
「あの牢獄には、地面に図を描いてみせた。
入り口が2カ所あります」ルツが、

●正面から入る……⇩**12へ**
●裏から入る……⇩**137へ**

⇩**94へ**

金属(きんぞく)をこすり合わせるような音を立て、スコーピラスが襲(おそ)いかかる！　アリサは体をひねって、怪物(かいぶつ)の牙(きば)をかわした。すかさず、剣をスコーピラスの胴(どう)に突(つ)き立てる。怪物は、きりもみしながら、地面に突(つ)っこんだ！　アリサが勝ったのだ（戦闘(せんとう)Pプラス1、マジックPプラス1メセタ）。

●パトリロ居住区(きょじゅうく)に入る……⇩23へ

●海岸(かいがん)へ行く……⇩59へ

●森へ行く……⇩101へ

45

再(ふたた)び歩き始めたアリサ。その行く手に、パトリロ居住区のゲートが見えてきた。

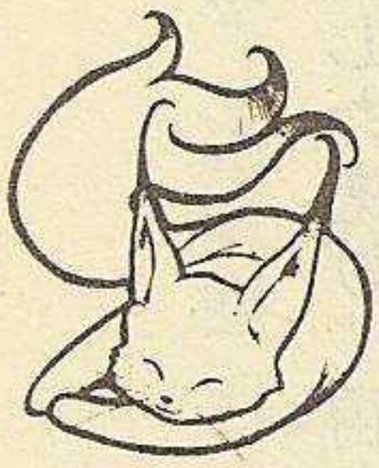
46

「強行突破(きょうこうとっぱ)ダトウ！　ヤレルモノナラ、ヤッテミロ！」

「やるわよ、それ！」

ズズーン！　頭のカメラを破壊(はかい)された警備(けいび)ロボットは、その場で転倒(てんとう)した。

⇩174へ



せっかくパセオまで来たことだし、もう少し歩き回ってみよう。

47

ところが、さんざん歩き回って、足を棒にしたあげく得られた収穫は、「督は甘いものが好き」ということだけだった（**Bをチェック**）。

「なんのこっちゃ？」アリサは、首を傾げつつ、宇宙空港に向かった。目ざすは、パルマ星。そして、メデューサの洞窟！

⇩103へ

48

アリジゴクどもの攻撃は、あまりにもしつこかった。切っても切っても切りがない。アリサたちは傷つきながらも、アリジゴク帯の端までたどりついたが……新手が砂の中から出てくる。アリサ（**戦闘Pマイナス2、HPマイナス1**）。

●現在のHPが4以上……⇩387へ

●3以下……⇩91へ

49

タランチュラどもが、アリサめがけて糸を吐き出してきた。毒物がふくまれているらしく、彼女の体はしびれて動かなくなる（**HPマイナス1、戦闘Pマイナス1**）。

「くそ、この大グモども！」

47〜50

タイロンが、クモの後ろに回りこんで、オノをふるった。タランチュラは、つた体液を噴き出し、真っ二つになる。

「あ……ありがとう」

ようやく糸から抜け出したアリサが、ホッとした顔で言った。

●東に行く ……⇩11へ　**●南に行く** ……⇩189へ

50

2匹のマンイーターは、わさわさと触手を波打たせて、アリサの前後に回りこんだ。

マンイーターの胴体に、裂け目ができたかと思うと、そこから何かが噴き出した！

「あっ、危ない！」アリサはすばやく身を伏せた。彼女の頭上を通り過ぎたそれは、もう1匹に命中！

すかさずアリサは前のヤツに切りかかった。ズサッ！　まるでキャベツを切ったような手ごたえ。マンイーターは、あっさりと地面に崩れ落ちた。

後ろのヤツを見ると、もう半分がたグジュグジュに溶けかかっている。さっき、仲間に浴びせられたのは、溶解液だったのだろう。

「やれやれ、煮こみ過ぎたシチューみたいね。――おっと、早く宇宙空港に行かなくちゃ」

⇩67へ

（戦闘Pプラス1、プラス40メセタ）

（ラシークの姿も見ずに、死ねるか！）
敵に対する怒りが爆発した。熱いものが体中から手に集まり、ほとばしった！
フレエリ！　火の球を発射する超能力だ！
火球を受けたナイトメアは、叫び声をあげた。顔をゆがませ、闇の中に溶けこんでいく
（Dをチェック）。
すべての力を使いきったアリサは、そのまま倒れこんだ。

⇩9へ

52

アリサは、剣をふるった！　さすがアイアン・ソード。一撃のもとに、首に巻きついていたものを切断した。
波間から、大きな目をした半魚人が姿を現わした。シャーキンだ！
ものは、そいつの長い舌だったのだ。

シャーキン　5＋バトルP（1のC）
アリサ　戦闘P＋バトルP（2の1）で戦います。
●敵より上……⇩33へ
●下……⇩15へ

51〜54

次々と襲いかかってくるゴールドレンズの大群！

「くそ！　ザコでも、これだけ集まるとしんどいな！」さすがのタイロンも声を荒げた。

さらに、地上ではスケルトンが、こちらのスキをうかがっている。

ゴールドレンズの大群とスケルトン　9＋バトルP（2のH）で戦います。

アリサたち　戦闘P＋バトルP（1のC）で戦います。

●敵よりPが上……⇩95へ

●下……⇩138へ

54

フレームリザードが、カッと口を開いた。そこから噴き出したより激しい冷気が、アリサたちを襲った！

「うわっ！」

獲物が身をすくませた一瞬のスキを逃さず、フレームリザードが飛びついてきた。巨体に似合わぬそのスピードで、アリサとタイロンにからみつく。骨まで砕けそうな怪力だった（HPマイナス2）。

「く、苦しい……」

と、その時、ミャウが大蛇の頭に飛び乗った。ミャウは、その鋭い爪を敵の両目に突き

立てた！
「今だ！」
先が行き止まりになっていたので、一行はもと来た道を引き返した。
絶叫をあげ、のたうち回るフレームリザード！
危機を脱したアリサたちは、反撃を開始。みごと、大蛇の首を切り落とした。

⇩140へ

55

「やーねえ、きっとこそ泥よ。あー、やだやだ」おばさんは、眉をひそめた。
「あ、何をするの!?　お待ちなさい、危ないわよ」
違う！　アリサの頭に別の思いがはじけた。
おばさんの制止などおかまいなしに、アリサの体は動いていた。
ロボット・ポリスなど、ラシークの手下ではないか！　あんな機械人形ごときが人間を殺すなんて許せない！
バスッ！　ロボット・ポリスがガス弾を発射！　男の行く手に白い煙が立ちふさがった。
男は、悔しそうにこちらを振り返った。ヒゲ面だが、まだ歳は若そうだ。
「くそ、バカロボットども！　オレはここで死んでやる！　敵はきっと仲間が……？」
「死ぬのは何も吐かんぞ！　きさまらにつかまるくらいなら、まだ早いわよ」
「キミは……？」

55

55●アリサは、青年をかばうように立った。ロボット・ポリスどもは、空中から襲(おそ)いかかってくる！　どうする!?

「仲間になったげる」アリサが、その青年をこの新たなるジャマ者に対し、ロボット・ポリスたちは戦闘態勢をとアを点火し、上空から襲いかかった！

ロボット・ポリス　3＋バトルP（1のD）
アリサ　戦闘P＋バトルP（2のA）で戦います。

●敵よりPが上　56

……⇩11へ

●下……⇩81へ

「へい、どうも金髪のクニヌは、アリサから金を受け取った（**マイナス50メセタ**）。店の奥から聞こえてきた。大きな茶色い影が、カウンターを飛び越えてくさまじい物音がする。

「うわ、オリを破って出てきやがった！　お客さん、今買ったのがヘホウ、コノ女ガ俺サマヲ買ッタトイウノカね、しゃべったでしょ。まちがいなく……ウマソウダナ〉ペロリとどう見ても、ネコじゃなく、「でも、あれは舌を出す獣。「た、ただの大きなネコですよ。あとは、飼い主にまかせましたよ！」ライオンだわ」そう言って、クニ

56〜58

ヌーヌはすたこらさっさと逃げてしまった。
もちろん、その獣は〝ただの大きなネコ〟ではなかった。ライオンの体に、羽とサソリの尻尾を持つ合成獣――マンチコートだったのだ。
マンチコート　6＋バトルP（1のB）
アリサ　戦闘P＋バトルP（2のG）で戦います。
●敵よりP上……⇩27へ

57

高さ2メートル近い、大男の石像だった。しかし、いったいそんなものがどうしてここに……？
まさか、アリサは首をひねった。
を、かついで持って行くわけにもいかない。アリサはその場をあとにした。L字路
●北に行く……⇩14へ
●西に行く……⇩37へ

58

L字路の曲がり角に来た所で、怪物が出現した。真っ赤なぶよぶよした塊――レッド・スライムが4匹！

レッド・スライム4匹　14＋バトルP（1のA）
アリサたち　戦闘（せんとう）P＋バトルP（2のG）で戦います。
●敵よりPが上……⇩145へ

59

アリサは、木々の奥深（おくふか）くに足を踏（ふ）み入れていった。昼でもなお薄暗（うすぐら）い森の中。パルマ星には、まだまだこういうところがあるというのだ。コウモリの触（ふ）れ合う音を聞いて、目線（めせん）を上げた。（リスかしら……？）
アリサは、葉などではなかった。不気味（ぶきみ）な羽（はね）を生（は）やした目玉が、じっとアリサを見おろしていた
それは、リスのひとつ目が、じっとアリサを見おろしていた
ウワサは聞いたことがあるが、実物を見るのは初めての怪物（かいぶつ）だった。幸（さいわ）い、1匹だけのようだが。
「なによ、そのひとつ目つき！　やるっていうの！」

デビルバット　2＋バトルP（1のG）
アリサ　戦闘（せんとう）P＋バトルP（2のJ）で戦います。
●敵よりPが上……⇩30へ
●下……⇩4へ

直立(ちょくりつ)ネズミの群(む)れは、きちんとした服を着ていた。青い服のヤツと、茶色の服のヤツら。どうやら、青いほうがビームガンを持って、茶色いほうを追い回しているようだ。

●茶色いほうを助ける ……⇨24へ

●助けないで立ち去る ……⇨35へ

60

今度は、十字路に出た。

「うーん、選択肢(せんたくし)がいっぱいあるなぁ。ど・れ・に・し・よ・う・か・な」

●東に進む ……⇨14へ

●南に進む ……⇨37へ

●西に進む ……⇨110へ

●北に進む ……⇨82へ

61

62

「おじさーん、これちょうだい♡」

アーマーショップの親父(おやじ)は、目を白黒させ、少女と受け取ったばかりの金を見比べた。

「お嬢(じょう)ちゃん、ホントにその剣を持っていくのかい？」

アリサは、アイアン・ソードを鞘(さや)から抜(ぬ)いてにっこりした。ずっしりとした重さが心強い（**アイアン・ソードを入手(にゅうしゅ)して、戦闘(せんとう)Pプラス1。マイナス30メセタ**）。

さて、これから、

●パトリロで情報を集める……⇩92へ

63

アリサは、男から聞いたツールショップに足を運んだ。御禁制のブツだけに店の親父はしぶい顔をしていたが、アリサはねばりにねばってロードパスを買うことができた（ロードパス入手。マイナス30メセタ）。とりあえず今は、

●アーマーショップへ行く……⇩5へ

●港町シオンに向かう……⇩101へ

64

――その夜。あまりの暑苦しさのため、アリサは目を覚ました。

「おかしいなぁ、エアコンが効いているはずなのに」もぞもぞとベッドからはい出る。

と、ドアが外から開いた。

「だれ？」――暗闇の中に、青白い光が浮かび上がった。ゾッとするような怪物の生首が見える。

怪物――ナイトメア　20＋バトルP（1のE）

アリサ――戦闘P＋バトルP（2のJ）で戦います。

●港町シオンに向かう……⇩101へ

●パトリロで情報を集める……⇩92へ

●港のほうへ行く……⇩106へ

63〜65

●敵よりPが上 ……⇩93へ

●下 ……⇩115へ

アリサたちは、まだうごめいているロボット・ポリスから逃げ、別の区画にやってきた。

「あんた、見かけによらず、えらく強いな」と、ヒゲ面の青年。

「運がよかったのよ。ロボポリどもは殺すのが目的じゃなかったようだし。……それより、さっき仲間とか、いろいろ言っていたけど？」

青年は自分のヒゲをいじくっていたが、やがて何かを決意したようだった。

「オレは、反政府活動をやっているんだ。ラシークが首相になってからというもの、隣りの星へも自由に行き来できなくなっちまった。そこでオレは、ニセのローダーパスを密売しているってわけさ。シオンに行くことがあれば、そこのツールショップに寄るがいい。オレの名を出せばタダでくれるはずだ」（**Aをチェック**）

「ありがとう、それがあれば宇宙空港にも行けるわ」

「それとだ」青年は、持っていたカバンから剣を取り出した。「アイアン・ソードだよ。1本持っていようが、2本だろうが多いにこしたことはない。こんな物騒な世の中だからな」

（アイアン・ソード入手。1本目の人だけ、戦闘Pプラス1）

アリサはもう一度礼を言って青年と別れた。シオンをめざし、海岸へ。

⇩101へ

モンスターフライの激しい羽ばたきがアリサの肩を打った（HPマイナス1）。

「痛いじゃないの、この！」

突き上げたアリサの剣がモンスターフライの頭をつらぬいた。緑色の液体をまきちらし、巨大なハエは地面に突っこんだ（**戦闘Pプラス1、プラス5メセタ**）。

ホッとする間もなく、別の羽音が聞こえてきた。今度は、鋭い牙とシッポを持ったトンボのような化け物、スコーピラスだ。

スコーピラス　1＋バトルP（1のE）

アリサ　戦闘P＋バトルP（2のB）で戦います。

●敵よりPが上……⇩45へ

66

宇宙空港のゲート。特別の許可なくして、一般人の立ち入りを許されていない場所だ。

「通ってよし」警備兵は、アリサのロードパスをちらりと見て、そう言った。「ん？　なんだ、もう行っていいぞ」

（もー、せっかく苦労（？）して手に入れたんだから、じっくり見てよ。ぷんぷん）

中の建物でパスポートを交付される（**手続き料金、マイナス40メセタ**）。

●下……⇩89へ

67

66〜69

赤いボディの宇宙船に乗りこんだアリサは、胸がおどった。宇宙に出るのは、何年ぶりだろう。幼い自分の手をひく兄の姿がまぶたに浮かぶ。

定刻どおり宇宙船は飛び立った。引力圏を離れ、モタビア星に向かう。

⇩36へ

アリサは、家のそばにあるアーマーショップに入った。そこは、盾専門の店だった。

「えっ、お嬢さん、街の外に出るんで。なら、盾を持っていかなきゃ、怪物にやられてイチコロですぜ」

「うーん。でも、高いものばっかり。それに、重い盾なんか持てないし……」

「なら、この革製のシールドはどうかね。ないよりはマシって代物だけどね」

(レザーシールドを買う人はアイテムリストに記入し、20メセタマイナスすること)

●ネキセの家に行っている ……⇩40へ　●行っていない ……⇩21へ

アリサは扉所までやってきた。

「開かないわよ。カギがかかっていて」

●ダンジョンキーがある ……⇩176へ　●ないのでもどる ……⇩111へ

「それにしても、なぜメデューサを倒そうとしたの？」
洞窟を抜けた。
「ん、あの化け物が持っているという伝説のオノが欲しかったんだよ。アリサたちは森に入っていしまった。もうあの洞窟にはもどってこないだろうな」
「ふーん」
「まあ、武器ならいくらでも手に入るさ。のアーマーショップで買おう」
ところが、いつまでたっても、村どころか廃虚すら見えない。
「ねえ、同じところをぐるぐる回っているような気がするんだけど……」
「や、しまった。この特製コンパスを使わなきゃ突破は無理だ」
「もう！　そんなに便利なものがあるんなら早く出してよ。歩きすぎて、足が太くなっちゃう！」
「や、しまった。ここは『迷いの森』なんだ。」
へタイロン、意外とおちゃめ〉とミャウ。
――そうしてやっと一行はエピの村に到着したのだった。
「なあ、アリサちゃん。買い物がすんだらモタビア星のパセオにいってみようぜ。あそ

この総督が、けっこうラシークを嫌っているらしいんだ。力になってくれるかもしれん」

「それもそうね」アリサはうなずいた。

●Bにチェックがある……⇩197へ　●ない……⇩146へ

71

スケルトンの剣とタイロンのオノが激突！　スケルトンの武器がぽっきり折れた。

「破壊力の差だな。さて、とどめだ――うわっ！」

突然、タイロンがのけぞった。生き残っていたゴールドレンズが頭上から攻撃をしかけたのだ！（HPマイナス1）

「タイロン！」アリサとミャウが、その空飛ぶ目玉を叩き落とした。

「心配ない、油断しただけだ」

タイロンはすぐに体勢を立て直し、スケルトンを攻撃した！　一瞬のうちにガイコツは真っ二つになった（プラス50メセタ）。

⇩2へ

72

港町シオン。――昔は貿易で栄えていたそうだが、港には貨物船はおろか、ちっぽけな漁船さえ浮いていなかった。ラシークが3惑星の実権を握って以来、あらゆる交通網に規

制がしかれているのだ。このさびれた港町に来たアリサは、

●人に聞いてまわる……⇩94へ

●病院に行く……⇩43へ

73

「どうした、アリサ？　なにか気にかかることでも」

「え、いや、なんでもないわ。ただ、昨夜の夢を思い出していただけ。そう、あれはタダの夢だ。今朝見た総督の顔に火傷の跡があったのも、単なる偶然にすぎない。

⇩122へ

74

アリサは剣をふるったが、ゾンビは一向に倒れなかった。いくら傷んでいる体にはダメージなど関係ないのだ。ゾンビは、あせるアリサのスキを突き、抱きついてきた。異様に長い爪を食いこませてくる（**HPマイナス1**）。ピンチ！　――と、思いきや、突然、ゾンビが力を抜き、アリサから離れた。ミャウが後ろから頭へゾンビの弱点は、頭だよ〉

「そうか！」アリサは、満身の力をこめて、剣を振り下ろした！　ズン！

脳を潰されたゾンビはゆっくりと崩れ落ちた。今度こそ本当に動かなくなった。

「サンキュー、ミャウ」危機を脱したアリサはL字路を、

●北に進む……⇩14へ

75

「強行突破ダトゥ！　ナマイキナ小娘メ！」

「いったぁ！　なにすんのよ、コブができたじゃない！」

アリサは剣を抜いてやりかえす。

ズズーン！　頭のカメラを破壊された警備ロボットは、その場で転倒した。

「あーら、あっけない。おほほ」（戦闘Pプラス1、マジックPプラス1）⇩174へ

76

高さ2メートル近い大男の石像だった。しかし、どうしてここに……？

「タイロン？」アリサは、石像を見上げてつぶやいた。

メデューサの目には魔力があるという。まさか、タイロンが逆に石にされたとか……。

といっても、かついで持って出るわけにもいかない。手のくだしようがなかった。

アリサは、石像の後ろの壁に穴が開いているのを発見した。光が見える。

●西に進む……⇩37へ

「洞窟の外に通じているんだわ。入る時、ここを使えばよかった」

ところがアリサが外に出たとたん、土砂が崩れ、その穴はふさがってしまった。

「間一髪！ ――でも、これからはどうしよう？ 今のままじゃ、何もできないわ」

考えたあげく、アリサはシオンで聞いた〝しゃべるネコ〟を追うことにした。たしか、パセオの商人に売ったとか言っていた。モタビア星のパセオ。

「とりあえず、宇宙空港に行かなきゃ」

⇩84へ

77

黒髪のクニヌーヌの店は、町のど真ん中にあった。

「ほー、しゃべるネコが欲しいのかい？ 値段は50億メセタってところかな」

「ご、50億メセタ！」

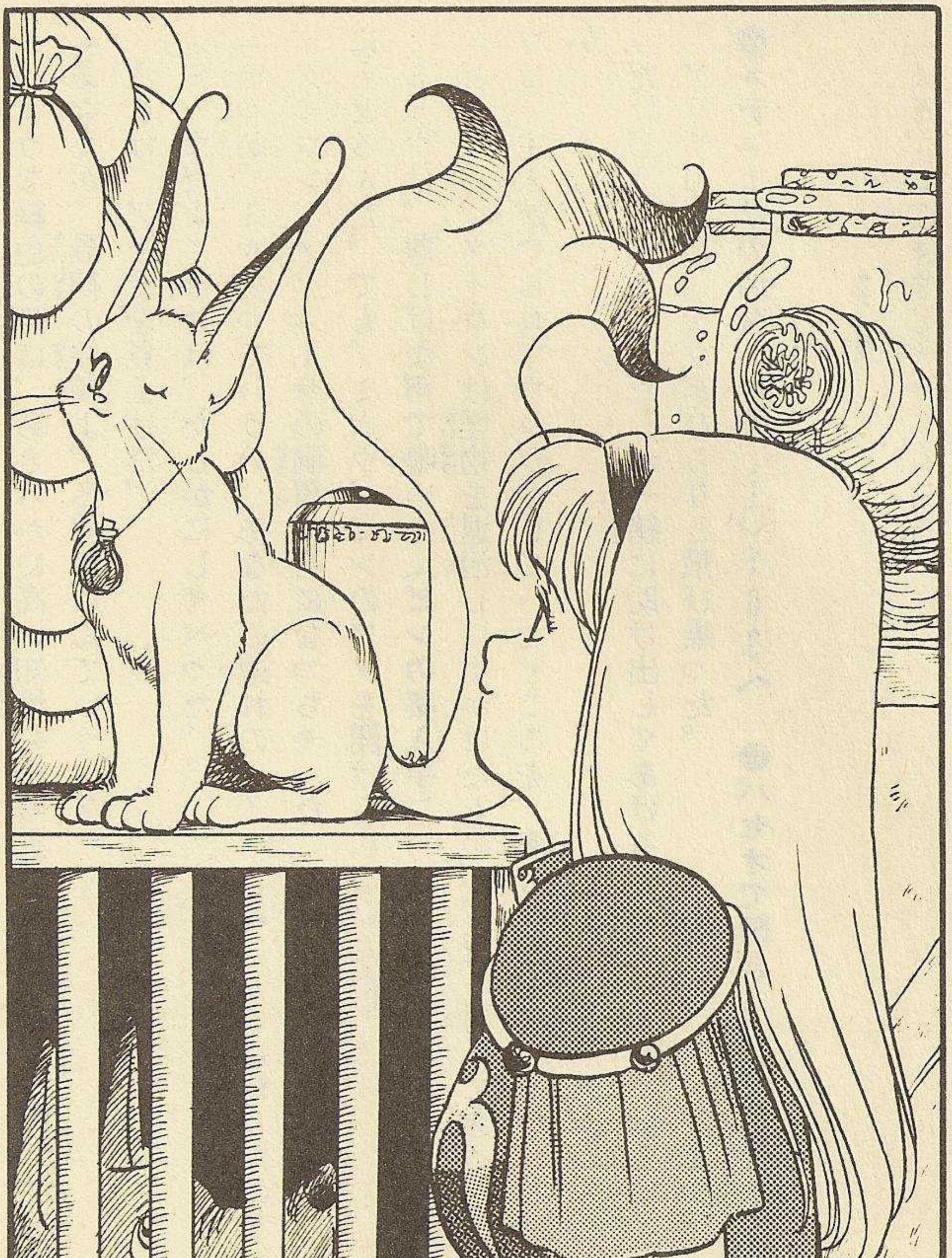
「はは、冗談さ。おや、珍しい壺を持っているね。それと交換ならタダにしてやるぜ」

願ってもない話だ。アリサは壺をクニヌーヌに渡した。兄が残したものが、こんなところで役に立とうとは（**ラコニアン・ポットを失う**）。

「さあ、この娘さんが新しいご主人だぞ」

カゴの中から、ゆっくりとネコが出てきた。外見からして普通のネコとは違っていた。長くとがった耳、3本のふさふさした尻尾。そして、首から下げた小さなビン。エメラル

77



77● 「名前はなんていうの」〈ミャウだよ〉ネコはそう答えると、アリサの肩に飛び乗った。アリサに仲間ができたのだ。

ドのような緑色の瞳は、あきらかに高い知性の持ち主であることを物語っていた。

「あなたが、最初の仲間よ。名前はなんていうの？」

ネコは、アリサを見上げた。

〈ミャウだよ〉

「そっか。ミャウっていうの。あなたの連れデューサの洞窟で石になっちゃった。このビンの中の薬を開けられないんだ〉

〈タイロン、メデューサの洞窟で石になったタイロンは、どこに行ったの？」

にもどるんだ。

ミャウは、悲しげな声で鳴いた（**ビンの薬入手**）。

どうやら、タイロンは怪物を退治しに出かけたものの、返り討ちにあったようだ。ミャウは、主人がやられてウロウロしていたところを、商人につかまってしまったというわけか。

「だいじょうぶよ、わたしが一緒に助け出してあげるわ」

アリサの肩にミャウがひらりと飛び乗った。

●メデューサの洞窟へ行く……⇨103へ

「くそ、このまじゃやられるぞ」

●パセオで聞きこみをする……⇨47へ

と、その時であった。なんとも言えない音色が、どこからともなく流れてきた。不思議なことに、アリジゴクどもはあわてて砂の中に潜っていく。

「どういうこと？」

へふう、なんとか間に合いましたわ。良かった〉アリサたちの前に、茶色い服を着た大きなネズミが現われた。手には、これまた大きな笛を持っている。

「あれ、さっきのモタビアンノーフじゃない」

へこの笛は、アリジゴクの嫌いな音を出す素敵なネズミさんなの！」アリサは、モタビアンノーフに抱きついた。

「まあ、なんて素敵なネズミさんですわ。お役に立てて嬉しいです〉

⇩10へ

波間から、大きな目をした半魚人が姿を現わした。シャーキンだ！

「く、ばなせ（離せ）」アリサは、その舌に切りつけた。

「シャッ」半魚人は、あわてて舌を引っこめた。しかし、よけい怪物の闘争本能に火をつけてしまったようだ。シャーキンは、すごい勢いで上陸してきた。

先にトゲの生えた舌で、アリサを打ちのめした！　このままでは勝てない。ショートソ

ードでは、シ
シャーキン
き裂いてしま
危機一髪！
目を押さえ
●平原に行く
……⇩18へ

80

暗がりの中に、何かが立っていた。
「あれ、石像だわ」
●ビンの薬を持っている……⇩9へ

81

アリサは、すれば、ヤツ
2体、3体
「危ない、後ろだ」

は、ナイフのような大き
爪をぎらつかせた。ぐったり
おうという気だ。
アリサは、つかんでい
ているシャーキンを尻目
に、その場を逃げ出す。もう海岸はこりごりだ。
……⇩8へ　●森に行く……⇩59へ

切ることができないのだ（HPマイナス2）。
た砂を半魚人の顔に叩きつけた
に、何かが立っていた。
アリサは用心しながら、それに近づいていった。
……⇩57へ

降下してくるロボット・ポリスの頭を狙った。そこにあらの動きを止めることができる。
……。アリサの剣はすばやい攻撃を繰り返した。しかし多勢に無勢。
●持っていない……⇩9へ

るTVカメラを破壊

80〜83

だが青年の声も遅く、アリサの背中に痛みが走った。背後からの攻撃のだ（HPマイナス1）。

「この、ひきょうもん！」振り向きざま、アリサはそのロボポリのカメラをぶち抜いた。

そいつが最後の敵だった。

「平気よ、このくらい」アリサは、心配そうな青年に苦笑いを見せた。

⇩62

何かが前方から跳ねてきた。緑色のぶよぶよした塊が2匹。

「げっ、グリーン・スライム！」アリサは思わず、あとずさった。

グリーン・スライム2匹　4＋バトルP（1のJ）

アリサ　戦闘P＋バトルP（2のE）で戦います。

●敵よりPが上……⇩41へ

●下……⇩141へ

4匹のレッド・スライムが合体し、巨大な怪物になった。

「ちょっと、こんなことって――きゃっ！」

イナス1）。

83

巨大スライムに押し潰されるアリサ（HPマ

⇩65へ

次の瞬間、スライムの体から、剣が飛び出してきた。アリサが、下から突き刺したのだ！

「ふー、なんて嫌な怪物！」アリサは、タイロンの手を借りてはい出た。

●北に行く……⇩168へ

●東に行く……⇩119へ

84

急いで宇宙空港に向かうアリサ。だが、途中の草原でさっそくジャマ者が現われた。

真っ赤な草の塊がふたつ、彼女の前に立ちふさがったのだ。

「マンイーターね！　いやらしい食肉植物！」アリサは剣を抜いた。

マンイーター2匹　3＋バトルP（1のH）

アリサ　戦闘P＋バトルP（2のF）で戦います。

●敵よりPが上……⇩50へ

●下……⇩16へ

85

アリサは、飛び出してきたサンドワームの頭（？）を切り落とした。

「なんだ、見かけ倒しのヤツ」アリサは、ちぎれた頭を足で蹴とばした。

「危ない！」

突然、サンドワームの頭が跳ね上がり、アリサを直撃した！

84〜86

「げふ！」――（HPマイナス1）
頭は、独力で砂に潜りこんでいった。
「いたた……なんなの、あのミミズの化け物」アリサは腹を押さえて立ち上がった。
「あいうが出てきた原始的な生き物は、しぶといヤツが多いんだよ。――む。崖の向こう側から、何十人もの一団が現われた。直立して歩くネズミのような連中だ。まだそいつらは、アリサたちには気づいていないようだが。
●様子を見る……⇩60へ
●立ち去る……⇩35へ

86

つかまったら、おしまいだ！　アリサは、ロボット・ポリスの股の間をくぐった。
だが、もう一体がすぐ目の前にたちふさがる。
「どいてよ！」アリサはショートソードで切りつけたが、ロボポリのボディにはかすり傷しかつかない。逆に、鉄の腕の一振りで、道路に叩きつけられてしまった。激痛に、一瞬、息がつまる。
「う……。
「こっちよなんてことすんのよ！　バカロボット！」アリサ、アリサ！」

声と一緒に、何かが飛んできた。とたんに、黒い煙がモウモウとたちこめる。アリサは、咳こみながら、ビルとビルの間に飛びこんだ。

「ゲホゲホ、スエロおばさん！」

「しっ」そこに潜んでいた女性は、口の前に指を立てた。

ロボポリたちは気づかないまま通りを歩いていく。

「もうだいじょうぶよ」その女性は、アリサの唯一の肉親、叔母のスエロだった。「危険だから、仇討ちなんてやめなさいっていっても、聞く娘じゃないわね。でも、最初から強い敵と戦っても、勝ち目はないわよ。戦いで傷ついたときは、いつでも（治療）のマジックで治してあげるわ。絶対、無理をしないでもうちにいらっしゃい。ヒールで治してあげるわ。絶対、無理をしないでね」

「ありがとう、叔母さん。兄の敵を討つまで死ぬわけにはいかないわ」

●アーマーショップへ行く……⇩68へ　●居住区の外へ……⇩40へ

87

通路の向こうから、巨大なクモが2匹やってきた。わさわさと脚をうごめかし、アリサたちの前に立ちふさがる。

「タランチュラ2匹　15＋バトルP（1のF）

「タランチュラよ！」

アリサたち

●敵よりPが戦闘P＋バトルP（2のD）で戦います。

上 ……⇩19へ

88

バサバサバサ……。アリサの頭上で、羽音が響いた。

見上げるとひとつ目が彼女をにらみ返してきた。巨大な目玉に、羽を生やした不気味な姿。洞窟内に生息する怪物、ウイングアイだ！　それが2匹！

ウイングアイ2匹　3＋バトルP（1のC）

アリサ　戦闘P＋バトルP（2のI）で戦います。

●敵よりPが戦闘P＋バトルP（2のD）で戦います。

上 ……⇩20へ

87〜89

89

その羽音は、まるで金属をこすり合わせるような音だった。スコーピラスは、まだ準備のととのってないアリサに襲いかかった！

もつれ合うように地面を転がる少女と怪物。やがて、甲高い悲鳴とともに、両者の動きが止まった。

「はあ、はあ……。いきなり襲いかかってくるなんて、このスケベ虫！」

●下 ……⇩49へ

●下 ……⇩42へ

傷ついた体をかばうように、アリサは立ち上がった。地面には、首を切られたスコーピラスが横たわっている（**HPマイナス1、戦闘Pプラス1、プラス10メセタ**）。

再び歩き始めたアリサ。その行く手に、パトリロ居住区のゲートが見えてきた。

●**パトリロ居住区に入る**……⇩**23へ**

●**海岸へ行く**……⇩**59へ**

90

「ホウ、しょーとけーきカ。ケッコウケッコウ。――ム！　コ、コレハ！」

「その上に乗っているイチゴが、どうかしたの？」

「コレハいちごナドデハナイ！　御禁制ノ『らえるまべりー』ダ！　オマエラ何者ダ！」

「コレハ、警備ロボットがそう言ったとたん、床が割れ、アリサたちは真っ逆さま！

「痛いなあ、もう！　落し穴なんて、ひきょうよ」（**HPマイナス1。戦闘Pマイナス2**）

「どうなってるんだ？　御禁制とかなんとか言ってたが……」（**Cをチェック**）

アリサたちは、体をさすって立ち上がった。

そのミャウの目が、闇の中に潜む敵の姿をとらえた。無傷なのは、うまく着地したミャウだけだ。

赤いボディーのロボット――マシンガーダー

マシンガーダー　12＋バトルP（1のB）

90〜92

アリサたち●敵よりP戦闘P＋バトルP（2のE）で戦います。上……⇩117へ　●下……⇩143へ

91

「あっ！」足をよろめかせた瞬間、アリサはアリジゴクの巣の中に落ちていった。
「アリサ！」タイロンが手を伸ばすが、間に合わない！　たちまちアリサの体は砂の中に没し、見えなくなった。あとはアリジゴクに体中の生き血を吸われるのみ……。

END

92

「え、おたくシオンに行くんですって。やめたほうがいいわよ。強い怪物が出るのよ」と、デブのおばさんが言った。アリサが道で声をかけたおばさんだ。
「その話は知ってるわ。有名ですもん」しかし、とアリサは思った。たかが怪物の1匹や2匹に恐れをなしていては、打倒ラシークなど夢のまた夢だ。
――その時、悲鳴のような声が聞こえた。振り向いたアリサの目に、あわてて走る男の姿が映る。ロボット・ポリスに追われているのだ！　犯罪者か、それとも……。

●男を助ける……⇩35へ　●助けない……⇩34へ

「アリサ、敵か!?　入るぞ！」
タイロンとミャウが、アリサの寝室に飛びこんできた。
彼らはナイトメアの姿を見て、一瞬立ちすくんだものの、だが、怪物は想像を絶する強敵だった。
タイロンのオノも、ミャウの牙も、ナイトメアにはかすり傷さえ与えられなかった。
怪物の目に、不気味な光がともった。とたんに、タイロンらは身をすくませ、床に転がる。金縛りにあったのだ。
抵抗できない彼らを、ナイトメアはやすやすとかみ砕いてしまった。
「タイロン！　ミャウ！――ああ！」
見えない力が、アリサを揺さぶり、床に叩きつけた。アリサは、もうろうとした頭で思った。この怪物には普通の方法では勝てないと……。

●マジックPが3以上……⇩51へ
●2以下……⇩29へ

94

「あんた、タイロンを探しているんだって？」男はそう話しかけてきた。
いろいろと聞きこみをやっていたアリサは、酒場の裏手でこの男に会ったのだった。

93〜95

「ええ。あなたが、タイロン……さん？」
「まさか。オレはあんな立派な勇者なんかじゃない。タイロン退治に出かけていった。もう2日になるな」
「メデューサですか……」
「ああ、ラシークが甦えらせたという、恐ろしい化け物さ」ここで男は、アリサを値踏みするような目で見た。
「ふむ。どうやら、あんたもタイロンと目的は同じようだな。ラシークを狙っているのか。なら、良いことを教えてやろう」
男は、ロードパスを密売しているツールショップの場所を教えてくれた。

●Aにチェックがある……⇩25へ
●ない……⇩63へ

95

アリサたちは、怪物ども相手にあばれ回った。
アリサとミャウがゴールドレンズを引き裂き、タイロンがスケルトンを打ち砕いた！
「ふう、いい運動になったぜ」（戦闘Pプラス1、プラス50メセタ）
⇩2へ

突然、冷たい空気が床をはってきた。吐く息が白くなるほどの寒さだった。

ミャウが、低いうなり声をあげた。敵の接近に気づいたのだ。

冷たいもやの中に、青い色をしたヘビがとぐろを巻いていた。その太さが、アリサの胴よりもあるという大蛇――フレームリザードであった。

フレームリザード　17＋バトルP（1のJ）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のA）で戦います。

●敵よりPが上……⇩22へ　●下……⇩54へ

96

97

青いヤツらがアリサたちに気づいた。銃口をこちらに向け、撃ちまくってくる。

ヤツらのビームにはそれほどの威力はない。皮膚に当たっても軽い火傷をする程度だ。

しかし、こう数が多くては始末が悪い。

アリサがようやく、青ネズミを蹴ちらした時、すでに茶色ネズミは全滅していた。

「あたしらにとっては大したことのない武器でも、このネズミたちにとっては命とりだったのね」

「残念だったな。助けられなくて……」タイロンは、アリサの肩に手をやった。

96〜99

一行は、大岩をぐるりと回りこむように進んでいった。

98

マンチコートは、いきなり飛びかかってきた。鋭い牙から、身をかわすひとつの武器があった。この怪物にはもうひとつの武器があった。尻尾がするりと伸び、アリサの左腕を刺したのだ！（HPマイナス2）。

「このー！」痛イ、痛イ、痛イ、血ガ出ル、血ガ出ル、血ガ出ル！　ガ怪物の腹に食いこんだ！

アリサは、死んだ（**戦闘Pプラス1**）。

へギエーッ！

マンチコートとマンチコートに切りかかる。そのギエーッ！

「せっかく口がきけるんだから、もっとましなこと言って死ねばいいのにアリサは傷ついた腕をさすりながら、黒髪のクニヌーヌの店に向かった。バカなヤツ」

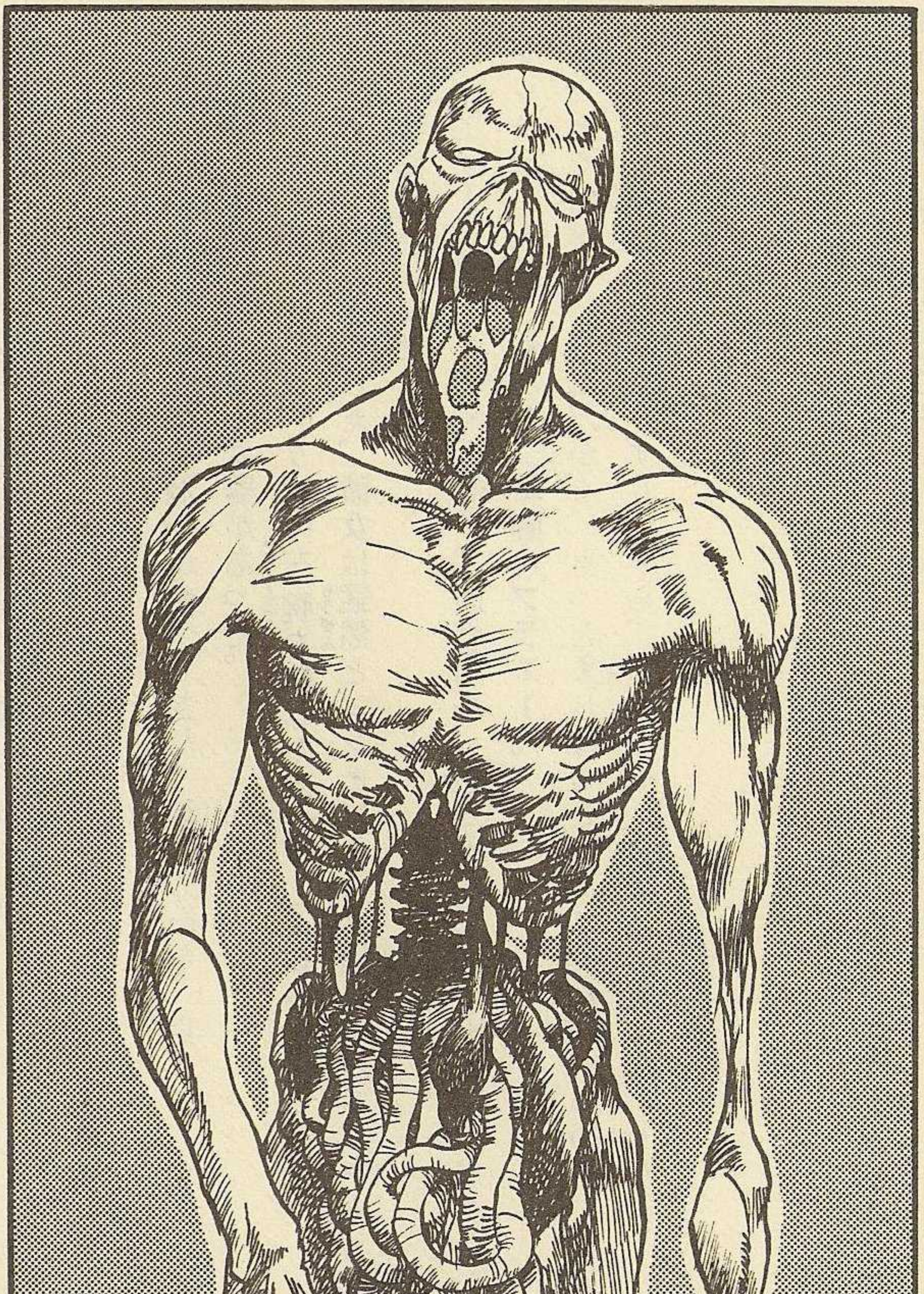
⇩77へ

99

「もしかして、これがタイロン？」

アリサは、石像を見上げて、つぶやいた。メデューサの目には魔力があるという。にまれたものは、たちどころに石になってしまうというのだ。

⇩170へ



99●クスリをかけると、石像が溶けはじめた。服どころか、皮膚までもドロドロになっていく。「これがタイロン!?」

99

「ミャウ、そのビンの薬を貸して」
アリサは、小さな仲間の首にかかっている小ビンを取った。中には特殊な薬品が入っている。
へそれを上からかけるんだ。半分だけでいい〉
シューッ。たちまち石像の表面が変化を始めた。灰色一色だったものが、色づき始め、柔らかみを帯びてくる。
やがて、ひとりの大男が姿を現わした。
「キャッ！　ミャウ、この薬は効きすぎよ。服まで溶け始めたわ」顔を手で覆うアリサ。
ところが、薬の効果はそれ以上だった。さらに皮膚までもドロドロに溶け出したのだ！
「タ、タイロンが！」
へ違うよ、アリサ。こいつはタイロンなんかじゃない。ゾンビだ！
たワナだったんだ！〉

ゾンビ　6＋バトルP（1のF）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のJ）で戦います。

●敵よりPが上……⇩120へ
●下……⇩74へ

ガシコの村にもどった一行。
「ルベノ博士、あなたに会いたかったのは宇宙船を造っていただきたかったからです」と、ルツがきりだした。
「3惑星を自由に行き来できなくては、ラシークを探すことはできませんからね」
「よかろう。ただし、製作費が200メセタかかるぞ。キミたちに払えるかね？」
●200メセタある……⇩164へ
●ない……⇩129へ

100

いつまでも飽きることなく往復運動を繰り返す波、また波。アリサは、潮のにおいを嗅ぎながら波打ち際を歩いていた。海岸に出て、かれこれ1時間はたつだろうか。
「変ねえ。海岸には恐ろしい怪物がいるはずなのに」
――その矢先。まるでアリサの声を聞いたかのように、海のほうで動きがあった。波間から赤いムチのようなものが伸び、彼女の首に巻きついたのだ！
「く、苦しい……」アリサは、濡れた砂の上に引き倒された。
●アイアン・ソードを持っている……⇩52へ
●持っていない……⇩79へ

101

箱を聞けたとたん、針が飛び出し、アリサの腕を傷つけた（戦闘P マイナス1）。
「痛い！　なんだってこんな所にワナがあるのよ」
「うかつに開けるほうが――」タイロンは、怖いアリサの顔を見て口をつぐんだ。
●南に進む……⇩58へ
●東に進む……⇩189へ

102

再び宇宙船に乗り、アリサはパルマ星にもどってきた。すぐに町を出て、メデューサの洞窟に足を運ぶ。ミャウは落ちつかなげに、アリサのまわりを跳び回った。⇩127へ

103

アリサは、あらためてまわりを見渡した。淡いセピア色を基調とした、落ちついた感じの部屋。総督は、いかにも砂漠の星の統治者らしい、けだるげな感じの人物だった。
「まったく、あのラシークがアルゴル太陽系3惑星連合の実権を握ってからというもの、このモタビアにも、無理難題を持ちかけよる。わが情報部の調査によると、ヤツは邪教のものと手を結び、3惑星を魔界に引きずりこもうとしているとか……さまざまな怪物どもが現われました」
「そうかもしれません。ここに来るまでに、さ

104

「しかし、はっきりと証拠がないかぎり、いかにわしでも手は出せん。もっとも……」

ここで、総督はちらりとアリサたちを見た。

「政府や王とは関係のないものが、勝手に戦うぶんにはかまわんがね」

「総督もなかなか食わせ者ですなぁ」と、タイロン。

「ハハハ、よく言った。どれ、長旅で疲れたろう。今夜は、ここでゆっくりと休むがよい」

⇩64へ

105

相手めがけ、全員の武器が炸裂した。ロボットは、たまらず白煙を噴き上げ、爆発した！

飛び散る破片がアリサたちを傷つけた（**戦闘Pマイナス1**）。

「あたた。でも、あっさり片づいてよかったね。――あれ、さっそく分かれ道よ」

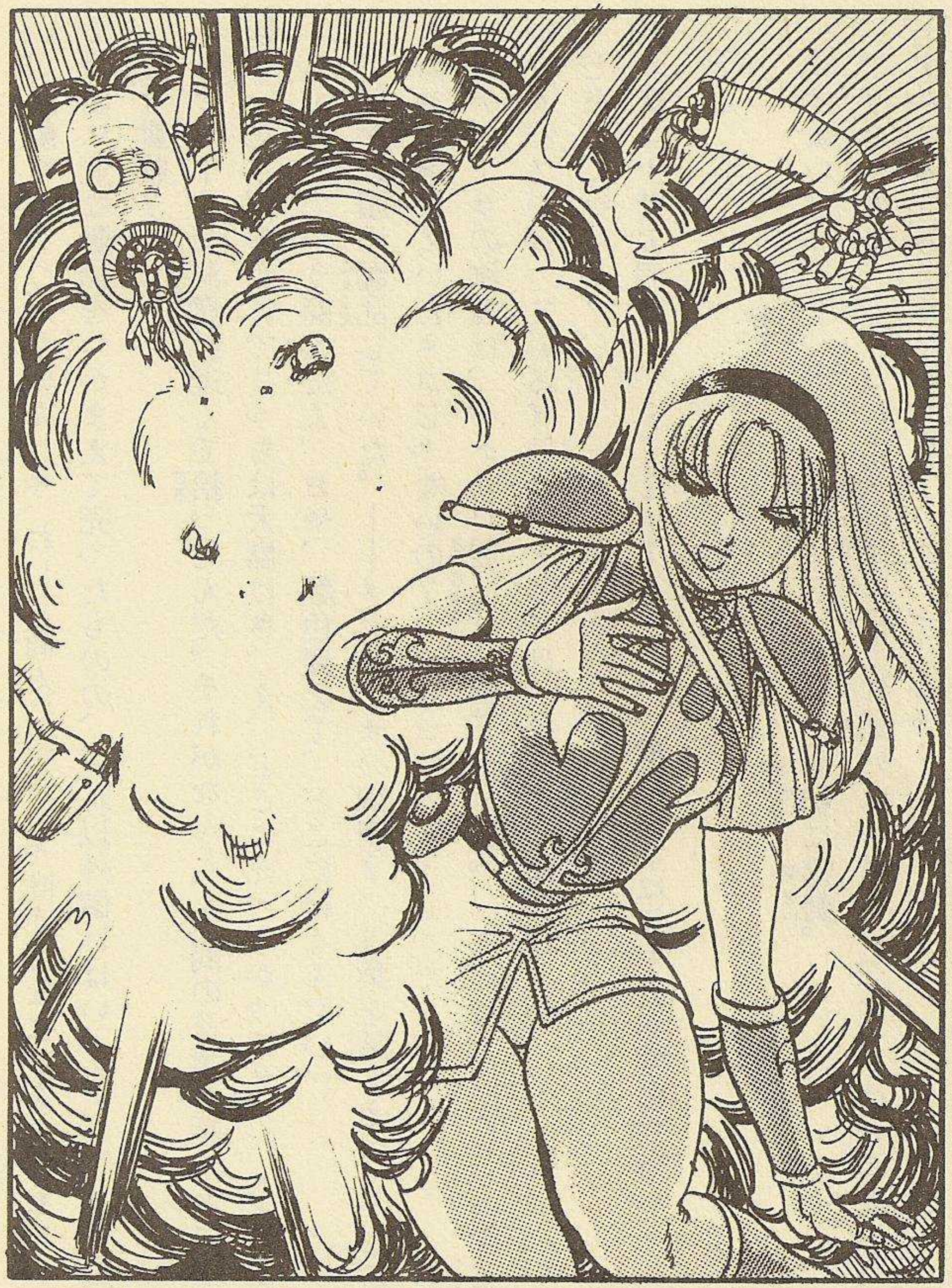
●**西に進む**……⇩31へ

●**東に進む**……⇩181へ

106

コンクリートで固められた岸辺に、波が白く砕け散る。人気もまばらな港だが、アリサはそこで耳よりな話を聞いた。

105～106



105●警備のロボットは、白煙を噴き上げ、爆発した！　飛び散る破片がアリサを傷つける。血が白い肌を流れた。

「こう船も寄りつかないんじゃ、わしら商人にとっちゃ商売もなにもあったもんじゃない。2日前に変な動物をつかまえて売ったものの、それ以外儲けはいっさいなしさね」

「変な動物？」

「メデューサの洞窟の近くで拾ったんだ。それが珍しいだろ。おかげでこっちは大儲けさ。え、どこに売ったかって？　パセオにいる、クニヌーヌっていう商人だよ。おや、顔色変えて、どこに行くんだい」

アリサの頭は混乱していた。――メデューサの洞窟？　言葉を話すネコ？　それってタイロンの連れていたネコじゃないの？　タイロンはどうなったっていうの？

メデューサの洞窟は、パトリロ居住区の近くにある。パセオは、モタビア星の首都だ。

どちらに行くか？

●メデューサの洞窟……⇩127へ

●パセオに行くため宇宙空港へ　⇩84へ

タイロンはニードルガンで応戦した。だが、多勢に無勢。

アリサたちは、じわじわと崖の奥のほうに追いこまれていった。その先の地面一帯には、土まんじゅうのようなものがひしめいていた。

107

107〜108

そこまで来ると、急にネズミたちは姿を消した。

「いかん！　ここを出るんだ！」

だが、遅かった。土まんじゅうが一斉にくぼみ、その底から巨大なアリジゴクの大群が姿を現わしたヤツらにはめられた。急いで、

●Jにチェックがある……⇩78へ

●ない……⇩48へ

108

アリサは、そこから下の9メートルほどの頭（？）を切り落とした。飛び出してきたサンドワームの頭部分が、あわてて砂の中に潜っていく。頭は狂ったようにあばれ回っていた

「ふー、見かけだおしのヤツ」（戦闘Pプラス1、マジックPプラス1）

が、やがて動かなくなった。

「アリサ、まだそいつら崖の向こう側から、何十人もの一団が現われた。直立して歩くネズミのような連中だ。

まだそいつらは、アリサたちに気づいていないようだが。

●様子を見る……⇩60へ

●立ち去る……⇩35へ

109

北の壁(かべ)に
●東に進むとドアがひとつ。東西に通路は延(の)びている。……⇩132へ
●ドアを開ける……⇩181へ

110

T字路に出た。どちらに進むか？
●北に進む……⇩88へ
●東に進む……⇩61へ
●南に進む……⇩18へ

111

十字路に出た。北側の通路には、扉(とびら)が見えるが……。
●東に進む……⇩151へ
●南に進む……⇩140へ
●西に進む……⇩87へ
●北に進む……⇩69へ

112

セントールは、タイロンのオノを盾(たて)で受け止めた。すかさず剣で切り返してくる。

「く、なんでこんな強いヤツが、牢獄に!?」
セントール　19＋バトルP（1のD）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のH）
●敵よりPが上で戦います。
●下……⇩196へ
……⇩154へ

暗がりの中に大きなものが立っていた。アリサは目を凝らした。
「石像だわ。……もしかしてこれは？」
●ビンの薬を持っている……⇩39へ
●持っていない……⇩76へ

113

通路を西のほうに進んでいった。奥に鋼鉄製の扉がある。
「このダンジョンキーで開くみたいよ。――あ、博士がガイコツに！」
「違う、こいつは敵だぜ！」
部屋から出てきたのは、剣と盾を装備したガイコツ兵士――スカルソルジャーだった。
スカルソルジャー　16＋バトルP（1のB）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のC）
で戦います。

114

●敵よりPが上……⇩198へ

115

「タイロン！　ミャウ！　総督！」

アリサは叫んだが、ナイトメアは特にそれを止めようとはしなかった。

怪物の生首は、じっとアリサを見下ろしていた。

その不気味な視線にさらされ、アリサは鳥肌がたった。冷たい汗がじっとりと額に浮かぶ。

（――なあに、この怪物は？　なにか、今までの怪物とはどこかが違う）

アリサは枕元から剣を取り出した。それで挑発するが、ナイトメアはのってこない。

「アリサ、入るぞ！」

タイロンとミャウが、アリサの寝室に飛びこんできた。

彼らはナイトメアの姿を見て、一瞬立ちすくんだものの、すばやく攻撃に入った。

だが、怪物は想像を絶する強敵であった。

攻撃をかわしたナイトメアは、目を妖しく光らせた。とたんに、タイロンらは身をすくませ、床に転がった。金縛りにあったのだ。

抵抗できない彼らを、ナイトメアはやすやすとかみ砕いてしまった。

●下……⇩144へ

115

115●怪物(かいぶつ)は、恐(おそ)ろしい強敵だった。タイロンとミャウは殺され、アリサも、床にたたきつけられた。そして……。

「タイロン！　ミャウ！」
アリサは、叫んで切りかかった。しかし、まった。
「剣が効かない！　――ああっ！」
見えない力が、アリサを揺さぶり、床に叩きつけた。イトメアの鋭い牙だった。それはアリサの心臓をえぐった。

突然、すごい衝撃が一行を見舞った。ドラゴンの長い尻尾が、思いがけない方向からアリサたちを打ちすえたのだ！（HPマイナス2）
木々の陰に隠れてよく見えなかったが、グリーン・ドラゴンは思ったより巨大だった。

●HPが4以上……⇩191へ
●3以下……⇩163へ

116

マシンガーダーは、手にしこまれたビームガンを発射してきた。
「ち、またロボットか？」
「これは、戦闘用のマシンガーダーってヤツよ！　でも――」ビームをかわし、アリサは

117

⇩9へ

そのロボットに挑みかかった。
「弱点は、普通のロボットと同じ！」頭のTVカメラを、剣で突き刺す！　さらにタイロンが、オノでマシンガーダーの首を切り落とした。
「危ない、ふせろ！」
切り口から、青白い火花を散らしたあと、マシンガーは、爆発した（戦闘Pプラス1、マジックPプラス1）。
「ふー、おかげで壁に穴が開いたぜ。あそこから出られる」

⇩174へ

118

サーペントの口から伸びた炎の舌が、廃屋をなめまわした。
「肉体労働は苦手ですが……」
ルツは、ひらりと舞い上がり、サーペントの額を杖でひと突きした（戦闘Pプラス1、マジックPプラス1、プラス50メセタ）。
「神経をマヒさせたのか……。やるな」と大蛇はビクンと体を震わし、急に動かなくなってしまった。
「ただの人まねですよ。さあ、この森を抜ければ、すぐにガシコの村です」

⇩44へ

L字の曲がり角に出た。曲がるか、もどるか？

●西に進む……⇩58へ

●北に進む……⇩189へ

119

「く、くさいじゃないのぉ」

120

それもそのはず、ゾンビはすでに肉まで腐っていた。アリサがいくら切りつけても、そのはず、ゾンビはすでに肉まで腐っていた。アリサがいくら切りつけても、この肉がそげるだけで、ひるむ気配さえ見せない。

ところが、ふいにゾンビが頭を押さえた。ミャウが後ろから爪を立てたのだ。

「そうか。ゾンビは頭を破壊すればイチコロだっけ。どいて、ミャウ！」

アリサは、満身の力をこめて、剣を振り下ろした！　ズン！

脳を潰されたゾンビは、ゆっくりと崩れ落ちた。今度こそ本当に死んだのだ。

危機を脱したアリサは、L字路を、

●北に進む……⇩14へ

●西に進む……⇩37へ

「なんじゃ。また来たのか。キミたちもしつこいのう」と、ルベノ博士が言った。

121

119〜123

●Eにチェックがある……⇩158へ

122

パセオ市内を出て5分もすると、もう砂漠地帯に足を踏み入れていた。

「モタビア星は、宇宙から見ると赤かったろう。大半が砂漠なんだよな、この星は」

やがて一行は、まだ風化していない崖の一角にたどり着いた。

「この崖の奥に『マハルの洞窟』とやらがあるそうだが」

「見て、あの大きな岩。まるで山みたい」

赤茶けた巨大な岩が、道を左右に分けていた。

●右に行く……⇩170へ

●ない……⇩158へ

123

「変よ、半魚人たちは、あの男の所に向かっているわ」

いち早く、アリサとミャウが、その間に割りこんだ。続いて、タイロンとルツがマーシーズの退路を断つ。前後からのはさみ打ちで、勝負はあっさりとついた（戦闘Pプラス1、プラス150メセタ）。

「あ……ありがとう」

●左に行く……⇩148へ

●ない……⇩195へ

倒れていた男は、手をアリサに差し出した。その手からは鋭い爪が伸び、ウロコがぎっしりと生えていた。――マーシーズの手！

「驚きましたか。じつは、怪物の半分は、もともと人間。みんな、ラシークの手によって改造されているのです。ぼくは、手術の途中で逃げだしてきたわけですが……」

アリサは、自分たちのことをその男に話した。

「ロボットですか……。たしか、バルデボの村のスクラップ置き場にあるというウワサを聞いたことがありますが。ポリメテールという薬を使えば、探すことができるでしょう」

「ありがとう。あなたもわたしたちと一緒に行きましょう」

男は力なく笑った。

「ダメですよ。改造が中途半端なところで逃げたんで、そう長生きできないんです。でも、あんな溶岩の中で生きるより、地面の上で死ねて、よ、よかっ……た……」（Fをチェック）

アリサたちは、男を溶岩地帯の外に運び、ていねいに埋葬した。

⇩156へ

124

エピの村を出て、さらに『迷いの森』を出る。モタビア行きの最終便が出る前に、宇宙空港にたどり着きたかった。――ところが。

「む！　雲行きが悪くなってきたようだな」

124〜125

ふたりの頭上に、無数の影が舞っていた。
〈向こうからも来たよ〉
木の陰から、白骨がガチャリと立ち上がった。手に剣と盾を持ったスケルトン。

●ニードルガンを持っている……⇩13へ

●持っていない……⇩53へ

125

岩石地帯を避け、進んでいく。
「さっそく変なヤツがつけてきたな」と、タイロンがつぶやいた。
「気がついていましたか……。3匹ですね」すぐにルツが応える。
3つの影が空から舞い降り、一行を取り囲んだ。コゲ茶色の体毛で覆われたコウモリ男たち。同系列のバットマンより大型のクライオンどもだ！
「ふんだ、あたしだって気づいていたわよ！」アリサがそう言って、剣を抜いた。

●クライオン3匹　17＋バトルP（1の1）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のB）
●敵よりP上……⇩152へ
●下……⇩193へ

ローアの村に着いた。この村のアーマーショップには、なかなか物評判だが……。

○ヒートガン　100メセタ（熱線銃。ニードルガンを持っている人出すことによって、50メセタで買える）。

○サーベルクロー　100メセタ（ミャウ用の武器）。

（それぞれ買った物の値段をマイナス。ひとつ買うごとに戦闘Pを1つプラス）

これからどこへ行くか？（ポリメールのある人は、バルデボの村へ）

●バルデボの村に行く……⇩210へ

●アビオンの村に行く……⇩223へ

126

127

洞窟の入り口をのぞきこむアリサ。はたして、怪物メデューサはいるのだろうか？

彼女は、胸をドキドキさせながら、中に足を踏み入れた。

暗く、じめじめした洞窟内。

いきなり2方向に道が分かれているが。

●北に進む……⇩88へ

●東に進む……⇩61へ

●Eにチェックがある ……⇩150へ

128

「ないのか……。しかたがない、こうしようか――」

129

そこに、みごとな宝石があるそうじゃ。換金すれば、200メセタくらいにはなるはず」

「ねえ、『竜の巣』って、谷にやってきたアリサたちのことだわけで、

「その前に、あれじゃない。木の枝が組み合わさって……。

ルツがさし示す木の陰から、グリーン・ドラゴンの凶悪な顔が見えた。

●マジックPが4以上 ……⇩188へ

●ない ……⇩171へ

●3以下 ……⇩147へ

130

アリサは飛び上がった。空中から一気に剣を振り下ろす。

だが――。彼女は、自分の目を疑った。サイボーグメイジが、片手で剣を受け止めたのだ。タイロンのオノも、ミャウの牙もまるでダメージを与えていなかった。

「人の話はしっかり聞いておくものだぜ。機械の体だと言ったろうが、機械魔道士は……」アリサを床に叩きつけた。そして、ダイヤの杖で、

END

131

アリサは、空中に停止している敵に切りかかった。だが、硬い殻に——

「ち、そこか！」彼女は、殻の一部が開くのを見て、剣が突き刺さるのと、刃先を返した。

毒液がほとばしり、アンモナイトは落下し、青い血をなびかせ、海面から消えていった。

「だいじょうぶか、アリサ！」ほかの3匹を退治したタイロンたちがやってきた。

「平気よ。少し体がしびれるだけ……」

（HPマイナス1）

⇩156へ

132

進んでいくと、突き当たりにドアがあった。ダンジョンキーを使って開けてみる。

「だれでい？　なんだ、この小娘はぁ」中にいた髭だらけの男がわめいた。

「ルベノ博士……じゃなさそうね」

「け、オレはそんなんじゃねぇや。スリのシルバー・ネクスト様たぁオレのことよ」
「関係ないみたい」一行は、その男を無視して、外に出た。

⇩109へ

131〜134

「50メセタ入ってるわ、ラッキー」（プラス50メセタ）
「もらっていいのかねぇ」
「こんな所に置いておくのが悪いのよ」

⇩189へ

●南に進む……⇩58へ

133

●東に進む……⇩180へ

134

「待ってください」アリサは平然と答えた。
「どうしてわかる？」
「テレパシーというヤツですよ」それからルツは、本格的にそのセントールと話を始めた（マジックPマイナス1）。——そして、わかったことがいくつか。
セントールが親衛隊の一員なのは事実だ。しかし、ラシークのやり方に不満を持ち、それを訴えたために牢獄に入れられてしまったこと。
アビオンの村にポリメテールを買いに行ったところをつかまったこと。

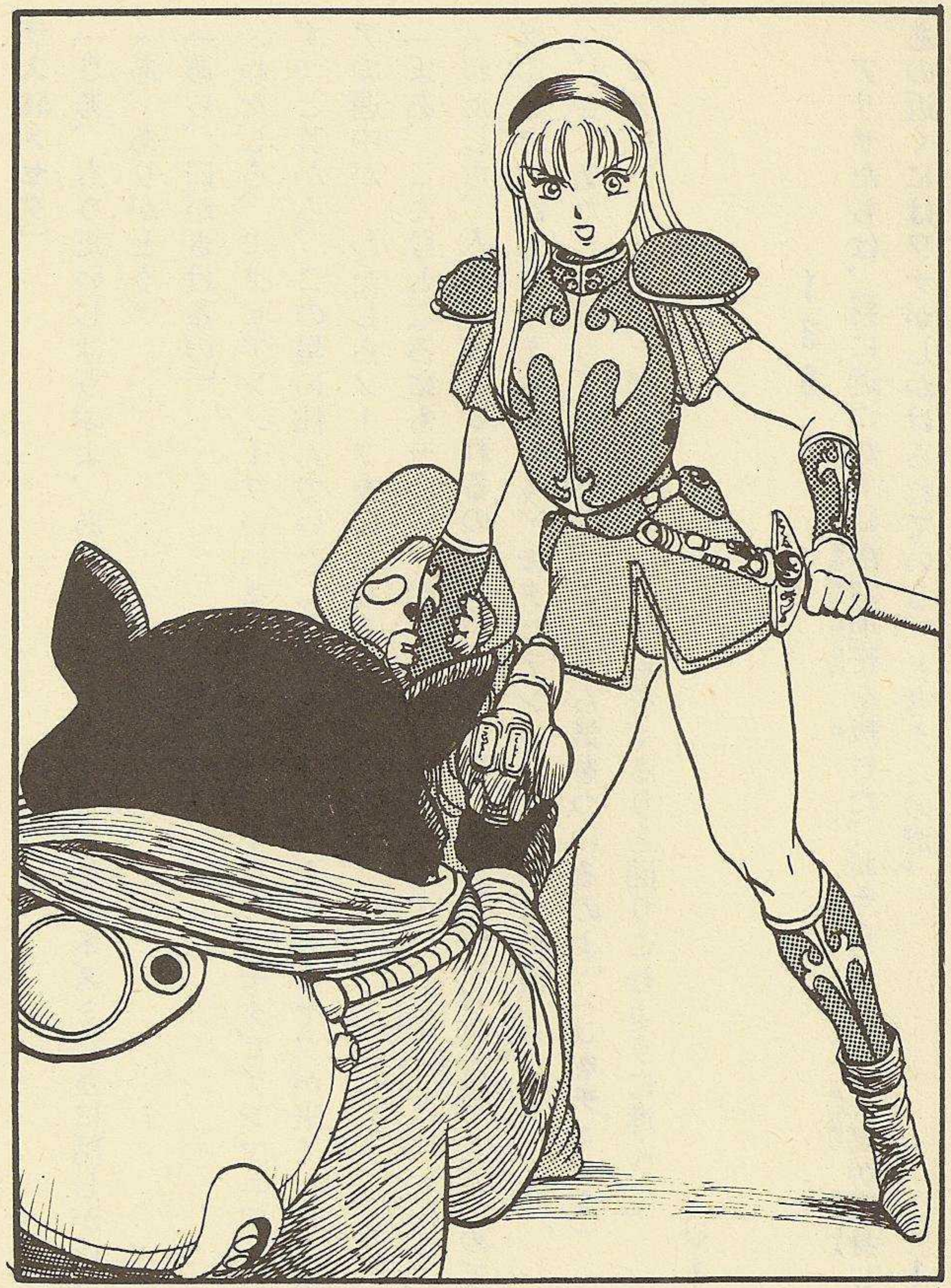
「ポリメテールの？」
「ラコニア以外のものなら、なんでも溶かしてしまう薬らしいです」
アリサは、セントールに一緒にこないかと誘ったが、騎士は首を振った。もはや、自分にはどこにも居い場所がないと言って。
一行は、その部屋を出た。

⇩181へ

青いヤツらが銃口をこちらに向け、撃ちまくってくる。
「うわっ！」
アリサたちに気づいたようだ。ヤツらのビームガンは、低出力タイプだぜ。皮膚に当たっても、軽い火傷をするぐらいだ」
「タイロン」
「たいしたことない。ヤツらのビームガンは、命とりの武器かもよ。早く助けないと」
「でも、あの茶色のネズミたちにとってさせられたお礼をしてやるぞ！」
「おう！　さあ、ネズミども、ビックリを持って、ネズミどもの間になだれこんだ。アリサとミャウも加わる。
タイロンはオノを持って、ネズミどもなると、飛び道具は同士討ちのおそれがある。ビームガンをうかつに使えこう接近戦に散らすように逃げていったネズミたちは、クモの子を

（戦闘Pプラス1、プ

135



135●アリサたちは、巨大な茶色ネズミ――モタビアンノーフを助けた。この星もラシークの魔(ま)の手がのびているようだ。

ラス50メセタ）

「さあ、もうだいじょうぶよ、あなたたち」アリサが茶色ネズミたちに話しかけた。

〈あ、ありがとう〉

「あら、口がきけるの」

〈わたしら、モタビアンノーフいいます。さっきのヤツら、モタビアンマニアいいます。この星に住んでいたんやけど、ラシークちゅうヤツが来てから、最近マニずっと昔から、たしらノーフをいじめるんですわ〉

アの連中が、わたしらノーフをいじめるのも、この間に助けられるの、初めてですわ。ネコに助けられるのも、

「まあ、こんなところにもラシークがいたなんて」

ほんとに、ほんとにありがとう〉モタビアンノーフたちは何度も礼を言った。

「じゃ、あたしらはもう行くけど、これから気をつけるのよ」（**Jをチェック**）

モタビアンノーフと別れた一行は、大岩をぐるりと回りこむように進んだ。

136

アリサたちは、男に近づかずに溶岩地帯を抜けた。おそらく、男は怪物が変身した姿で、あの近くにはワナがしかけられている、と考えたのだ。

⇩**156へ**

⇩**170へ**

136〜137

トリニダの牢獄に、アリサたちは裏口から侵入した。

「いくら裏口だからって、こんなあっさりいくわけないわ。もう見つかっているんじゃ」

「まさにその覚悟せい！」

背後から、とおり。不法侵入者め、看守のじいさんが現われた。

「ふん、じいさんひとりに、オレたちが止められると思うのか」

「甘い！」看守は空中で1回転し、アリサたちに襲いかかった。

アリサたちは、思わぬ攻撃を受けたようだった（戦闘Pマイナス2）。

着地した時、そいつはすでに人間の姿ではなかった。黒い毛に覆われ、巨大な羽を持つ怪人――バットマンに変身していたのだ！

バットマン　15＋バトルP（1のI）で戦います。

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のI）で戦います。

●敵よりPが上……⇩136へ　●下……⇩186へ

ゴールドレンズに気をとられているうちに、スケルトンが切りかかってきた。

「危ない！」タイロンはアリサをかばい、その剣を受けてしまった。

「タイロン！」

「たいしたケガじゃない。それより一気に反撃だ！」

アリサたちは、奮戦した。だが、いかんせん数が違いすぎる。なんとか、敵は撃退した

⇩2へ

ものの、体はもう傷だらけだった（HPマイナス2）。

139

「おまえたちのだれが、ルベノ号を操縦できるというんじゃ。安手のSF映画じゃあるまいし、そう簡単にことが運ぶわけがなかろう。ハプスビーというロボットを探すんじゃよ。わしが牢獄に入っているあいだに、どこかに消えてしまったロボットじゃ。そいつなら、操縦できるわい」

「心当たりはないんですか？　ただ探すといっても、何年かかることか……」

「たぶん廃品回収の連中が持っていったんじゃろう。大陸の北の端に、連中の村があった

⇩180へ

と思うが」

138

「それにしても、ルツとかいう旦那はどこにいるんだろうな？　超能力者かなんか知らないが、妙な所にいるもんだぜ」と、タイロン。

T字路に出た。

●南に進む……⇩96へ

●西に進む……⇩140へ

●北に進む……⇩111へ

141

グリーン・スライムが、アリサの頭に飛びついてきた。2匹がかりで彼女の顔をふさぐ。息ができなくなったアリサは、もがき苦しみ、転倒した（HPマイナス1）。

しかし、前から倒れこんだおかげで、グリーン・スライムはぐちゃりと潰れてしまったのだった。ボディー・プレスならぬ、フェイス・プレスというわけだ。

「もー、いやや、こんなの！　責任者出てこい！」精神的打撃のほうが大きいアリサであった。「おまけにもう行き止まりだし……。もどんなきゃや」

⇩61へ

●ポリメテールがある……⇩6へ

142

●ない……⇩183へ

マシンガーダーは、手にしこまれたビームガンを発射してきた。ビームは闇を切り裂き、アリサの腕をかすめた（HPマイナス2）。

「う！　やったわね」アリサは、ひるまず、ロボットに挑みかかった。次のビームをかわし、頭のTVカメラを、剣で突き刺す！　さらにタイロンが、オノでマシンガーダーの首を切り落とした。

「だいじょうぶか、アリサ」

「ええ。かすっただけ。――あ、危ない、ふせて！」

切り口から青白い火花を散らしたあと、マシンガーダーは爆発した。

「ふー、おかげで壁に穴が開いたぜ。あそこから、出られる」

⇩174へ

敵と交差するように、アリサは切りかかった。スカルソルジャーの首が乾いた音を立てて転がった（HPマイナス1）。

「まさに、肉を切らせて骨を断つってところね。ないわ」アリサは、血がにじむ肩を押さえた。

一行は、もと来た通路を引き返していった。

⇩31へ

143〜146

「いや！　あたし、ぬるぬるしたの大嫌い！」
「そのわりには、ひとりで3匹もやっつけたじゃないか」最後の1匹を踏みつけながら、タイロンが言った。
今の彼らにとって、スライムなどたいした敵ではなかった。
●北に行く……⇩168へ
●東に行く……⇩119へ

145

「ほう、良いものがあるな」
エピ村のアーマーショップに入ったタイロンは、目を輝かせた。
○ニードルガン　80メセタ（無数の針を高圧ガスで発射し、一度に多くの敵を攻撃できる）
○アイアン・シールド　40メセタ（革の盾より、ずっと頑丈だ）
どちらも、タイロン好みの武器だ。
（買うも買わないも自由。買った人は、それぞれの持ち金から値段分の金額をマイナスし、アイテムリストに記入してください。ニードルガンもアイアン・シールドも買えば、それぞれ戦闘Pが1ずつプラスされます）
アーマーショップを出た一行は、モタビア星を目ざした。
⇩124へ

146

グリーン・ドラゴンが炎を吐き出し、一行を威嚇した。

グリーン・ドラゴン　19＋バトルP（1のC）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のE）で戦います。

●敵よりPが上……⇩191へ

●敵よりPが下……⇩116へ

147

岩に沿って、進んで行く。

148

「ねぇ、なんか地面が動いているような気がしない？」

「砂の中に、なにかいるぞ！」

前方の砂が膨れ上がったかと思うと、恐ろしく細長い怪物が現われた！　全長10メートル以上ものサンドワームだ！

サンドワーム　13＋バトルP（1のC）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のB）で戦います。

●下……⇩85へ

●敵よりPが上……⇩108へ

147〜150

「おや、ねーちゃん、また来たのか」と再びアマモト博士。
「『モンスターフライのフライ』や『スコーピラスの薫製』、『マンイーターのおひたし』なんかもあるが、どうかね」
「あははははは……。け、けっこうです。さ、さよなら」
⇩31へ

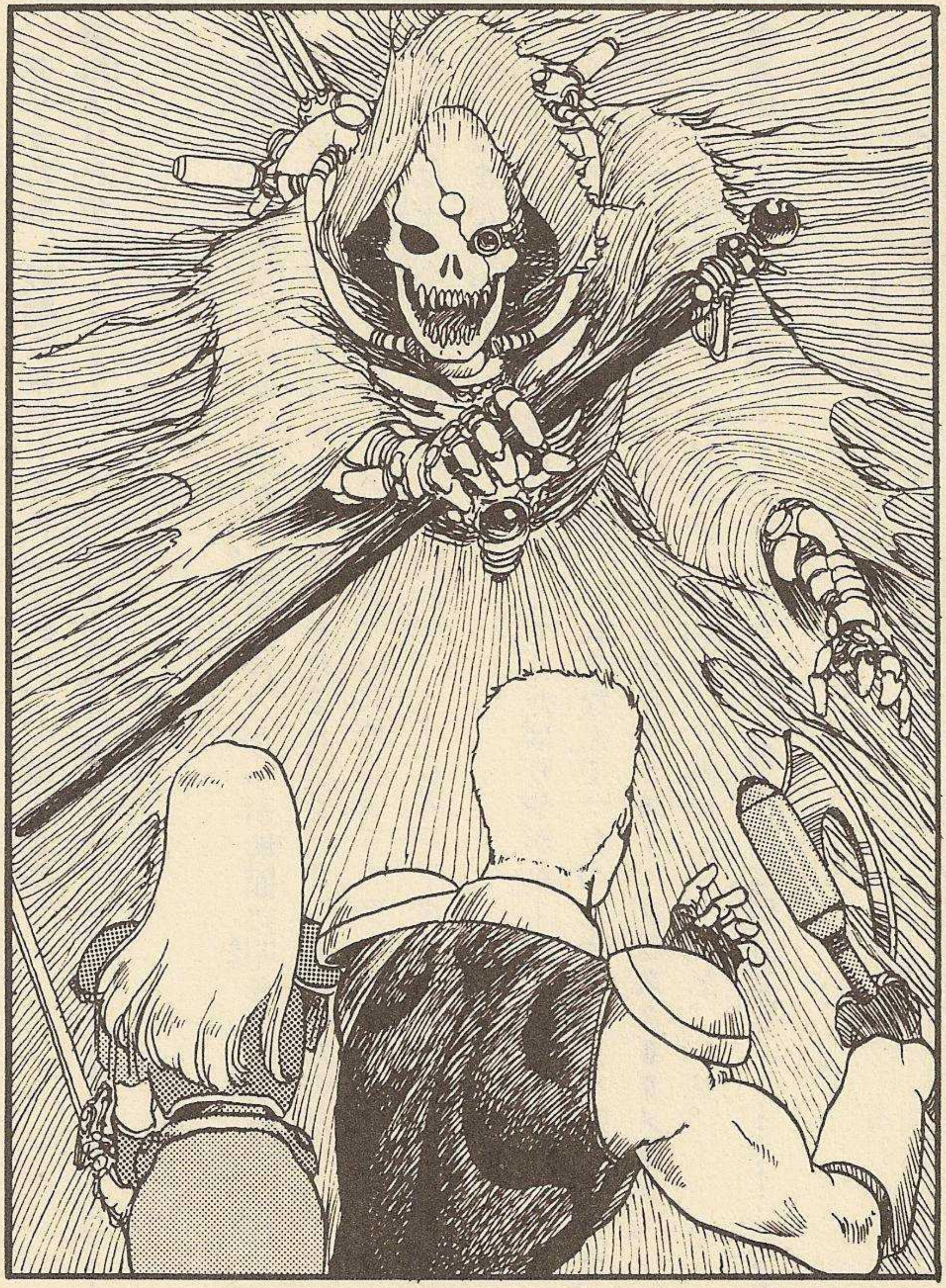
149

飛び道具のないアリサたちは、一方的に攻撃を受けた。ビームそのものは、たいした威力はなく、軽い火傷を負う程度だが、これだけ数が多いとノーダメージというわけにはいかない（戦闘Pマイナス1、HPマイナス1）。
彼女たちは、崖の奥のほうに追いこまれていった。その先の地面一帯には、土まんじゅうのようなものがひしめいていた。
そこまで来ると、急にネズミたちは姿を消した。
「しまった！　ここを出るんだ！」
だが、遅かった。ヤツらにはめられた。急いでここを出ようにも出にくぼみ、その底から巨大なアリジゴクの大群が姿を現わした。
●Jにチェックがある……⇩78へ
●ない……⇩48へ

150

黒い影が、一行の前に現われた。
「だれだ？」その影は、しわがれたような声を出した。
「そっちこそ何者だ？　まさか、ルツではあるまい」と、タイロン影は、ククと笑った。神経を逆なでするような声だった。
「なにが、おかしい！」
「なあに。――しかし、いないようだな」
中にいるのオレ様もおまえと同じことを聞こうとしたからだ。『ルツを探しているのね。それとも、どうしようというの？』となな。――しかし、いないようだな」
「おまえも、ルツを探しているのね。ルツに会って、どうしようというの？」
「そうだな、殺そうか。それとも、炎で焼き杖で頭を叩き割ってやろうか。ラシーク様の敵に回るヤツは、どんな死にざまが似合うかな」
「ラシーク様の手下ね！　おまえなんか、ルツの所に行かせはしないわ」
アリサは、剣をかまえた。
「ククク……おまえら、このオレ様と戦おうというのか。この機械イボーグメイジ様と！」
影は、たちどころに実体化した。メカをちりばめたガイコツの姿に化された魔道士、サ

151



151●アリサたちの前で、影が実体化した。メカを散りばめた不気味なガイコツの姿に！　サイボーグメイジだっ!!

アリサたち　戦闘Ｐ＋バトルＰ（２のＨ）で戦います。

●敵よりＰが上　……⇩２００へ

●下　……⇩１７９へ

勝負は一瞬だった。６つの影が宙を飛び、３つが地面に叩きつけられていた。

１５２

タイロンルツ、それにミャウが、それぞれクライオンを倒したのだ。

「あたしに1匹くらい回してくれても、いいでしょう」アリサがむくれた。

「たまには主人公も休んだほうがいいぜ。――このコウモリども、意外と金持ちだな。お、こいつはまだ息がある」

「けけけ、この先は溶岩地帯だ。そこでくたばりやがれ――グェッ！」

「ばっかみたい、危険な所を教えてくれるなんて」たった今トドメを刺した剣を、アリサは鞘に収めた（**戦闘Ｐプラス１、マジックＰプラス１、プラス２００メセタ**）。

●海岸のほうにまわる　……⇩１７３へ

「しかし、危険だからこそ何かがあるかもしれません……」と、ルツ。

●あえて溶岩地帯へ　……⇩２０５へ

「ちーずけーきカ。ヨシヨシ。コッチニ来ナサイ」

１５３

152〜155

ロボットに案内され、アリサたちは謁見の間に通された。
「おお、おまえがアリサか。ラシークを倒しにいくそうだな」奥の扉が開き、総督が姿を見せた。

⇩104へ

154

セントールは盾を捨てると、その手でビームガンを抜いた！
「いかん！　地上に出るんだ！」
間一髪、アリサたちは部屋の外に逃げ出した。
「あんな狭い所じゃ、人数が多いほうが不利だからな」と、タイロン。
セントールが外に出る気配はなかった。

⇩181へ

155

ルツの言葉に従い、一行はパルマ星に再びもどった。
「さあ、この中へ」ルツは、職員たちに見つからないように、宇宙空港の隅にやってきた。
「でも、これはマンホールよ」
「ただのマンホールじゃないんですよ」そう言うと、ルツはフタを持ち上げ、中に入った。
中は、地下通路になっていた。

さらに驚くことに、出口から抜け出てみると、そこは廃屋の中であった。

「ここは？」

「この家の外は、もうガシコの森ですよ。――む、しかし、早くもジャマ者が現われたようですね」

廃屋を出た一行が遭遇したのは、真っ赤な大蛇――サーペントだった。

サーペント　16＋バトルP（1のG）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のD）で戦います。

●敵よりPが上……⇩118へ

●下……⇩184へ

一行は、大陸の北端までやってきた。目と鼻の先に、バルデボという村がある。そして、海峡の向こうに通じる海底洞窟の入り口もすぐ近くだ。

●バルデボの村に行く……⇩210へ

●海底洞窟に入る……⇩231へ

156

157

「ハ、ハーイ、元気ぃ」

「ワタシハ、スコブル好調ダ。ロボット国家試験モ一発デトオッタ。トコロデ、オマエ、

ろーどぱすヲ、持ッテイルカ？」

「ロードパス？　もちろん、持っているわよ」アリサは、それを取り出し、見せた。

――こうして、アッケなく、アリサたちは、牢獄内に入ることができたのだった。

●東に進む……⇩181へ

●西に進む……⇩31へ

158

アリサは、さっきアマモト博士からもらった小ビンをルベノ博士に見せた。

「おお！　これは『シャーキンのツクダニ』ではないか！　わしの大好物じゃよ。ここの牢獄暮しは食いものもうまいし、バカにする者もおらんし、気に入っておったんじゃ。しかし、『シャーキンのツクダニ』だけは手に入らんかった。こうなったら、ダニを腹いっぱい食うぞ！」

博士は、ベッドの脇の壁を蹴とばした。すると、壁の一角にぽっかりと穴が開いた。

「いつでも出られるようにしておいたんじゃ。どうやら、この博士。道楽で牢獄に入っていたらしい。

⇩100へ

ドアを開けると、中には、汚れた白衣に身を包んだ男がいた。

●**ルベノ博士に会ったことがある**……⇩177へ

●**ない**……⇩121へ

159

「いけない！　このガスは毒性のようです」そう言って、ルツは前に手に入れたガスクリーナーを取り出した。

「それは、どういう機械なの？」

「一種の空気清浄機。見た目は小さいですが、半径10メートル以内の有毒ガスや細菌を無力化することが可能です。わたしから、あまり離れないように進んでください」

⇩209へ

160

「ふーん、便利ねえ」

アリサたちは、アビオンのドラッグストアに立ち寄り、ポリメテール50メセタ）。

「この薬は、ラコニア以外のどんなものも溶かしてしまうそうよ」

161

159〜163

「バルデボ村のスクラップから、ハプスビーを見つけることもたやすいってことだな」

●バルデボの村に直行 ……⇩210へ　●ローアの村にも寄ってみる ⇩126へ

進んでいくと、突き当たりにドアがあった。ダンジョンキーを使って開けてみる。

中にいたのは、青いヨロイに身を包んだ半人半馬の騎士だった。

「こいつは、ラシーク親衛隊のセントールだぜ！」タイロンがオノをかまえた。

●マジックPが3以上 ……⇩134へ　●2以下 ……⇩112へ

162

163

尻尾の打撃は、あまりにも大きかった。骨が何本も折れているらしく、アリサはまったく身動きできなかった。

そこに、グリーン・ドラゴンの炎が伸びてきた。人間を一瞬のうちに焼きつくす炎が！

END

「おお、たしかに」博士は、金を受け取った（**マイナス200メセタ**）。
「でも、たった200メセタで、ホントに宇宙船ができちゃうんですか？」
「おほん、そこがその天才というヤツじゃよ。どっか、その辺でも歩いてきなさい」
（**ここで村の病院に行くことが可能。10メセタ払うと、HPプラス2**）
博士の言うことは本当だった。アリサたちが帰ってみると、裏庭に真っ白い宇宙船が完成していたのだ。
「どーだ、わしの傑作ルベノ号じゃ。これがあればモタビア星どころか、もっと遠くのゾリス星まですぐに出発しましょう！」
「やったぁ！」
「いや、待てい！」と、ルベノ博士が一行を引きとめた。

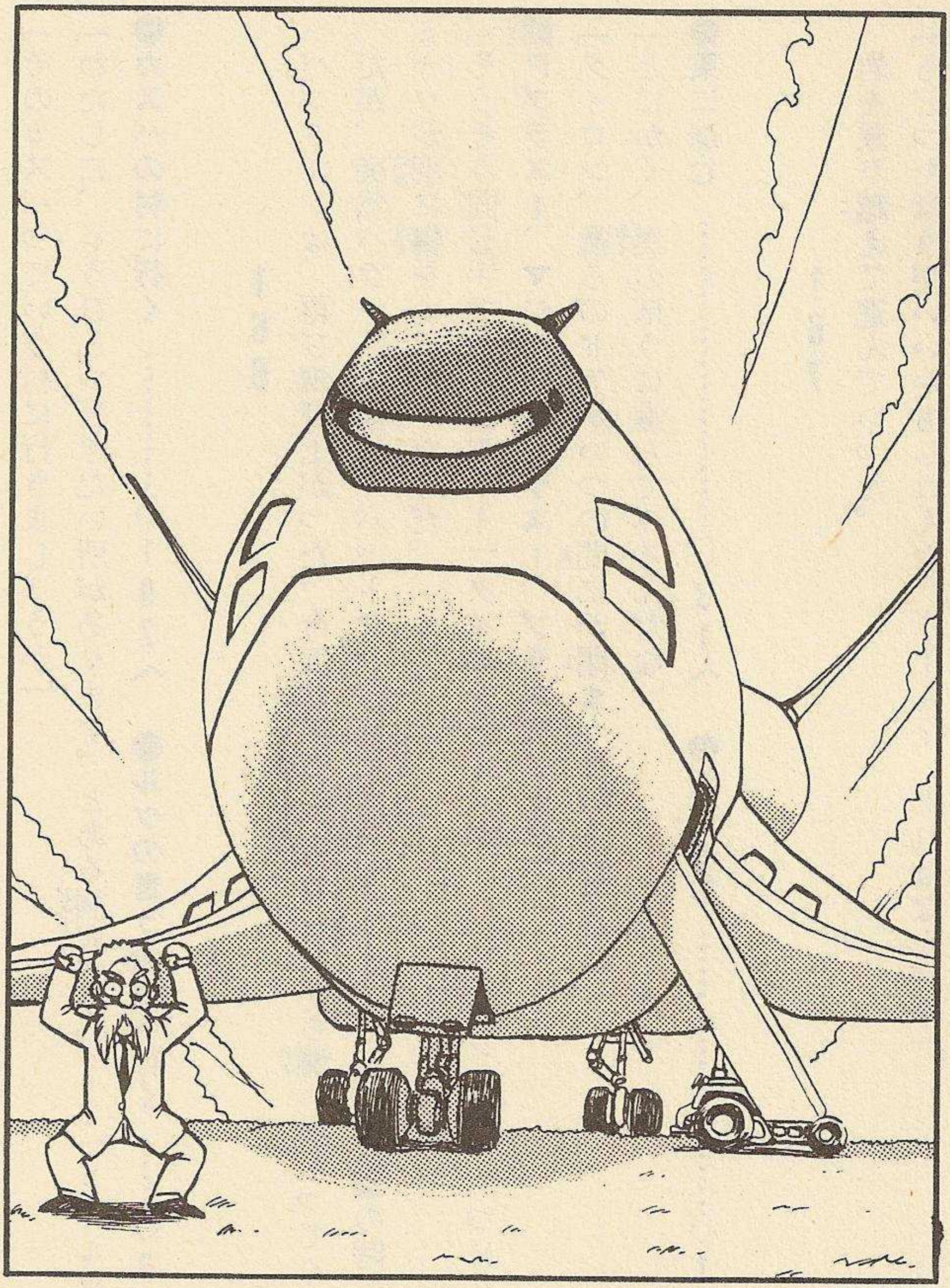
165

ルベノ号は、無事に宇宙を渡り、モタビア星に着いた。いつもの宇宙空港をさけ、パセオの南にあるウーゾの村に着陸する。
（**村の病院に行くことが可能。20メセタ払うと、HPプラス5**）
村人に話を聞いたアリサは、近くのカスバの村に怪物が棲んでいることを知った。

⇩139へ

164

164～165



164●さすが天才（てんさい）！　ルベノ博士（はかせ）は、アッという間に宇宙船（うちゅうせん）を作ってしまった。「どーだ、わしの傑作（けっさく）ルベノ号じゃ！」

「そのカスバっていう村に行きましょうか」
「わたしに、もうひとつ行きたい所がありま
●カスバの村に行く……⇩192へ

●166

バットマンは、再び飛び上がった。今度は後方宙返りしながら襲いかかってくる。
だが、突然バランスを崩し、バットマンは床に激突した！　さっきの攻撃の時、すでにミャウが羽に傷をつけていたのだ。
「そうそう同じ手でやられるか！」タイロンのオノが、バットマンを真っ二つにした（戦闘**30メセタ**）
「タイロン、後ろのドアがいつの間にか閉まっているわよ」
「とにかく、奥のほうに進んでみるんだな」
●東に進む……⇩31へ

●167

岩を乗り越えて進んでいった。
「もどったほうがいいかもしれんな。――ん？　あれはなんだ？」
●西に進む……⇩114へ

166〜169

タイロンのさすほうを見ると、細長い塔が天を突くように建っていた。

●塔に行ってみる……⇩411へ

●もどって、迂回コースをとる⇩125へ

168

L字の曲がり角に来た。

「こんな所に宝箱があるわ」

●現在の戦闘PにバトルP（1のC）を足すと?

●奇数になる……⇩102へ

●偶数になる……⇩133へ

169

「毎度ありい」（マイナス200メセタ）。「話というのは、バルデボのスクラップ置き場に、いろいろと高価なものが埋もれているってことですわ。ロボットとか水上艇とか……。もっとも、掘り返すだけで、何カ月もかかるけどなぁ。じゃ、これで――」

タイロンは、帰ろうとする主人の襟をつかんだ。

「それだけで200メセタというのは高いぜ。もっと何かあるんだろ」

「はは、旦那には、かないませんな。このポリメテールもつけますよ。こいつは、ラコニア製なら一発で発見できまア以外なんでも溶かしてしまう薬でね、ロ

すよ」（Fをチェック。ポリメテール入手）

●バルデボの村に直行……⇩210へ

●ローアの村にも寄ってみる　⇩126へ

突然、赤い光が降りそそぎ、アリサの足元を焦がした。

見上げると、崖の上に青い服の一団がいた。身長1メートル程度の直立ネズミの群れだ。

そいつらは、ビームガンを使ってアリサたちを攻撃してきた！

●ニードルガンがある……⇩107へ

●ない……⇩149へ

170

171

ダンジョンキーを使ってドアを開けた。中には、ひとりの老人の姿が。

「だれじゃ？」

「失礼。あなたはルベノ博士じゃないようですね」と、ルツ。

「わしは、アマモト博士じゃ。そうか、ルベノもこの牢獄にいるのかね。とは昔一緒に研究したことがあっての。すまんが、ルベノを見つけだすことができたら、これをやってくれんか」

「なんですか、これ？」アリサは、アマモトから小ビンを受け取った（Eをチェック）。

170〜173

「シャーキンという怪物のツクダニだよ、けけけ」
「そ、そうですか。それでは、しっかりお渡ししますので」（うげげ……）
アリサたちはその部屋を出た。

172

変な匂いがすると思えば、この村のあっちこっちには、スクラップが山のように積まれている。
「これじゃ、しかたないわ。さっきの洞窟に入ってみましょうよ」

⇩231へ

173

「溶岩で蒸し焼きにされるなんてごめんだわ。海沿いに行きましょう」
だが、ラシークが支配するこの世界。その海沿いにも、怪物は待ちかまえていた。
ザザァ！　水面から、4つの巨大な巻き貝が飛び出した！
アンモナイト　4匹　18＋バトルP（1のG）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のE）で戦います。

●敵よりPが上……⇩203へ
●下……⇩131へ
⇩31へ

「おまえがアリサか。うちのロボットを壊してくれたそうだな……」
一波乱のあと、ようやく総督に会えたアリサたちだが、のっけから
まった。無理もないが。
「まあ、いいわ。そのくらいの元気がなければ、ラシークを倒すことは無理だ」
そう言われてホッとするアリサたち。

174 ⇩104へ

175

アリサたちは、男に駆け寄ろうとした。だが、
一群が姿を現わした。海にすむシャーキンに似た怪物、マーシーズで
「やっぱりワナなの？」

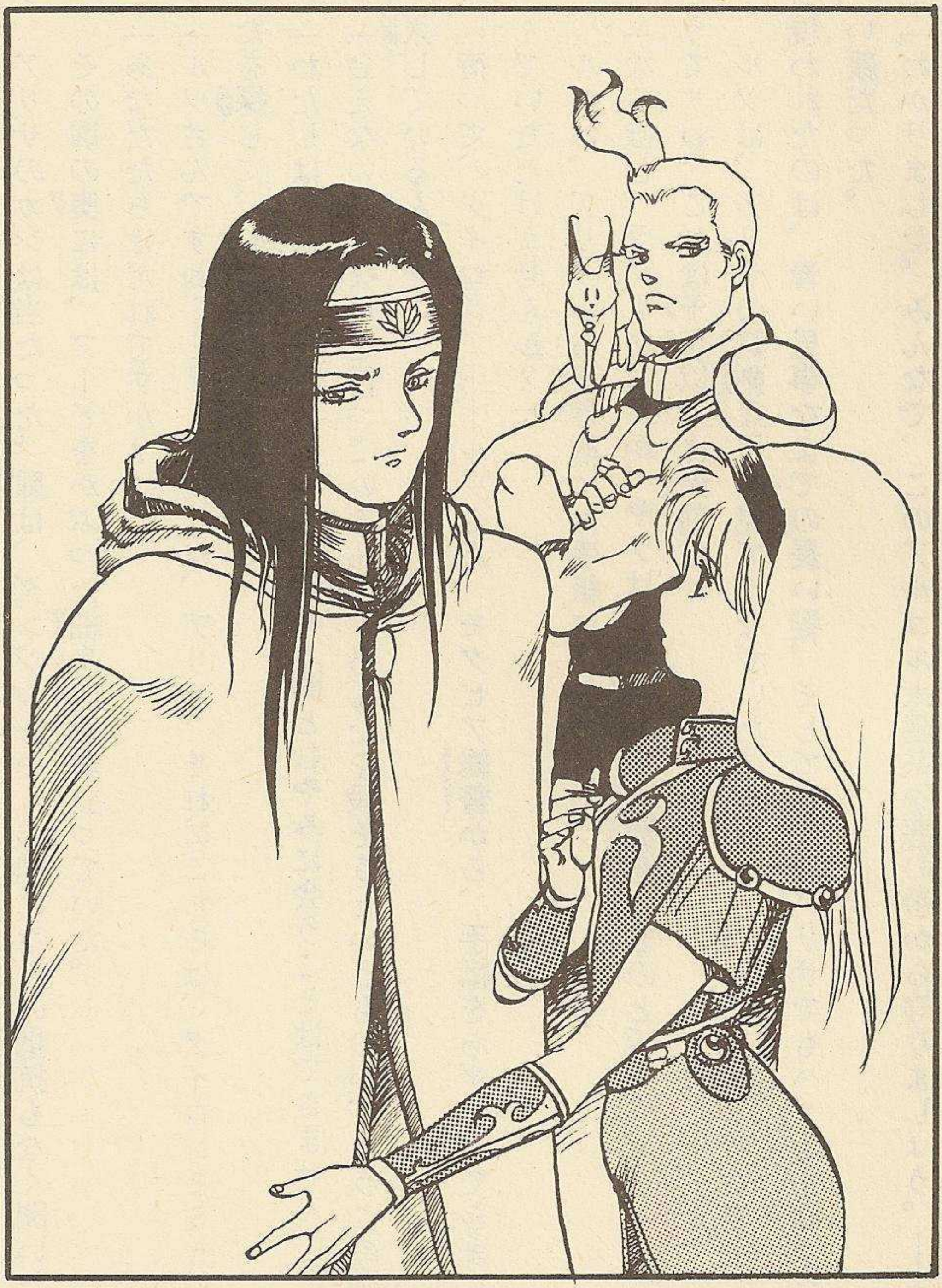
マーシーズの群れ　19＋バトルP（1のF）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のA）で戦います。
●敵よりPが上……⇩123へ

176

「さっきのヤツが残したこのカギを試してみるわ」

●下……⇩185へ

174～176



176● 「わかりました。みんなで、このアルゴル太陽系を悪の手から守りましょう」ルツは、アリサにそう言った。

アリサのカンは当たった。扉は、ダンジョンキーの前になんの抵抗もなく開いた。

その扉の奥には、フードをかぶった細身の男が立っていた。

「あなたたちはだれですか？」

「ルツさんですね……？　あたしは、アリサ。それにこちらは、タイロンとミャウ。あなたを探しに砂漠を渡ってきました」

「わたしは修行中の身なのです。外の人間とむやみに会うことはできません」

「会えないって、なにを言っているんだ。あんたを殺そうというものが、もうこの洞窟に侵入しているんだぜ！」

「待って、なにを言っているんだ。あんたを殺そうというものが、もうこの洞窟に侵入しているんだぜ！」

ルツは、タイロン。――ルツさん、モタビア総督から、手紙をあずかってきました。読んでいただけませんか？」

「なるほど、ラシークですか。ヤツは、邪教の――混沌のものと手を結ぼうとしているようですね。これは予想以上に深刻だ」

ルツは、アリサから受け取った手紙に目を通した。

現われたのは、青い見事なまでの長い髪。そして、自分のフードを取った。中から現われたアリサの真剣な目を見てうなずいた。そして、女のアリサでもハッとするような美しい顔だった。みんなで、このアルゴル太陽系を悪の手から守りましょう。――そのた

「わかりました。

めには、まずパルマ星のガシコの森へ行かなくては……」
「ガシコの森？」
「そこで、ルベノ博士に会うんですよ。ちょっと変わり者ですがね」
⇩155へ

177

「ルベノ博士じゃないですか」
「いかにもそうじゃが。おお、たしかキミはルツくん。まさか、このわしをここから連れ出す気じゃなかろうね。それは、まっぴらごめんじゃ」
●ない……
⇩195へ

●Eにチェックがある……
⇩158へ

178

ビュートは、予想以上の強敵だった。頭を落とされても、体を剣で倒れず、その怪力であばれ回ったのだ（HPマイナス2）。
「こうなったら、怪物の体をバラバラにするしかないわ！」
アリサたちは、鋭い爪と怪力に悩まされながらも、ようやくそれをやりとげた。
●西に進む……
⇩254へ

●北に進む……
⇩273へ

「死ね、バカ者ども！」サイボーグメイジは、両手から火球を飛ばしてきた！　それぞれ、アリサとタイロンを直撃！　ふたりともヨロイがなければ、即死だった（HPマイナス1、戦闘Pマイナス1）。

「ううう……。あれは、フレエリという超能力よ」

「超能力者だろうが、不死身じゃないはずだ。みんなで一斉に攻撃するぞ」

●HPが3以下……200へ

●2以下……130へ

ルベノ博士の言葉どおり、アリサ一行は大陸の北をめざした。

山ぎわに沿って進んでいくと、大きな岩がゴロゴロ転がっている所に出た。

●岩石地帯を進む……167へ

●迂回コースをとる……125へ

再び分岐点に出た。東西に通路が延びており、すぐ南側には鋼鉄のドアがある。

●東に進む……109へ

●西に進む……31へ

●ドアを開ける……162へ

179〜184

さっきの階段の所にもどってきた。

●西に進む……⇩263へ

182

「このゴミ山のどこかに、ハプスビーが埋もれているわけか……。けで1カ月以上かかりそうだな、こりゃ」

さすがのタイロンも、村のスクラップ場を見て、うんざり顔だった。

「ポリメテールという薬は、この村にはないようですね」

「さっきの洞窟に入ってみましょうよ。向こうの大陸に行けばあるかも」

183

●南に進む……⇩225へ

●西に進む……⇩263へ

サーペントが炎を吐き出した。標的は、アリサ！

間一髪、ルツがマントでその炎をさえぎった。

「このヘビやろうが！」背後にまわったタイロンが、オノでサーペントの首を切断した！

（戦闘Pプラス1、プラス50メセタ）

184

「……」と、アリサ。

⇩231へ

「ルツさん、ケガをしたんじゃ」
「ちょっとした火傷ですよ。肉体労働はどうも苦手で」（HPマイナス1）
「そのわりには、さっきの動きはすごかったな。もう少しで、アリサが丸焼きになるところだった」
「まぐれです。さあ、この森を抜ければ、すぐにガシコの村です」

⇩44へ

185

マーシーズどもは溶岩をしたたらせ、地面に上がってきた。
アリサは、身がまえた。
「待ってください。どうやら、ヤツらの狙いはわれわれではないようです」
ルツの言葉どおり、半魚人どもはアリサたちに寄ってこなかった。さっきの男をつかまえると、いやがるのを押さえつけ、溶岩池の中に引きずりこんでいった。
男のあわれな叫び声が、いつまでもアリサの耳にこびりついていた。しかし、溶岩の中にまで追跡するわけにもいかなかった。
「ひょっとしたら、脱走者だったのかも……」
アリサたちは、心残りのまま溶岩地帯を抜け出した。

⇩156へ

185〜187

怪物は、再び飛んだ。タイロンがすばやくオノをくりだすが、空振り！

186

空中で停止したため、タイミングが合わなかった。

そのスキを突かれ、タイロンは敵の爪をくらってしまった（HPマイナス1）。

だが、そのバットマンもバランスを崩し、床に激突した！　今の攻撃の時、ミャウが羽に傷をつけていたのだ。

「これできさまもおしまいだ！」タイロンのオノが、バットマンを真っ二つにした（戦闘PプラスI、マジックPプラス1、プラス30メセタ）。

「タイロン、後ろのドアがいつの間にか閉まっているわよ」

「とにかく、奥のほうに進んでみるんだな」

●東に進む……⇩31へ

●西に進む……⇩114へ

187

「お嬢さんがた、ロボットを探しているそうやな」どこから嗅ぎつけたのか、村のドラッグストアの主人が、アリサたちににじり寄ってきた。

「え？　そうですけど、なにか？」

「200メセタ出してくれたら、いいこと教えますで」

●200メートセタある……⇩162へ

188

グリーン・ドラゴンが、その巨体をぬっと現わした。いかにも強そうだ。
「ここはわたしが」ルツが、すっと一行の前に出た。
「ビンドワは炎(ほのお)を吐(は)いて威嚇(いかく)していたという超能力(ちょうのうりょく)です。さあ、きましょう」（マジックPマイナス1、宝石を換金(かんきん)してプラス200メートセタ）

●ない……⇩202へ

189

やがて十字路に出た。

●東に進む……⇩140へ
●南に進む……⇩119へ
●西に進む……⇩168へ
●北に進む……⇩87へ

190

不気味(ぶきみ)な静けさの中、一行はT字路に出た。

188〜192

●南に進む……⇩244へ
●東に進む……⇩296へ
●北に進む……⇩218へ

191

グリーン・ドラゴンの口から、10メートルもの火炎が伸びた！
間一髪、髪、アリサたちは四方に散る。
反撃だ！　ミャウが、ドラゴンの頭に乗り、目を潰した。叫び声をあげ、のけぞるドラゴン。みんなは、そのむきだしになった腹を狙って、それぞれの武器を突き出した！
グリーン・ドラゴンは、ひっくり返ったまま動かなくなった（**戦闘Pプラス1、マジックPプラス1、宝石を換金してプラス200メセタ**）。
⇩164へ

192

カスパの村に向け、ランドマスターを発進！　このルベノ号に搭載されていた乗り物を使えば、砂漠の旅もぐっと楽になる。
「よし、この調子なら、あと1時間もしないうちに到着だ。――ん、あれは？」ハンドルを握るタイロンが目をむいた。
前方に巨大な砂柱が上がったのだ。砂を噴き上げながら出現する長大なミミズ！

「サンドワーム系の怪物だわ！　青と紫、2匹いる！」
「Uターンしても無理か。よし、ランドマスターを降りるんだ。戦いで壊れるのはまずい」
●**青いヤツから攻撃**……⇩**250へ**　●**紫のヤツから攻撃**……⇩**227へ**

193

「わ！」
「あたしがやるもは、前に出たアリサにクライオンどの猛攻に耐え、最初の1匹の首をはねた。うろたえる敵の間に飛びこみ、い爪を使ってくる！（HPマイナス1）
アリサは、その羽をやられたクライオンなど敵ではなく、残った2匹は、すぐにアリサの羽を切り裂く。
剣のえじきとなった。
「けけけ、この先は溶岩地帯だ。そこでくたばりやがれ――グェッ！」
「ばっかみたい、危険な所を教えてくれるなんて」
最後の敵にトドメを刺した剣を、アリサは鞘に収めた（**戦闘Pプラス1、プラス1、マジックPプラス1、200メセタ**）。
「しかし、危険だからこそ何かがあるかもしれません……」と、ルツ。
●**海岸のほうに回る**……⇩**173へ**　●**あえて溶岩地帯へ**……⇩**205へ**

193〜196

十字路に出たアリサたちは？

●東に進む……⇩257へ

●南に進む……⇩294へ

194

●西に進む……⇩228へ

●北に進む……⇩213へ

195

何度説得しても、ルベノ博士は首をたてに振らなかった。

ここはいったんあきらめて、アリサたちは外に出た。

⇩109へ

196

セントールは盾を捨てると、その手でビームガンを抜いた！

こう狭いと、人数の多いほうが不利だ。アリサたちは、ビームをまともに浴びてしまった！

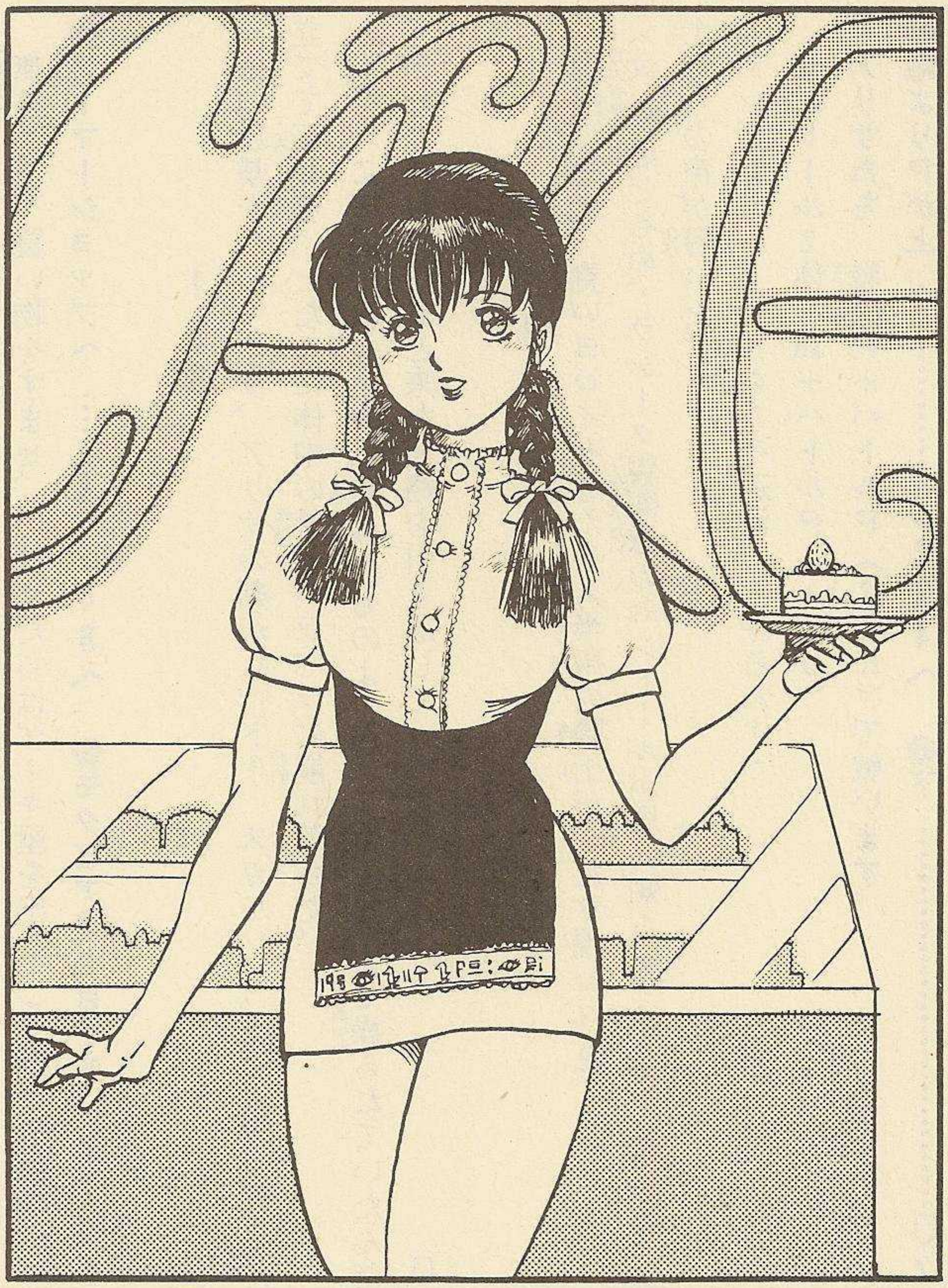
浮足立ったところを、今度は剣で攻撃される（HPマイナス2）。

アリサたちは急いでドアをロックし、部屋を逃げ出した。

⇩181へ

「そうだわ！」アリサが、パチンと手を打ち鳴らした。
「アーマーショップに行く前に、ケーキ屋さんに寄りましょうよ」
「は？　ケーキじゃ敵は倒せんぞ」タイロンは眉をひそめた。
「食べるのか？　太るとか言っていたろう。それ以上、太くなってどうする気だ？」
「失礼ね！　おみやげよ、お・み・や・げ！　知らなかったの!?　モタビア総督は甘いものには目がないのよ。――あった、あのお店で買いましょう」
　ボーゼンとするタイロンを引きずって、アリサはそのケーキ屋に入っていった。
　その店には『こんなところにケーキ屋があってすみません』という看板が出ている。
「なんですか、この看板？」
「いらっしゃいませー。さあ、なんでも先代が地下迷宮の奥で営業していた時の口癖だったようですけど。それより、このチーズケーキいかがですか？」
「わぁ、おいしそう♡　こっちのイチゴのショートケーキもいいな♡」
「オレは、このおねーさんの服がいい♡　ずげ！　アリサちゃん、その足どけてくんない」
（ショートケーキか、チーズケーキ、どちらかを選んで、アイテムリストに記入。値段はどちらも同じで、マイナス20メセタ。なお、〝おねーさんの服〟は買えませんので、あしから

197



197●色っぽい服を着たおねーさんが現われた。60＋バトルP（1のH）で戦って勝つと、服がもらえます（ウソ）。

無事（？）買い物をすませ、アリサたちはケーキ屋を出た。それから先は、

●アーマーショップへ……⇩146へ

●モタビア星を目ざす……⇩124へ

198

敵の攻撃をかいくぐり、アリサの剣がヒット！　スカルソルジャーの首が、乾いた音を立てて転がる。とたんに体中の骨がバラバラに崩れ落ちた。

「見て、この盾の紋章。古い貴族のものよ。きっと邪教の力で操られていたんだわ」

アリサたちは、もと来た通路を引き返していった。

⇩31へ

199

通路の先に、青いヨロイを着た半人半馬の騎士がふたり現われる。

〈反逆者どもめ、ラシーク親衛隊のセントール2体　36＋バトルP（1のJ）

「テレパシーか。そちらこそ退治してやるわ！」

セントール2体　36＋バトルP（1のJ）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のE）で戦います。

●下……⇩248へ

●敵よりPが上……⇩274へ

〈反逆者どもめ、ラシーク親衛隊のセントールが思い知らせてやる！〉頭の中にその怪騎

「くらえ、フレエリのマジック！」サイボーグメイジの両手から火球が飛んだ！
アリサとミャウは、飛び上がってかわした。そのまま空中から攻撃をかける。
ガシッ！　アリサの剣をメイジは片手で受け止めた。
「ククク……。機械の体だと言ったろうが。こんな剣など役に立つものか。――む、あのネコはどこへいった？」
魔道士の背後に取りついたミャウは、そのままフードを引き下ろした。
装甲もなく、むきだしだった。
「よーし、とくやったミャウ。そこをどきな」タイロンがオノを振り上げた。
ズズッ！　サイボーグメイジの背中にオノが食いこんだ。その裂け目にタイロンが手を入れ、引きはがす！
「ひっ！　やや、やめてくれぇ！　うぎゃやややややあ!!」
ベキベキ……。裂かれた背中から、火花が散り、流れでた黒い油に引火した。
「すっごい勝ちかた。さすがタイロン」
「なに、タイロン……？」燃え上がるメイジが、口をきいた。「バカな、末したはず」
「情報が古いな。オレはこのアリサに助けられたんだぜ」

「アリサ……。そうか、あの男の……」そう言い残して、魔道士は死んだ。

ミャウは、その骨と機械の燃えかすの中から、無傷のカギを見つけ出した（**ダンジョン⇩111へ**）。

キー入手）。

アリサたちは背中を合わせ、敵を迎えうった。スキのない動きで、バイターフライどもを1匹1匹、叩き落としていく。

幸い、だれも毒針にやられることなく、バイターフライを撃退することができた（**戦闘**）。

Pプラス1、プラス50メセタ）。

洞窟を出た一行は、そこで『アビオンの村まで500メートル。ローアの村まで2キロ』という看板を見つけた。

●アビオンの村に行く……⇩223へ　●ローアの村に行く……⇩126へ

202

「金がない？　そりゃ、いけませんな。見たところ、強そうな人もいるけど、南の塔に行ったらどうです？　そこにはお宝がいっぱいあるそうで。もっとも、怪物がうじゃうじゃいるんで、だれも生きて帰れた者はおらんそうだが」

201〜203

「帰れた者がいないのに、なんでそんなにくわしいの？」

「そ、それは…」主人は、口ごもった。

「まあ、いいじゃないか、アリサ。話半分としても、怪物がいるのはたしかだろう。そいつらを退治できないようでは、打倒ラシークなど無理だぜ」

タイロンの言うこともっともだ。アリサたちは、主人から道を聞いて、再び南の大陸にもどった。そして、岩場にそびえ立つ塔に向かった。

⇩411へ

203

アンモナイトは、そのまま空中に停止した。殻の一部が開き、アリサたちに毒液を吐いてくる！

アリサはそれをかわすと、アンモナイトめがけ飛び上がった。次の瞬間に、殻の開いているところを突き刺す！

アリサは、海面から消えていった。

振り向けば、ほかの3匹もタイロンたちが片づけていた（戦闘Pプラス1、プラス10メセタ）。

⇩156へ

「あれ、これは……」アリサが宝箱のフタを開けた。
「ガスクリーナーですね。もらっておきましょう。あとで役に立つかもしれない」そう言って、ルツはその小さな機械を服のポケットに入れた（**ガスクリーナー入手**）。

●**通路をもどる**……⇩**273へ**

204

●**塔の外に出る**……⇩**17へ**

205

汗をふきふき、溶岩地帯を進む。溶岩そのものには触れないようにしているが、熱のために体力が奪われていく（**HPマイナス1**）。
「もう少しで抜け出せるわ。――あれ？　向こうに何か倒れているみたいよ」
「人間の男のようですね。いや、手の形が違う。それにウロコのようなものが……」

●**行ってみる**……⇩**175へ**

●**行かない**……⇩**136へ**

206

タロスの分厚い皮膚には、なまじっかな攻撃は通用しない。
アリサたちは、怪物のこぶしをかわすと、目を狙って攻撃した！　続いてノド！　それから＊＊＊＊＊＊攻撃した。タロスは、たまらずもんどりうって倒れた。

204〜207

「やっぱり、怪物にも＊＊＊＊＊ってあるのね」
「その＊＊＊＊＊って、やらしいから、やめんか」とタイロン。
通路の先はL字の角になっていた。
●北に進む……⇩182へ

●西に進む……⇩292へ

「まだパルマ星にも、あやしい所はあるようじゃ。ラシーク本人がどこかにいるかもしれん。わしの調べによると、アビオンの塔とメデューサの塔に、いろいろと怪物たちが集まっているそうじゃが」
と、ルベノ博士がアリサたちに説明した。
「メデューサの塔！　メデューサはそこにいるのか!?」タイロンが声を荒げた。前にやられた時のことを思い出したのだ。
「おそらくな……。アビオンの塔のほうにも、恐ろしいヤツがいるそうじゃが」
●メデューサの塔に向かう……⇩411へ

●アビオンの塔に向かう……⇩233へ

「ゾンビ系のヤツは、頭が弱点だったな」タイロンは、オノでビュートの首を切り落とした。血まみれの頭がごろんと転がる。

「どうだ、早くぶっ倒れろ！　――うわっ！」

ビュートは、それどころか、その鋭い爪でタイロンの脇腹を突いたのだっ。頭を失っても倒れなかった。そ、こいつをやっつけられるの、ルツ？」

「タイロン！」アリサは、ビュートの胴体をめった突きにした。それでも、まだ倒れない。死人の怪力は、ヨロイさえもつらぬいていた！（HPマイナス1）

「どうすれば……」ルツは、転がっていたビュートの頭を杖で砕いた。

「おそらく……」

とたんにビュートの体は、糸の切れたあやつり人形のように、崩れ落ちていった。

「やはり、頭を完全に破壊するしかないようですね」（マジックPプラス1）

この先のL字路をどうするか？

●西に進む……⇩254へ

●北に進む……⇩273へ

ようやくガス帯を通り抜け、アリサたちはソピアの村にたどり着いた。

ラシークの基地があるのでは、と意気ごんでいたアリサ。だが、村のみすぼらしい姿を

208～211

見て、彼女はアゼンとした。
「あなたたちが、ラシークを倒そうという勇者さんたちか。ごらんのとおり、ソピアはとても貧しい村でなぁ」村長の老人がアリサたちに話しかけてきた。
「200メセタ寄付していただければ、この村に伝わる武器をさしあげますが」
●200メセタ以上ある……⇩300へ
●ない……⇩262へ

バルデボの村にやってきた。
●Fにチェックがある……⇩142へ
●ない……⇩172へ

210

リバイアサンとデザートリーチは、砂中からいかかってきた。アリサたちは必死に応戦する。
怪物の激しい動きに、砂ぼこりが舞い上がりさまってきた時、周囲が暗くなる。――やがて、
「あれ？　あは、バッカみたい!!」アリサは、砂の入った目をおさえて笑った。
2匹の怪物は、お互いにからみ合ったまま、動けなくなっていたのである。とどめを刺

211

すのは簡単だった（戦闘Pプラス1、プラス100メセタ）

212

ふいに陽の光がさしこんできた。塔の入り口のところにもどってきたようだ。

●**このまま外に出る**……⇩17へ

●**東に進む**……⇩273へ

●**南に進む**……⇩254へ

213

霧のようなものが、一行の周囲を包んだ。その中に上半身だけ浮かぶように、いくつもの人影が見える。いずれも、緑色のフードを深くかぶり、顔は見えなかった。

「ただの脅しですよ」と、ルツが言った。「こいつらはB級の魔道士、ワイトどもだ」

アリサたち　30＋バトルP（1のA）

●**敵より上**……⇩278へ

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のC）で戦います。

●**下**……⇩232へ

「ミャウ！」

214

……⇩265へ

212〜215

ネコは炎をかわすと、ドラゴンどもに向かって走った。股の下をくぐり抜け、ヤツらの背後に回りこむ。そして、攻撃！

この通路の狭さが幸いした。グリーン・ドラゴンの巨体――しかも2匹いては、急には方向転換できないのだ。

敵がミャウに気をとられているスキに、アリサは距離をつめた。ドラゴンは、火炎のかわりに血を大量に吐き出した。き入れる！　ど片づけていた。

振り向けば、もう1匹はタイロンが片づけていた。

「宝箱がありましたよ」ルツがさっそく開けてみる。「おや、金だけじゃなくて、剣も入っている。これはラコニア製だ。すごい切れ味の剣ですよ」

アリサはその剣を受け取った（**プラス200メセタ。ラコニアン・ソードを入手し、戦闘Pプラス5**）。

「本当にすごい剣だわ。これを手に入れた以上、長居は無用ね」

⇩17へ

悲しみの洞窟を出たアリサたち。これから先は？

●ソピアの村に行く……⇩247へ　●パルマ星に飛ぶ……⇩405へ

かなりの強敵と判断したルツは、いきなりヒューンという超能力を使うことにした。
一連の動作のあと、ルツは両手から恐るべきものを放った。小型の真空竜巻だ！
3つ飛ばされたそれは、吸いこまれるように、ドラゴンワイズに命中！　分厚い皮膚を切り裂いた！（**マジックPマイナス3**）
も、あっさりと
「すごいわ、ルツさん！」
だが、さすがはドラゴンワイズ。怖気づいた様子もなく、アリサたちをにらみつけた。
ドラゴンワイズ　21＋バトルP（1のF）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のC）で戦います。
●敵よりPが上　……⇩298へ

217

飛びかかってきたブルー・スライムを、アリサは剣で真っ二つにした。さらに、床に落ちたヤツを足でメチャクチャに踏みつける。
「なにも、そこまでしなくても……」あきれるタイロン。
「いーの！　こんなぬとぬとしたヤツは、二度と立ち直れないようにしなきゃ！」
あい変わらず、スライムが大嫌いなアリサであった。ブルー・スライムは、6匹ともメ

216

タメタにされてしまった（戦闘Pプラス1、プラス100メセタ）。

218

T字路に出た。

「こちらに進めば、外に出てしまいますね」ルツが東のほうをさした。

●南に進む……⇩190へ　●西に進む……⇩277へ

219

「く、苦しい……」

毒ガスは、残り少ない一行の体力をさらに奪っていった。

ミャウ、ルツ、タイロン……。彼らは、次々と毒ガスの前に倒れた。

血を吐いて、動かなくなった。ソピアの村は、まだずっと先であった。

END

220

カシャカシャという音をたてて、襲いかかってくるマッドストーカーの群れ！

だが、実力はアリサたちのほうが上だった。じわじわとガイコツ兵士どもを押していく。

⇩309へ

今もまたタイロンのオノが、マッドストーカーを真っ二つにした。
その時だ！　タイロンが肩を押さえてうずくまった。突然、飛んできた2条のビームが命中したのだ！
メデューサの手のひらから発射されたビームだった。
「わたしには、こういう力もあるのさ！　さあ、もう1発あげるわ！」（HPマイナス3）

⇩301へ

バルカンは、広げていた手を胸の前で交差させた。そのとたん、口から熱風が吐き出され、アリサたちを直撃した！（HPマイナス2）
「あちっ！　なによ、この怪物は！」
「あの硬い体の中には、マグマのような物が詰まっているんだ」
バルカンは、再び両腕を広げた。

⇩286へ

221

一行の前に、巨大な怪物がぬっと現われた。赤い体毛に覆われたゴリラのような怪物。
いや、ゴリラより筋肉質だ。それに、青い腰布を身につけ、耳がとがっている点が違う。
「タロス系のガイアだわ！」

222

221〜225

アリサは、この手強(てごわ)そうな敵の名を叫(さけ)んだ。

●戦う……⇩283へ

●逃げる（マジックPが3以上のみ）……⇩288へ

223

アビオンの村に入った。森にかこまれた静かな村だった。

●Fにチェックがある……⇩161へ

●ない……⇩187へ

224

ラシークは、杖(つえ)を風車(ふうしゃ)のように回し始めた！

ラシーク　52＋バトルP（1のJ）

アリサたち　戦闘(せんとう)P＋バトルP（2のE）で戦います。

●敵よりPが上……⇩383へ

●下……⇩305へ

225

一行の前に、巨大な怪物(かいぶつ)が立ちふさがった。緑色のゴリラのような怪物、タロスだった。

「気をつけろ、こいつは手強(てごわ)いぞ！」

タロス　31＋バトルP（1のF）
アリサたち　戦闘（せんとう）P＋バトルP（2のA）
●敵よりPが上で戦います。
……⇩206へ

通路が東西に分かれている所に出た。
どちらかにラシークがいるのか？
●東に進む……⇩357へ

226

●西に進む……⇩401へ

227

紫（むらさき）のヤツに、集中攻撃をかける。
「しめた！　こいつ、動きが鈍（にぶ）いわよ」おもいだが――青いヤツが、一行の背後（はいご）から襲（おそ）いかかった。もちろん、アリサも後ろは警戒（けいかい）していたが、青はそれ以上にすばやかった。
アリサたちは、砂（すな）の上に激しく叩（たた）きつけられた（戦闘（せんとう）Pマイナス2）。
しまった！
⇩250へ

下……⇩245へ

226〜230

あちらこちらを動きまわるアリサたち。この先の十字路を？

●東に進む……⇩194へ
●南に進む……⇩264へ

228

●西に進む……⇩282へ
●北に進む……⇩295へ

229

出血と熱気が、アリサたちの体力を奪っていた。

煙を吸いこみ、アリサは激しく咳こんだ。いっぽうドラゴンワイズは大きく息を吸いこむと、強烈な火炎を吐いてくる。

炎の中の戦い。勝負は最初から、ついていたようなものだった。火炎の直撃が、アリサの15歳の命を奪った。

230

「ちょいと、娘さん」

ボロコートを着た男がアリサに話しかけてきた。

「さっきのレストランで見たんだが、もあんたら、ラシークを追っているらしいな……。な

END

ら、武器が欲しいだろう」
「え？　それは、まあ」
「なら、オレの使っていたものを買わないか？　オレはマンモス・ハンターをやっていたんだが、大ケガをしてな……もう足を洗おうと思っているんだ」
男は、カーバンクルアイという宝石ならぬ武器を交換していいと言うが……。
●応じる（宝石ある人のみ）……⇩316へ
●応じない……⇩281へ

231

一行は、海底洞窟の中を進んでいった。
「なんか、じめじめして気持ち悪いわねぇ、なんか出そう」
アリサの言うとおりだった。ぶーんという羽音が聞こえてくる。暗闇に生息する巨大昆虫、バイターフライの羽音だ！
バイターフライの群れ　18＋バトルP（1のJ）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2の1）で戦います。
●下……⇩252へ
●敵よりPが上……⇩201へ

231〜233

ワイトたち
ミャウの毛が
「やん、なに
次の瞬間、
し、体をしび
「なにが、コ
「やっぱり、
ないルツ。
「でも、こん
なもんじゃ人は殺せませんよ」

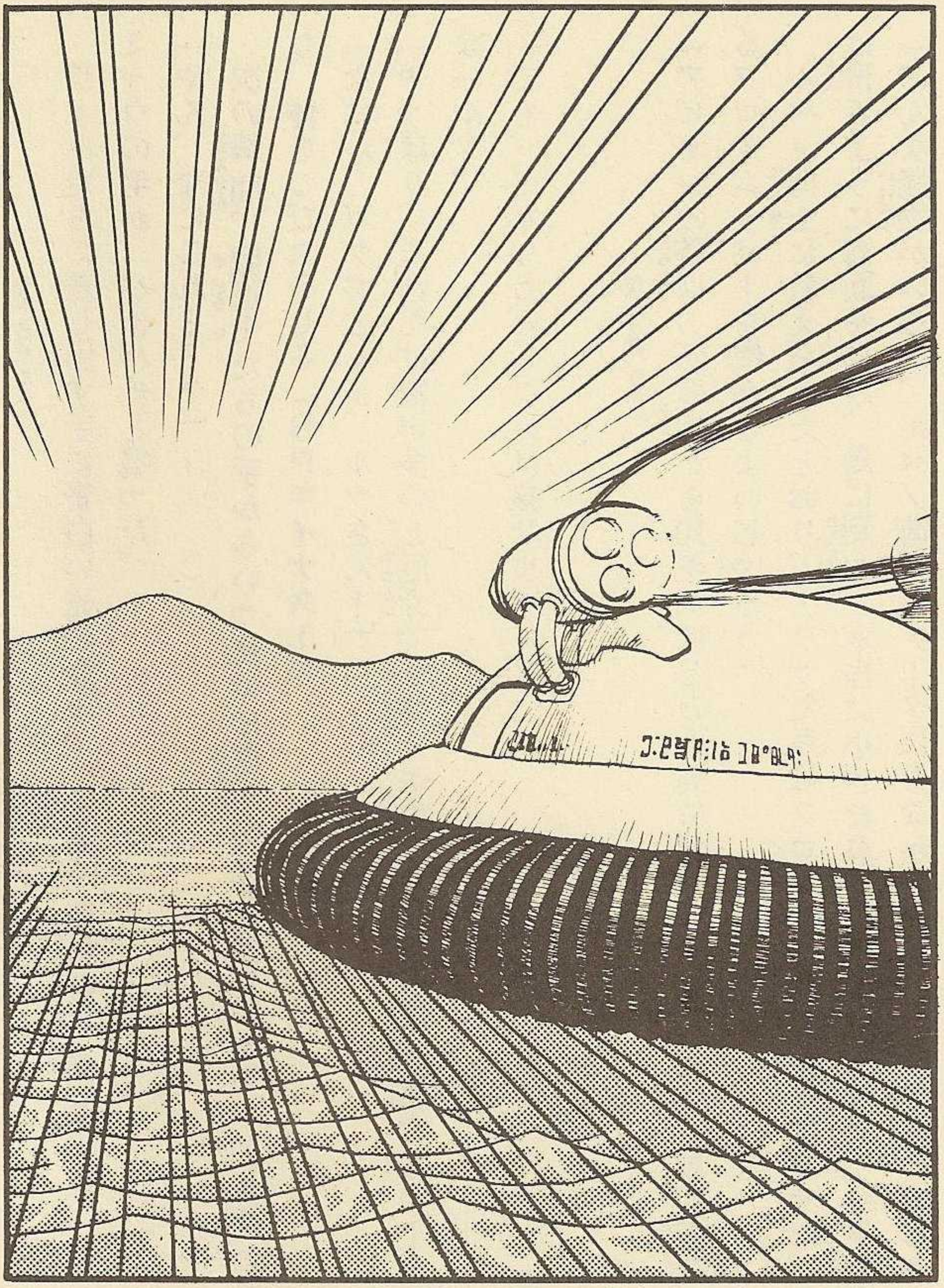
232

の差し出す手に青白い光が集まってきた。急に静電気を帯びたアリサの髪や、パチパチと鳴った。
これ……？」
魔道士たちの手からいっせいに電光がほとばしった！
れさせる（HPマイナス1）。
ケおどしよ、ルツさん！」
これだけ数が多いと厄介でしょうかね」と、こんな状態でもクールさを崩さ

⇩278へ

233

「アビオンの塔は、西の岬から10キロほどの小島に建っておる。ルベノ号に搭載されているフロームーバーを使うとよいじゃろう」
ルベノ博士は滑るように教えられたとおり、アリサたちはフロームーバーを発進させた。ムーバーは本当に小さな島で、めざす塔はすぐに見つかった。
「どんな怪物がいるか、ルベノ博士のデータにもなかったわ。気をつけなくちゃ」



233●ルベノ号から、フロームーバーが発進した。めざす小島はもう目と鼻の先だ。そこにアビオンの塔(とう)が建(た)っている。

234〜235

アリサたち一行は足音をしのばせ、塔に侵入した。最初の分岐路を、

●東に進む……⇩273へ

●南に進む……⇩254へ

L字の曲がり角に出た。曲がるか、引き返すか……。

●東に進む……⇩199へ

●南に進む……⇩261へ

234

235

「なにか、へんなにおいがしない？　肉が腐ったような」

「アリサもか。オレはさらに、ペタペタという足音が聞こえるんだが……」

「死体が歩くような音ですか。腐った肉のところどころから骨が見え、赤黒い血をしたたらせている死体。――無理もありませんな、ほら向こうの角から姿を現わしましたよ。ゾンビ系のなかでも凶悪な、ビューートというヤツです」

その姿を見て、アリサとタイロンは飛び上がった。一方、ルツはまだ淡々としている。やはり超能力者というのは、普通の神経の持ち主ではないようだ……。

ビューート　23＋バトルP（1のD）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のB）で戦います。

●敵よりPが上……⇩208へ

236

「これがとどめだぁ！」

ラシークの体が再びゆらいだ。

次の瞬間、アリサたちの後ろで爆発が！

床に転がった。

「これは？　どういうこと？」

アリサは、横機械の残骸に混じって、ラシークの上半身がるタイロンに聞いた。

「高速移動に入ったとたん、オレの撃ったレーザーガンをかまえていが誘爆したんだろう。いくら高速ったって、光の速さには勝てないってことさ」

「ふはははは！」転がっていたラシークの頭が笑いだした。

「兄の敵を討ったと思っているな。甘いぞ、アリサ！　わしは、ラシーク様の影武者なのだぁ！　本物のラシーク様がおまえらごときにやられるものかぁ！　ふげ！」

アリサの剣が、そいつの顔を真っ二つにした。

「ふん、下劣なヤツ！」

一行は広間を出て、反対側の通路を進んだ。

●下……⇩178へ

⇩401へ

フタを開けたとたん、針が飛び出し、アリサの手を傷つけた（戦闘Pマイナス1）。

「痛っ！　なによ、これもう！」――ヘンな機械が入っているけど

「だいじょうぶですか。ん？　この機械は、ガスクリーナーのようです。あとで役に立つかもしれない」（ガスクリーナー入手）。

●通路をもどる……⇩273へ

237

●塔の外に出る……⇩17へ

238

リバイアサンとデザートリーチは何度も砂中から現われ、また潜きに、砂ぼこりが舞い上がり、周囲が暗くなるほどだった。

「あ！」――アリサは、砂の入った目をおさえた。

次の瞬間、彼女の体は大きく跳ねとばされていた。リバイアサンのしっぽ攻撃！　砂クッションの役割をしなければ、骨の何本かは折れていたに違いない（HPマイナス1）。

「このミズ野郎！」

さらにアリサを襲おうとするリバイアサンを、タイロンが食い止めた。ミャウやルツがとどめを刺す。もう1匹の紫のほうは？」――アリサはタイロンに起こされた。

「ありがとう（戦闘Pプラス1、プラス50メセタ）。

236～238

「逃げてしまったようだな」

突然、炎の帯が真正面から伸びてきた！

239

「だれだ!?」

奇怪な鳴き声が返ってきた。薄暗い通路の奥に、赤い炎がちらちら見える。——やがて、グリーン・ドラゴンがその恐ろしい姿を現わした。それも2匹！

●敵よりP（1のC）が上……⇩214へ

●敵よりPが下……⇩258へ

グリーン・ドラゴン　35＋バトルP（2のH）で戦います。

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のH）で戦います。

あやうく身をかわすアリサたち。

●東に進む……⇩265へ

●南に進む……⇩269へ

240

L字の曲がり角に出た。このまま曲がるか、もどるか？

●東に進む……⇩269へ

●南に進む……⇩26へ

241

『混沌の使い』は、想像以上の敵だった。

239〜243

こともあろうに、〈タンドレ！〉――最強の攻撃魔術を使ったのだ！

青白い電光が、宙に集まり、巨大な球になった。その球ははじけ、四方に飛び散った！

かわす方法はなかった。その場にいた全員が黒こげになって死んだ。

ＥＮＤ

「さあこい、怪物め！」――アリサたちは武器をかまえた。

ドラゴンワイズ　30＋バトルＰ（1のＤ）

アリサたち　戦闘Ｐ＋バトルＰ（2のＢ）で戦います。

●敵よりＰが上……⇩298へ　●下……⇩271へ

242

うなり声をあげ、ガイアは、丸太ほどもある腕を伸ばしてきた。

アリサはそれをすり抜け、ガイアの懐に潜りこんだ。怪物の足を思いっきり踏みつける。

――だが、ガイアは蚊が止まったほどにも感じていないようだ。

243

「あら、鈍感なヤツ。なら、これは！」――彼女は、そのまま脚をはねあげた。ブーツの先端が、股間にヒット！

ガイアは、身を

折りたたむようにして苦しんだ。そこを狙って、あっさりと、とどめを刺す。

「うーん、なんて悪どい勝ちかたなんだ」

「どーいうことよ、タイロンさん？」

アリサがニヤリとして振り返った。

「い、いや、戦い慣れてきたな、ということ」タイロンの上でミャウが肩をすくめる。

先が行き止まりだったので、アリサたちはもと来た通路をもどった。

L字の曲がり角に出た。

●西に進む……244

●北に進む……314へ

●戻る……190へ

「やーっ！」アリサとタイロンは同時に武器をくりだした。

必殺の同時攻撃！——と思えたが、まったく効かなかった。タロスの分厚い皮膚には、刃物が通じないのだ。

うろたえるアリサに、タロスの巨大なこぶしが襲いかかった。間一髪、タイロンがかばって受ける（**HPマイナス3**）。アリサはタイロンの名を叫んだ。

●西に進む……245

●戻る……380へ

244〜247

「な、なんてことはない。――それより、ヤツの急所を狙うんだ！」
言われるより早く、ルツとミャウは飛び上がっていた。ルツは後頭部を、ミャウは目を攻撃した。たまらず倒れたタロス。そのノドに、タイロンのオノが落ちた。
「ふう、思い知ったか、ゴリラ野郎……」
●その先のL字の角を北に進む……⇨182へ
●西に進む……⇨292へ

246

L字の曲がり角に出た。南側の壁には氷の結晶をかたどった扉がある。しかし、ロックされているらしく、手で押したくらいではビクともしない。
（この扉を開けられるのはミラクルキーを持つ者、もしくはマジックPが15以上の者のみ。超能力を使って開ける場合は、マジックPマイナス5）
●南側の扉を開ける（条件を満たしている者のみ）……⇨299へ
●東に進む……⇨358へ
●北に進む……⇨310へ

247

ソピアの村に向かう一行は、ガスのたちこめる湿原にさしかかった。

「ガスが濃くなってきたわね。ほとんど前が見えやしない」

●ガスクリーナーを持っている……⇨160へ

●持っていない……⇨275へ

248

セントールは、それぞれ右手に剣、左手にビームガンを持って攻撃してきた。鋭いビームがアリサたちに飛んでくる。ヨロイや盾に命中し、焦げ穴を開ける。

「こんな所じゃ、身を隠す場所もないわ。一時撤退よ」アリサが叫んだ。

だが、そうはできなかった。1体がアリサたちの後方に回りこんだのだ。すばやい動きだった。だてに親衛隊に選ばれているわけではない。

アリサは苦痛に身をよじった。セントールの剣が、前後から体をつらぬいたのだ！

急速に意識を失いつつあるアリサは、仲間の声を聞いたような気がした……。

GAME OVER

249

アリサたちは、ルツの案内でその洞窟にやってきた。

ふいに、上のほうから何かが落ちてきた。モンスターフライだ！

248〜251

「む、待て、死んでいるぜ。――ここは、いったいどういう所なんだ、わたしの師匠、タジムが修行している洞窟です。どうやら、ラシークの配下の襲撃にあったようですね。師匠のことだから、だいじょうぶだとは思うが」

一行は洞窟の中に入った。すぐに分岐路になっている。

「わたしも、ここに入るのは初めてです。カンで進むしかない」

●南に進む……⇩190へ　●西に進む……⇩277へ

250

2匹の怪物は、10メートル以上もの姿を見せた。それでもまだ、かなりの部分が砂の中に残っているようだ。青いほうをリバイアサン、紫のほうをデザートリーチという。

リバイアサンとデザートリーチ　25＋バトルP（1のG）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のE）で戦います。

●敵より上……⇩211へ　●下……⇩238へ

251

怪物が出る危険地帯だけあって、アーマーショップは街のいたる所にあった。その中の一軒にアリサたちは入った。売っていたのは、

○レーザーガン　２００メセタ（銃の中では最高の威力。ヒートガンを持っている人は、それを下取りに出すことによって、１００メセタで買える。ニードルガンの人は、１５０メセタ）

○アニマルグラブ　１５０メセタ（ミャウ用の防具）

○サイコウォンド　１５０メセタ（ルツ用の武器）

（買ったものは、アイテムリストに記入し、闘Pが1ずつプラスされる）

ば、それぞれ戦闘P値段分の金をマイナスすること。また、買え

⇩343へ

アリサたちは、店をあとにした。

252

アリサは、首筋にチクンという痛みを感じた。とたんに軽いめまいが襲う。

「気をつけろ！　こいつら毒針を持っているぞ！」

アリサたちは背中を合わせ、バイターフライと戦った。なんとか撃退したものの、めまいのため討ちもらしたヤツも多かった。

洞窟を出た一行は、そこで『アビオンの村まで５００メートル。ローアの村まで２キロ』という看板を見つけた。

●アビオンの村に行く……⇩223へ

●ローアの村に行く……⇩126へ

252～254

階段を見つけたアリサたちは、それを登っていった。かなりの距離を移動し、やっと上の階に到着。地上からは相当の高さにあるようだ。

「見て、この階も迷宮よ」

●北に進む……253へ　●南に進む……213へ

●西に進む……254へ

253

L字の曲がり角に出た。角の南側に、不気味な飾りのついた扉がある。

「なによ、このドア。ダンジョンキーでも開かないわ」

（この扉は、ミラクルキーを持つ者、もしくはマジックPが15以上の者でなければ開けられない）

●東に進む……235へ　●北に進む……212へ

●南のドアを開ける（条件を満たしている者のみ）……283へ

254

ヤツを相手に戦っていては、メデューサやラシークと戦うまでに体力を消耗してしまう。アリサは、自分の持つ超能力のひとつを使った。

「ラクスタ！」（**マジックPマイナス2**）

ガイアは、アリサたちの逃げ足の速さに驚いた。冗談のようだが、これはホントの超能力なのである。――一行はもと来た通路へ。

⇩**380へ**

255

一行の行く手を灰色の壁がさえぎった。

「行き止まりか……。あれ、こんな所に宝箱があるわよ」壁のくぼみで、アリサがそれを見つけた。

●**現在の戦闘Pに、バトルP（2のH）を足すと？**

●**奇数** ……⇩**204へ**

●**偶数** ……⇩**237へ**

256

階段の所にもどってきた。ひょっとしたら、下の階にまだ見落としがあるかも……。

●**階段を降りる** ……⇩**276へ**

●**降りないでもどる** ……⇩**194へ**

257

255〜259

まだ距離があるうちに、ドラゴンどもは再び炎を吐いた。今度は同時に！
狭い通路で、2本の炎をかわすことは無理だ。アリサたちは、身を伏せたが、背中をやられてしまった（HPマイナス3）。
ヨロイのおかげで、なんとか助かっているが、このままではやられる！
●HPが6以上……⇩214へ

258

●5以下……⇩289へ

259

オノは、メデューサの髪（ヘビ！）をかすめ、壁に深々と突き刺さった。血にまみれたヘビが、床でのたうちまわった。
「こしゃくな、ぼうや！　二度と生き返れないようにしてやるよ」
タイロンは、壁からオノを引き抜いた。
「そ、そのメデューサの目が妖しく輝く。
「どうした、早く石にしてみろよ。――できまい。このペルセウスの盾は、おまえの魔力を封じこめる力を持っているんだ」タイロンは、壁からオノを引き抜いた。
「なまいきな！　マッドストーカーよ、こいつらを八つ裂きにしておしまい！」

メデューサとマッドストーカーの群れ　42
アリサたち戦闘P＋バトルP（2のF）で戦います。
●敵よりPが上……⇨301へ
●下……⇨220へ

ラシークはどこにいるのか？　さて、次はどこに？
●ソピアの村に行く……⇨247へ
●デゾリス星に飛ぶ……⇨405へ
●パルマ星に飛ぶ……⇨408へ

260

L字の曲がり角に出た。まだどこからともなく女の笑い声が聞こえる。
●北に進む……⇨234へ
●東に進む……⇨284へ

261

「そうですか……。それでは、しかたありませんな。別にいじわるをしているわけではなく、この村も食(く)っていかなくてはなりませんから……」
「ええ、わかりますよ」（ちぇっ！）

262

260〜264

アリサたちは、村長から教えられた地下道を通り、無事にガス帯の外に出た。ルベノ号を止めてあるウーゾの村に帰る。その先は？

●パルマ星に飛ぶ……⇨207へ

●デゾリス星に飛ぶ……⇨405へ

263

その先は、さらにT字路になっていた。

●東に進む……⇨182へ

●南に進む……⇨239へ

●西に進む……⇨292へ

264

前方の曲がり角から、カシャカシャという不気味な音が聞こえてきた。剣と盾を持ったガイコツたちが、何体もアリサたちの前に立ちふさがった。白骨兵士系の中では最強のマッドストーカーの群れだ！

マッドストーカーの群れ　33＋バトルP（1のJ）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のB）で戦います。

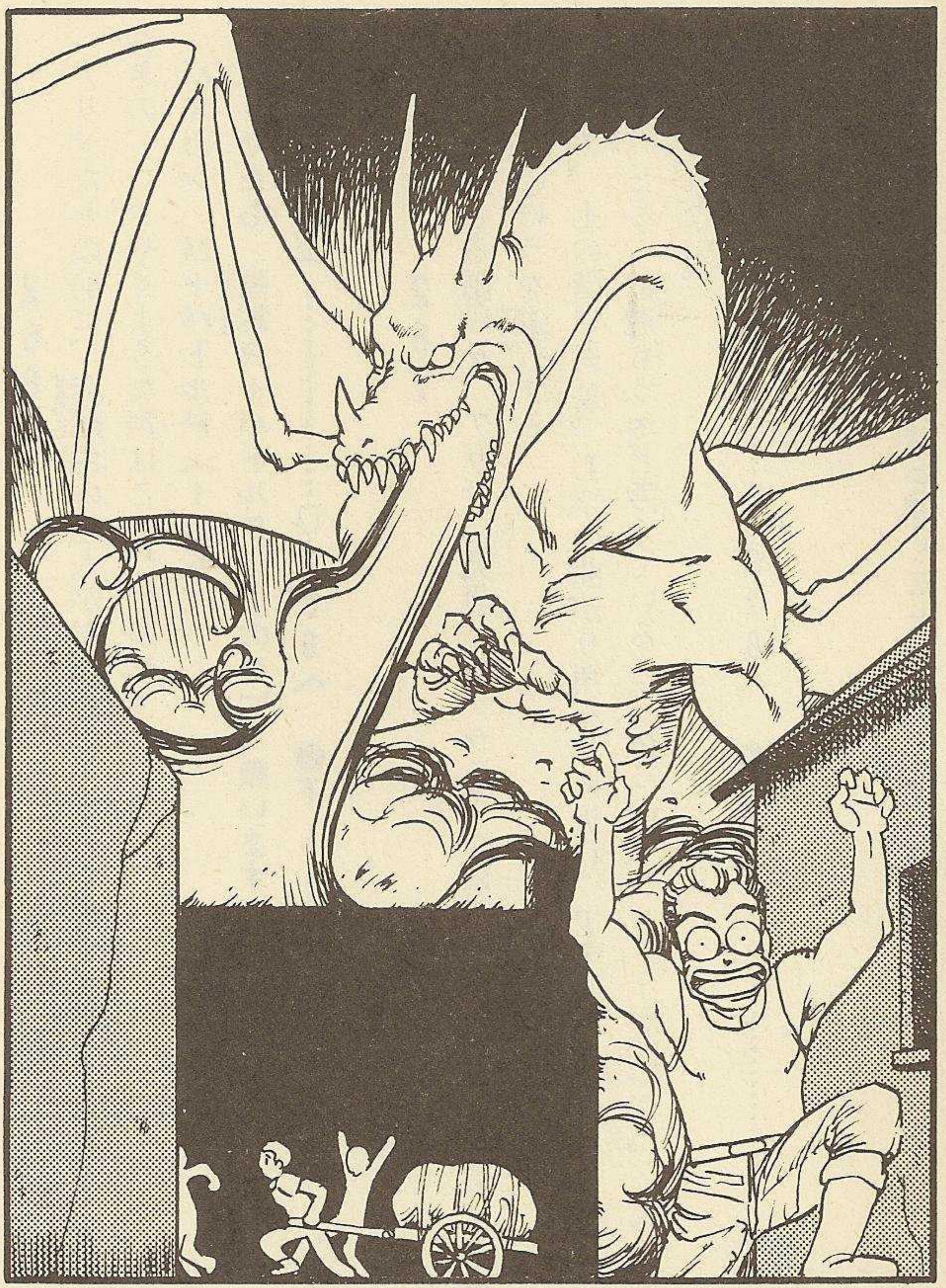
●敵よりPが上……⇨359へ

●下……⇨320へ

砂漠を渡り、アリサたちはカスバの村に到着した。
「ああ。ウーゾで聞いた話では、近くの洞窟の中に怪物がいるそうだな。先にそっちの洞窟に行ってみるか」
「待って――あれは何？」
アリサは、たち登る煙に気づいた。さらに遠くのほうには何本もそれがある。
「どうした？　火事か？」
「と、とんでもない！」煙のほうから駆けてきた村人は、止まらずに叫んだ。
イズが、洞窟から出てきたんだ！　こんなことは10年ぶりだよ！」
「ドラゴンワイズだって！」今度はタイロンが叫んだ。
ドラゴンワイズは、額にカーバンクルアイという宝石をはめこんでいることで有名な竜だ。性格は、竜の種類の中でも特に凶暴。宝石目当てに戦って、返り討ちにあった者は、数多くいるという。
「あれがそうね？」
彼女たちは、燃え上がる家を前にして立ち止まった。炎の中に浮び上がる巨大な姿！　ドラゴンワイズの大きく裂けた口は、逃げまどう村人をせせら笑っているようだった。

●マジックPが6以上……⇩216へ
●5以下……⇩242へ

265



265●10年ぶりに洞窟から姿を現わしたドラゴンワイズ。その大きく裂けた口は、村人をせせら笑っているようだった。

アリサたちの前に、赤鋼色の巨人が現われた。魔力で動く怪物――バルカンだった。つきの、つぶやくような声はこいつの声だったのだ。

バルカン　24＋バトルP（1のA）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のG）で戦います。

●敵よりP上……⇩286へ

266

●下……⇩221へ

ラシークは、上にいるとのことなので、迷わず上りのほうを選択する。

そして、上の階に到着。L字の曲がり角を北に折れ、T字路の所で立ち止まった。

さて、どちらに進もうかと考えていると、後ろのシャッターが閉じた。もう、これで下には降りられない。

●西に進む……⇩328へ

267

上下に通じる階段を、アリサは発見した。

●東に進む……⇩415へ

268

ヘタレドレ！――その言葉を聞くこと、それは死を意味する。こともあろうに、『混沌の

266〜268

使い』は、その最強の超能力をいきなり使ったのだ！

青白い電光が宙に集まり、巨大な球になった。まさにそれがはじけようという時。

「いかん！」

すさまじい音とともに、老人の体が吹っ飛んだ！　肉の焦げる嫌なにおいが広まった。

「タジム様！」

へちぃ！　あと1秒後には、皆殺しにできたものを！〉

ルツは、フードをはらった。青い長髪がざわざわと波打つ。彼のエネルギーをアリサは感じとった。

「このルツ、怪人の振りをしていた！　きさまには容赦せん！」今までにない激しい口調だった。

の顔面を打ち砕いた！　杖の先端が下ろすオノをくぐり抜け、ルツは突進した。

ルツはタジムを振り返った。アリサが抱き起こしている老人はすでに虫の息だった。

「わが、可愛い弟子、ルツよ。……おまえは、予想以上に成長して……くれた。おまえを生かすために、死ぬことを……わしは誇りに思う。そこの箱に……渡すものがある。ラシエック）。

ークとのた……戦いに役立てるがよ……い」タジムは死んだ（Hをチ

（箱に入っていたのはミラクルキーと、超能力者が使うフラードマンストだった。それぞれをアイテムリスト10）に記入。マジックPプラス

ルツは、師匠の形見のフラードマントをはおった。

●Gにチェックがある……⇨215へ

●ない……⇨307へ

269

またしても分岐路に出た。アリサたちはこのT字路を、

●北に進む……⇨240へ

●西に進む……⇨290へ

●南に進む……⇨311へ

270

氷のトンネルを抜け、村に着いた。ここがアウクバルだ。

細長い体に防寒具をまといつけた原住民――デゾリアンたちが、アリサたちを迎えてくれた。思ったより、人なつっこい連中だった。

彼らの話によれば、ラシークはこの近くのコロナの塔に来たことがあるそうだった。

「コロナの塔！　それはどこにあるの？」

「このアウクバルの南、3キロほどの所ですだよ。恐ろしい化け物が、いっぱいいるだ」

「でしょうね……。あれ？　この村は、なんでふたつに仕切ってあるんですか？　向こう側にも人は住んでいるんでしょ」

269〜272

「けっ！　東地区のヤツらはウソつきですだよ。なるべくつき合わないようにしているだ」

●コロナの塔に向かう……⇩335へ

●村の反対側に行く……⇩355へ

271

ドラゴンワイズの攻撃は、予想以上にすごかった。

なんと、燃え上がる家を持ち上げ、投げ飛ばしてきたのだ！　直撃はかわしたものの、飛び散った破片や炎がアリサたちを襲った！（HPマイナス3）

●現在のHPが5以上……⇩298へ

●4以下……⇩229へ

272

アリサたちは、塔のあった場所に行ってみた。雪の中から、それらしい残骸がいくつか飛び出しているだけで、もはや塔など跡形もなかった。

「あれ？　これは」アリサは、雪の上に転がっていた壺を拾いあげた。「ネキセさんからもらった、兄さんの壺にそっくりだわ。たしかにそう」（ラコニアン・ポット入手）

そこから引き上げようとした時。――巨大な影が一行の上に覆いかぶさった。

マンモスだ！　さっきの群れからはぐれていた2頭だった！

●レーザーガンを持っている……⇩351へ

●持っていない……⇩323へ

石畳で造られた通路を進んでいく。やがてT字路に出た。

●東に進む ……⇩256へ

●南に進む ……⇩235へ

273

●西に進む ……⇩212へ

274

セントールは、それぞれ右手に剣、左手にビームガンを持って攻撃してきた。

いきなり、赤いビームがアリサの頬をかすめる。

「接近戦よ！　ヤツらに銃を使わせちゃダメ！」

ミャウが空中から怪騎士どもに襲いかかった。それに注意を奪われているスキに、アリサたちは距離をつめた。激しく剣と剣がぶつかり、火花を散らす。

「やーっ！」

必殺の気合いをこめ、アリサは剣を振るった！　鈍い音がし、セントールの面当てが割れた。血を噴き上げ、怪騎士は倒れた。

振り向けば、もう1体はミャウとタイロンが片づけていた。

セントールをやっつけた一行は、L字の曲がり角を、

●西に進む ……⇩234へ

●南に進む ……⇩380へ

「なんか変。急にめまいが……」（HPマイナス4）
このガスは、ただのガスではなかった。じわじわと体をむしばんでいく毒ガスだった！
●5以下……⇩219へ
●HPが6以上……⇩209へ

276

再び長い階段を下り、アリサたちは下の階にもどった。
いったい、メデューサはどこにいるのか？

277

L字の曲がり角に出た。
●東に進む……⇩218へ
●南に進む……⇩380へ

278

いきなり、ルツが前に踏みこんでいった。
こから火花が散ってルツの服を少し焦がす。
「その程度か」—近寄られたヤツが慌てて手を差し出した。そ

ルツの髪が、ワイトの首にからみついた。
息の根を止めてしまった。
ほかのワイトたちがうろたえ、包囲を崩してしまった。
い。残りのワイトたちをアッという間に片づけてしまった。
一行は、そこからL字の曲がり角を、

●西に進む ……⇩279

飛びかかってきたブルー・スライムを、剣でなぎはらうアリサ。ほかの5匹も、すでにタイロンたちがやっつけていた。
「たかがスライム。こんなもんよ。さあ、行きましょうよ。――きゃっ！」
突然、何かに足をからまれ、アリサは転倒した（HPマイナス1）。
やられたはずのスライムはヒール（体力回復）の超能力が使えるのだ。このブルー・スライムだった。
スライムは足をつたい、アリサにかみついてきた。
「へ、変態スライム！」
彼女は、その怪物を両手で引きはがすと、思いっきり床に叩きつけた！　さらに足でメ

●南に進む ……⇩194

ルツの髪が、ワイトの首にからみついた。
息の根を止めてしまった。
ほかのワイトたちがうろたえ、包囲を崩してしまった。
い。残りのワイトたちをアッという間に片づけてしまった。
一行は、そこからL字の曲がり角を、

●西に進む ……⇩295へ

●南に進む ……⇩194へ

チャクチャに踏みつける。ここまで破壊されれば、スライムも復元は不可能だった。
残りのスライムは、一目散に逃げていった（プラス50メセタ）。

⇨309へ

280

こちらでも、わかったことはほぼ同じだった。ただ……。
「なにい、コロナの塔が北にあるだと！　バカこくでねぇ！　東地区の連中こそ、ウソつきだぁ。ホントの塔は南にあるだよ！」

⇨335へ

●南の塔に向かう　……⇨400へ
●北の塔に向かう　……⇨343へ

281

「せっかくの話だけど、お断りするわ。じゃあ」
「お、おい、娘さん――」
アリサたちは、男を無視して歩いた。どうしても、錆びた剣とか、暴発する銃とかのたぐいだろう。
男を引き離したアリサたちは、

●アーマーショップに行く　……⇨251へ
●スクレを出る　……⇨343へ

279～281

いきなり広間に出た。細かい飾りの入った柱が、何本も天井を支えている。

「さっそくお出ましだな」

柱の陰からガイコツ兵士たちが現われた。

「マッドストーカーどもか。オレたちの相手には、ちと役不足だな」

「大きな口をきくようになったわね、タイロンのぼうや」女の笑い声が響きわたった。

「では、わたしが相手をしましょうか」

広間の奥から、奇怪な怪物が現われた。髪の毛の1本1本が、生きたヘビ。そして、下半身そのものも巨大な大蛇のそれだった。

「ききまぁ、メデューサ!!」

「また、やられに来たのかい、ぼうや。仲間を連れてきたってムダだよ」

「おのれ！」タイロンは、いきなりオノを投げつけた！

●ベルセウスの盾を持ってる ⇩259へ

●持っていない ⇩283

ドアを開け、その先の長い階段を上っていく。

やがて上の階にたどり着いた。地上からはかなりの高さにあるようだった。

282

282～285

通路の先が、さっそく分岐路になっている。

●南に進む……⇩225へ

L字の曲がり角に出た。壁にちりばめられたヘビの彫刻が、今にも飛びかかってきそうなほどリアルだ。

●北に進む……⇩380へ

284

●西に進む……⇩263へ

●西に進む……⇩261へ

●東に進む……⇩269へ

285

塔の中に入った。すると、いきなり――。

〈ふはは、来たか、愚かな人間ども。引き返すのなら今のうちだぞ〉という声がした。

突然、アリサたちの後ろにシャッターが落ちた。

〈おっと、ふはは、では中に入って死ぬがよい！〉

「ふん！　そんなはったりなんか効くもんですか」

意気ごむアリサは、L字路を、

●南に進む……⇩226へ

機械音をあげ、バルカンは口を開いた。肌が焼けるような熱風を吐き出す！

286

アリサたちは、身を投げ出すようにしてそれをかわした。

さらに怪物は、固いこぶしを振り下ろす！　狙いはわずかにそれ、アリサはバルカンの踵を攻撃した！　その効果はアリサの予想以上で、バルカンは、ガクンと膝を落とし、倒れた。口からマグマを血のように噴き出したかと思うと、体がバラバラに砕け散ったのだ！

「ふう、なんて好運なの、一発で弱点をつけるなんて……」

その先が行き止まりだったので、アリサたちはもと来た通路をもどった。⇩**314へ**

287

気になったアリサたちは、アルプラチノ高原に行ってみた。

「あの赤いのがラエルマベリーじゃない。わりとあっさり見つかったものなんだか、さっぱり分からないんだぜ。荷物が増えるだけだ」

「力持ちのタイロンが、持てばいいだけのことでしょ」

「……（何も言えないタイロン）」**ラエルマベリー入手、アイテムリストに記入**）

スクレまでもどったアリサたちは、さっそくルベノ号を離陸させた。目的地は、もちろ

286〜290

んパルマ星だ。

ガイア　38＋バトルP（1のD）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のG）で戦います。
●敵よりPが上……⇒243へ　●下……⇒288へ

288

アリサは思いきって立ち上がった。火炎を浴びつつも、ドラゴンに肉迫！　ついに1匹のノドを剣で突いた。

「ただじゃ、死なないわ……タイロン、ルツ……ミャウ、あとを頼んだ……わ」

重傷を負ったアリサは、仲間に見守られながら、兄のあとを追った。

END（MPが5以上の人のみ、416へ）

289

先は階段になっていた。アリサたちはそれを上り、上の階にたどり着いた。

とたんに、後ろのシャッターが閉じた。

290

⇒362へ

「脅しのつもりか？　ふん、どうあろうとこっちは先に進むだけさ」

●**西に進む**……⇩**310へ**

291

下から、怪物どもが上がってきた。ゴーレム、キングセイバー、フロストドラゴン、デスベアラー、マッドストーカーといった強敵の群れ……。

これら全部を相手に、勝てるわけがない。

「だからといって、どこに逃げればいいのよ！」

それもそのとおり。アリサたちは、縁に追いつめられ、そこから叩き落とされた！

END

292

L字の曲がり角に出た。

●**東に進む**……⇩**225へ**　●**北に進む**……⇩**263へ**

293

念のため、ミヤウが超能力（ラピット）で宝箱の中を探った（**マジックPマイナス2**）。

291〜296

〈やっぱり爆弾がしかけられていたよ。今、外した〉

中に入っていたのは体力増強用のルオギニンだった。こういう所では、お金よりもこちらのほうがありがたい（HPプラス4）。

アリサたちは、もと来た通路をもどった。

⇩26へ

294

T字路に出たアリサたち。どちらへ進むか？

●南に進む……⇩318へ

●西に進む……⇩194へ

●北に進む……⇩194へ

L字の曲がり角に出た。曲がるか、引き返すか……。

●東に進む……⇩213へ

●南に進む……⇩264へ

295

一行の前に黒い影が、立ちふさがった。

「また怪物か！」タイロンがオノをかざした。それをルツが制する。

296

⇩228へ

「ルツよ、おもしろい連中と一緒におるのうです、タジム様。――怪物の死体を入口で見ましたが」――影が、小柄な老人の姿に実体化した。

「ここに来たのは、今のところ、ザコばかりよ。それよりルツよ、ラシーク退治の旅に出ているそうじゃが、どのくらいの力がついたか試してやる。かかってきなさい」

「ちょっと待って！　先生と弟子で戦おうというの！」アリサがふたりの間に入った。

「お嬢さん、そのとおりだ。――師匠、ぎっくり腰になっても知りませんよ」

「アリサさんといたら損じゃよ」

「口だけは達者になったな、ルツ」

「さあ、どうでしょうか」

ルツは杖を振り下ろした！　先端がタジムの頭をかすめ、後ろの壁に穴を開けた！

「ほう、やるようになったな」タジムが、ニヤリとしてその場を離れた。

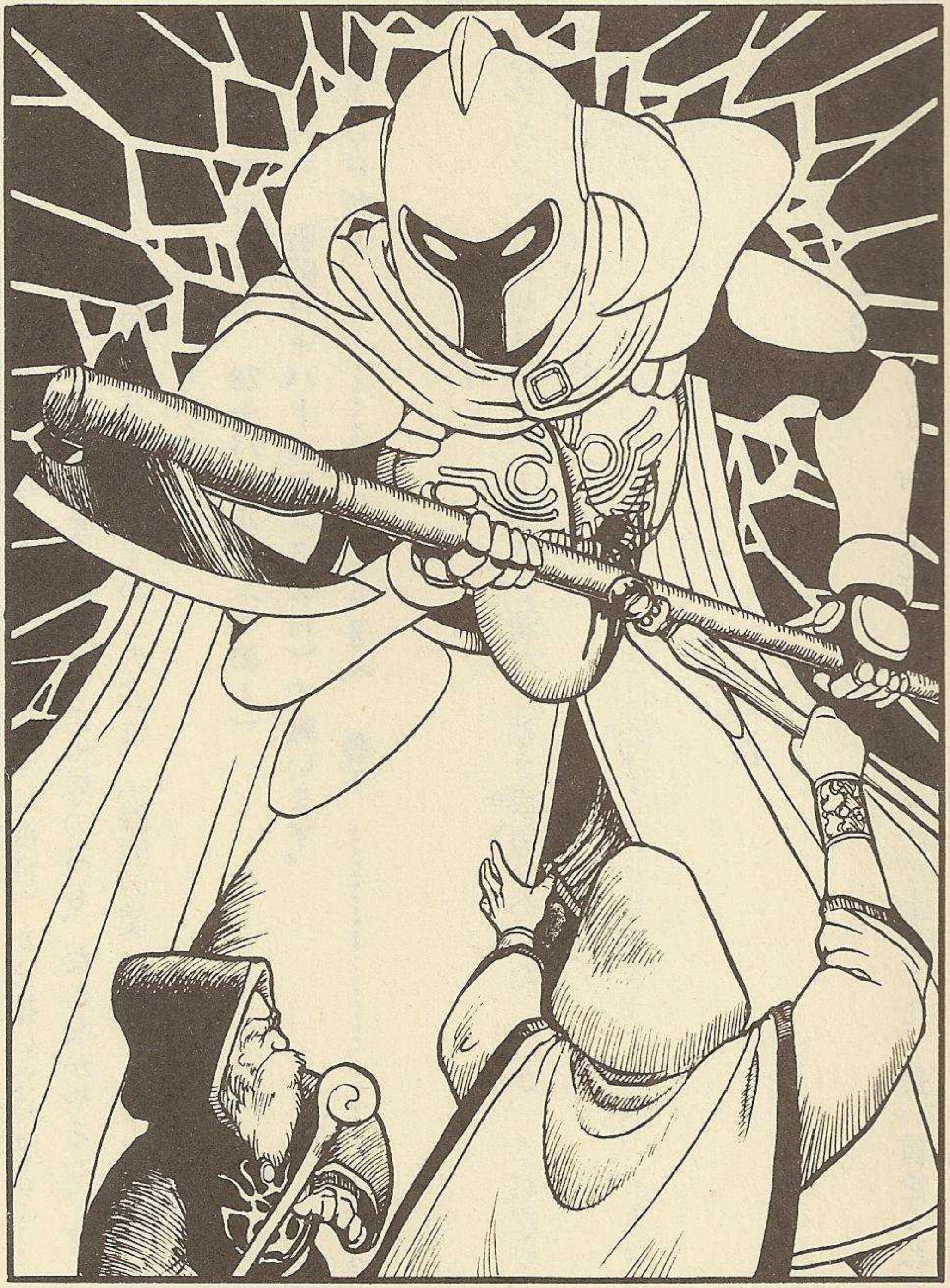
アリサとタイロンは、ハッとした。――なんということだろう。ルツが開けた穴から、血が流れ始めたのだ！

「どういうことと!?」

次の瞬間、壁をすり抜けるように、青いヨロイの怪人が現われた。右の胸の血は、そいつの胸のあたりから流れていた。

ルツとタジムは、最初からこの怪人のいることに気づいていたのだ。

296



296●ルツとタジムの師弟対決の途中、ダークマローダーが姿を現わした。『混沌』からの使い、邪教の魔道士だ！

「こやつ、今までのザコとは違うな。ラシークが『混沌』から招いた怪物か……」

へふふふ……〉怪人は、不気味に笑った。へこの世界の者も、なかなかやるな。ラシークが、わしを呼んだのも無理はない。――わしの名は、『混沌の使い』ダークマローダー！　今受けたこの傷、千倍にしてやる！〉

ダークマローダー　28＋バトルP（1のI）

ルツたち　戦闘P＋バトルP（2のH）で戦います。

●敵よりPが上　……⇩268へ　●下　……⇩241へ

297

いくらマンモスとはいえ、1頭や2頭なら戦う自信はあった。だが、これだけの大群を前に、剣や銃など何の役にたとう。

圧倒的なパワーの差だった。アリサたちは逃げることもできず、雪崩のようなマンモスどもの下じきになってしまった！

298

ドラゴンワイズは、うなり声をあげると、宙に浮かび上がった。長い首をくねらせ、ア

END

297〜298

リサに飛びかかった！　ふいを突かれ、ほかの者は手をだせない！
（兄さん、あたしに力を）。その瞬間、アリサの小柄な体は宙に舞っ
ドラゴンワイズは、そのまま飛び続け、石造りの巨大な壁に激突した。
と崩れ落ち、竜の体に降りそそぐ。
と、石材をはねとばし、ドラゴンワイズが首を伸ばした。そのノドには、アリサの剣が
突き刺さっていた！　竜は、最後の炎を天に向かって噴き出し、息絶えた。
「やったぞ、アリサ！　オレでさえ、こんな大物をやったことはない」と、タイロン。
「はぁ……」
竜の額から宝石を抜き取ると、アリサは、ぺたんとしりもちをついた。急に緊張から解
放されて、力が抜けたようだ（**カーバンクルアイ入手、マジックPプラス2、プラス20**
0メセタ）。
「す、すごい！　本当にドラゴンワイズを退治しちまった！　しかも、こんな女の子が！」
恐怖に震えていた村人が集まってきた。
その村人たちから、アリサは、ソピアという村が近くにあることを聞いた。ガスに包ま
れているため、やめたに人の出入りはないということだが（**Gをチェック**）。
「なんか、あやしいわね。ラシーク本人がいるかも……」

●**ない**……⇩**260へ**

●**Hにチェックがある**……⇩**249へ**

扉を開けたとたん、冷気がアリサたちにまとわりついた。
空気中の水蒸気が凍りつき、キラキラと光っていた。ダイヤモンド・ダストという現象だ。その美しい光景の中に、氷の巨人が4体立っていた。
「ここまで来たか、反逆者ども」
「ラシーク様はどこ!?」
「ここにはいない。ラシーク様はパルマ星、バヤマーレの丘のずっと上におられるのだ」
「そ、そんな所に？」
バヤマーレの丘といえば、アリサの出発点のすぐ近くではないか。そこをチェックしなかったとは、うかつだった。
「でも、そんな大事なことを教えていいのか？」
「別にかまわない。おまえたちは、我らアイスマンの手にかかって死ぬのだから！」
●超能力(ちょうのうりょく)で攻撃（マジックPが8以上のみ）……⇨321へ
●普通(ふつう)に攻撃……⇨347へ

村長は頭を下げ、金を受け取った（マイナス200メセタ）。

300

それから、
「中に入って
「おお！　ペ
使っていたと
いこなせるの
アリサたち
を止めてある
●パルマ星に
●デゾリス星に飛ぶ……⇩207へ

「中に入っている盾は、『ペルセウスの盾』と
「おお！　ペルセウスの使っていたという盾か
使っていたという」タイロンが、興奮した様子で盾を持ち上げた。
いこなせるのは、彼しかいないだろう（ペルセウスの盾を入手、戦闘Pプラス3）。
アリサたちは、村長から教えられた地下道を通り、無事にガス帯の外に出た。ルベノ号
を止めてあるパルマウーゾの村に帰る。その先は？

●デゾリス星に飛ぶ……⇩405へ

「死ね！」メデューサの手のひらから、鋭いビームがほとんどばしった
それは、タイロンの頭をかすめ、切り結んでいたマッドストーカーに当たった。頭蓋骨
が、粉みじんになって消える。
「死ぬのはそっちだ！」
タイロンは、ジャマをするガイコツ兵士をなぎ倒し、跳んだ！
勇者はそれを盾で受け、オノを振り下ろした！

301

「死ね！」メデューサの手のひらから、鋭いビームがほとんどばしった
それは、タイロンの頭をかすめ、切り結んでいたマッドストーカーに当たった。頭蓋骨
が、粉みじんになって消える。
「死ぬのはそっちだ！」
タイロンは、ジャマをするガイコツ兵士をなぎ倒し、跳んだ！
勇者はそれを盾で受け、オノを振り下ろした！

豪快に舞う巨体！

ズバァ――――ッ！

ズズズ……。ヘビ女、メデューサの顔が、ゆっくりと左右に倒れていった。

その一撃は、怪物の体を真っ二つに引き裂いていたのだ。

「やったね、タイロン！」残りの敵を片づけたアリサたちが、駆け寄ってきた。真っ先にミャウが肩の上に飛び乗る。

勇者の口元に、会心の笑みがあった。因縁の対決に今、完全決着をつけたのだ……。

タイロンは、メデューサの玉座にかけてあったオノを手にした。それこそ、彼が探し求めていた伝説のオノ――ラコニアン・アクスであった。

（ラコニアン・アクスをアイテムリストに記入し、戦闘Pプラス5。プラス300メセタ）

「パルマもモタビアも、怪しい所は回ったし……。これで、まだ行っていないのはデゾリス星だけね」

⇩405へ

302

アリサは、ガイアの胸を狙って剣を突き出した。だが、厚い体毛と皮膚のため、大したダメージはない。

ガイアは、驚く彼女を丸太のような腕で抱き上げた。

「離してよ、けだもの！　あ、ホントにけだものか……。痛い、ほ、骨が折れる……。口

302〜303

から内臓が飛び出したら、あんたも掃除が大変よ、う……」（HPマイナス3）

「アリサ！」タイロンたちが後ろから攻撃したが、怪物は平然としていた。

もうろうとしたアリサの頭に、名案が浮かんだ。

「うわわわわわわわわわわわわわわわわぁあああああ!!!」

胸いっぱいに空気を吸いこみ、ガイアの耳元で怒鳴った！

さすがに怪物は驚き、アリサを放り出す。

アの急所を攻撃した。ノドと心臓をやられた怪物はついに死んだ。

「えいえい」と、アリサが怪物を蹴とばし、うっぷんを晴らしたのは言うまでもない。

先が行き止まりだったので、アリサたちはもと来た通路をもどった。

⇩303

「やーねえ、行き止まりよ。――でも、変ね」

「壁なんかじゃない！　あれは怪物の毛だ！」

アリサたちの前に立ちふさがっていたのは、巨獣マンモスだった！

マンモス　45

アリサたち　バトルP（1のC）＋バトルP（2のF）

戦闘P＋バトルP（2のF）で戦います。

●敵よりPが上……⇩331へ

●下……⇩354へ

304

氷のトンネルを抜け、村に着いた。
細長い体に防寒具をまといつけた原住民――デゾリアンたちが、ここがアウクバルだ。
れた。思ったより友好的だった。
彼らの話によれば、ラシークはこの星のコロナの塔に来たことがあるそうだった。
「コロナの塔！　それはどこにあるのですか？」
「このアウクバルの北、5キロほどの所ですだよ。恐ろしい化け物が、いっぱいいるだ」
「でしょうね……。あれ？　この村は、なんでふたつに仕切ってあるんですか？　向こう側にも人は住んでいるんでしょ」
「けっ！　西地区のヤツらはウソつきですだよ。なるべく付き合わないようにしているだ」
「ふーん」
●コロナの塔に向かう　……⇩400へ
（ーをチェック）

305

またもやラシークの杖から飛んだ電光が、アリサたちを打ちのめした！
「ここまでやってきたことに免じ、なぶり殺しだけはやめておこう。ひと思いに殺してやる！」

●村の反対側に行く　……⇩280へ

304〜306

次の電光は、強烈だった。一瞬のうちにアリサたちの心臓が停止したのだから……。

E N D

306

「みんな、さがって！」ルツが一行の先頭に出た。

「どうする気だ、旦那。まさか死ぬ気じゃ」

「そんなつもりはありませんよ、タイロンさん。最大の攻撃魔術を使うだけです」

ルツは、『タンドレ』の呪文をとなえた！　それも二度三度と。

彼の体が青く光り、そこから何本もの稲妻が飛んだ！　光の矢が、マンモスの大群に降りそそぐ！（マジックPマイナス6）

「――む。ここは……？」

直撃を受けた巨獣は燃え上がり、まわりのものはパニック状態におちいった。群れは、傷ついた仲間さえ踏み潰し、逆方向に走っていった。

「動かないで、ルツさん。ほんの1分くらい、気を失っていたんですよ。だいじょうぶ、マンモスたちは、逃げていきましたから。それにしてもすごいわ、アルゴル一の怪物どもをたったひとりで追い返すなんて」

「そのかわり、塔も倒れてしまったけどな。マンモスどもの暴走で……」

「タイロン！　そんなことなんか、いいじゃない！」
アリサの剣幕に驚き、ミャウが主人の肩から飛び降りた。
●ーにチェックがある……⇩374へ　●ない……⇩272へ

307

悲しみの洞窟を出たアリサたち。これから先は？
●カスバの村に行く……⇩265へ　●パルマ星に飛ぶ……⇩408へ
●デゾリス星に飛ぶ……⇩405へ

308

フタを開けたとたん、宝箱から針が飛び出した！　手を押さえ、マイナス1）。
不幸中の幸いで、中にあるルオギニンは無事だった（それを飲んでHPプラス4）。
一行はもと来た通路をもどり、さらに西のほうへ。
⇩402へ

309

トンネルを抜けると、スクレの街だった。外に比べると、別世界のように暖かい所だ。

307〜310

（街の病院に行くことが可能。20メセタ払うと、HPプラス5）。

アリサたちは、近くのレストランで、この星についての情報を集めた。最近、見たことも無かった怪物が現われ、街の人間にも被害が出ているという。ひどい時には、街の玄関でもあるトンネルの中にも入ってくるそうだ。

「だから、デゾリアンたちの村がいくつかありますよ。他に人の住んでいる所はないんですか？」

「原住民、……。他に人の住んでいる所はないんですか？」

かねぇ。いくつか地下通路を通れば、たどり着きますよ。もっとも、アウクバルですけどね」と、レストランの給仕が教えてくれた。

「ラシークが、最近この星に寄ったということは？」

給士は、黙って首を振った。そして、腫れ物に触るような手つきで、皿を片づけた。

「しかたないな。やはり、オレたちの手で化け物退治を続けるとするか」

「待って、タイロン、その前に――」

●アーマーショップに行く……⇩251

●さらに人に聞く……⇩230へ

310

空中に4つの奇怪な影が浮かび上がった。脚のないサソリを直立させたような怪物――

エクゼキュートだ！

エクゼキュート4匹　39＋バトルP（1のA）
アリサたち
●敵よりPが上　戦闘P＋バトルP（2のD）
……⇩341へ

先のT字路で、ひょろ長い怪人たちが一行を待ちかまえていた。
「デゾリアンみたい」アリサは、この星の原住民の名を口にした。
「違ぁーう。我々は、デゾリアンなどよりもっとエライ、デゾリアンヘッドなのだぁー。ラシーク様に逆らっているという、おまえらを退治してやるう。そうすれば、我々はもっともっとエライ存在になれるのだぁー！」

311

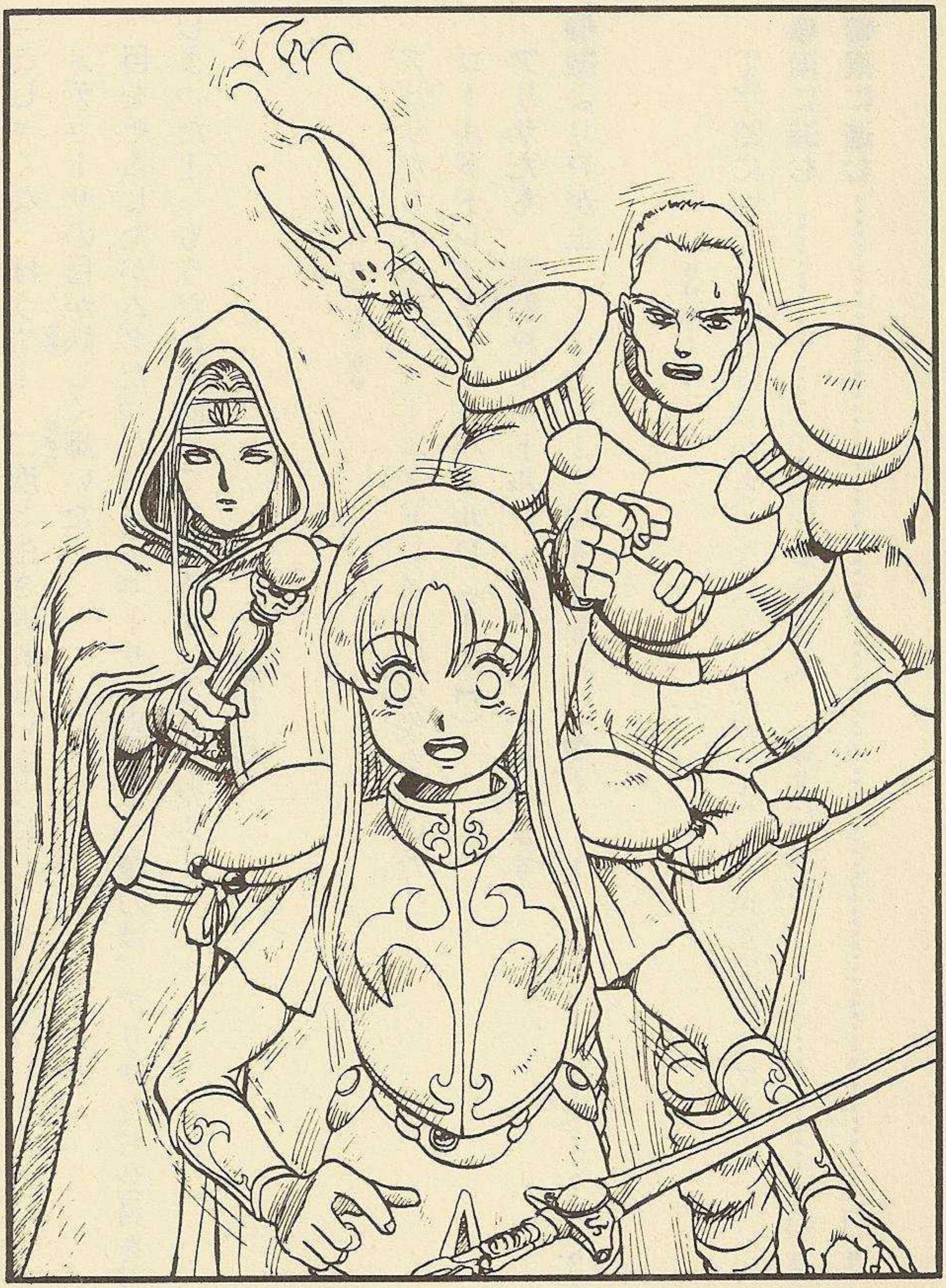
デゾリアンヘッドたち　41＋バトルP（1のH）
アリサたち
●敵よりP上　戦闘P＋バトルP（2のB）で戦います。
……⇩340へ

312

オノは、メデューサの髪（ヘビ！）をかすめ、床でのたうちまわった。
壁に深々と突き刺さった。ちぎれたヘビ

●下……⇩365へ
●下……⇩389へ

311～312



312●メデューサの魔力(まりょく)の前に、アリサたちは石になってしまった！　もう反撃(はんげき)はできない。アリサの冒険(ぼうけん)は終わった……。

「こしゃくな、ぼうや！　二度と生き返れないようにしてやるよ」

メデューサの目が妖(あや)しく輝(かがや)いた。

目をそらしたがムダだった。メデューサの恐(おそ)ろしい魔力(まりょく)は、アリサたち全員を石にしてしまった！　もうだれも助けてくれる者はなかった……。

ＥＮＤ

アリサたちめがけ、ゴールドドレイクは火炎(かえん)を吐(は)いた！

ゴールドドレイク　47＋バトルＰ（1のＨ）

アリサたち　戦闘(せんとう)Ｐ＋バトルＰ（2のＣ）で戦います。

●敵よりＰが上……⇩404へ

313

●下……⇩388へ

●北に進む……⇩277へ

●南に進む……⇩244へ

●東に進む……⇩266へ

314

T字路に出た。南のほうから、なにかつぶやくような声が聞こえてくる。

助けてくれた礼を言うと、デゾリアンはさっさと外に出ていった。

315

「なんだった、今の？」

「それはともかく、彼は情報を残してくれましたよ」と、ルツ。彼はテレパシーで、デゾリアンの頭の中をしっかりとのぞいていたのだ（**マジックPマイナス2**）。

「彼の言ってたラエルマベリーというのは、アルプラチノ高原特産の果実のことです。もちろん普通の食料にもなりますが、ジャコウネコという生物が食べると、特殊な現象が起こるということです」

「ジャコウネコ？　それに特殊な現象って？」

「そこまでは読み取れませんでしたが……」

⇩287へ

316

「いいわよ」

本当にいいのか、という顔をするタイロンたちに、アリサはウインクした。

当の男も、あっさりOKされるとは思っていなかったようだ。顔のキズあとを指でひっかき、言葉につまったようだった。

「――そ、そいつだ」男は大きなカバンを開けた。武器っていうのは、こいつだ」男は大きなカバンを開けた。

「対マンモス用のミサイル・ランチャー。街の代物だ。弾頭は、もう製造中止で1発しかないけど、威力はバツグンだぜ。マンモスやドラゴンといった大物だって、一撃でやっつけることができる」

「でも、1発しか撃てないんじゃなあ」

「外さなきゃいいのよ。タイロンには、その自信がないっていうの？」

「そ、そんなことはない！」

「なら決まりね」アリサは、にこりと笑った。

男と別れたアリサたちは、

●アーマーショップに行く……⇩251へ

（アイテムリストからカーバンクルアイを消し、ミサイル・ランチャーを記入する）。

●スクレを出る……⇩343へ

アリサが手を触れたとたん、宝箱はボンッ！　と破裂した。

破片が飛び散り、一行を傷つけた！（**戦闘**）。

「なんてワナなの！　味方がひっかかったらどうする気!?」アリサが叫んだ。

アリサたちは、L字路を、

●南に進む……⇩412へ

●東に進む……⇩402へ

317～320

通路の先は行き止まりになっていた。壁の一部がくぼんで、そこに宝箱が収まっている。

「何が入っているのかしら？」

●マジックPが3以上……⇨339へ

デスベアラーが攻撃呪文をとなえようとしている？

●マジックPが7以上……⇨366へ

319

●2以下……⇨361へ

●6以下……⇨337へ

320

先頭のヤツの頭骸骨を叩き落とした。

「一丁あがり！――え？　きゃっ！」頭を失ったマッドストーカーは倒れず、アリサの腕を切りつけた！（HPマイナス1）

「こいつら、不死身じゃないでしょうね!?」

その時、アリサの剣が偶然、相手のあばらの部分に入った。人間なら、ちょうど心臓のある場所だ。――とたんにマッドストーカーはバラバラに崩れ落ちた。

「そうか！　そこが弱点か！」

最強とはいえ、たかがガイコツ。弱点がわかれば大した敵ではなかった。アリサたちは、アッという間にマッドストーカーを全滅させてしまった。

その後、曲がり角をどうするか？

●東に進む ……⇩294へ

●北に進む ……⇩228へ

321

アイスマンが、より冷たい息を吹きかけてきた。――だが、アリサたちには届かなかった。ルツがムワーラで見えない壁を作り、はね返したからだ。

「お返しだ！」

今度は、ふたりの手から放たれた火球は、巨人たちの体にえぐりこんでいった。

ようになったのだ（**マジックPマイナス6**）。

だが、さすがにこのコロナの塔を任されただけはある。それだけでは、倒れなかった。

アイスマン4体　42＋バトルP（1のJ）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のG）で戦います。

●敵よりPが上 ……⇩375へ

●下 ……⇩393へ

321〜323

あの杖だ！　あの杖を奪ってしまえば、ラシークは攻撃手段を失う。タイロンたちが正面から戦っているうちに、アリサはそっと後ろに回りこんだ。スキを見て、手を伸す。

――その瞬間アリサの体ははじき飛ばされた！（**戦闘Pマイナス1**）

「バカめ。この杖は、『混沌』に祝福された者でなければ、触ることも許されないのだ」

「くっ！　はけっこうよ、そんなものに祝福されなくても」腫れた手をかばい、アリサは起き上がった。

322

アリサたちは、つねにマンモスの後ろに回りこんで戦った。まともに力比べして、勝てる敵ではない、長い鼻と牙から身を守る必要があったからだ。

何度も何度も攻撃をくりかえし、ようやく2頭ともやっつけた時には、アリサも倒れそうなくらい疲れていた（**戦闘Pプラス1、HPマイナス2**）。

323

一行はアウクバル周辺にもどり、ぐるぐる回っているうちにもうひとつの塔を発見した。

「これがコロナの塔かも。だって、村の半分はウソつきだって言っていたでしょ」アリサは、自分に言い聞かせるように言った。

⇩224へ
⇩285へ

ゴールドレイクを撃破したアリサたちは、エア・キャッスルに降りデゾリスの星で、アイスマンが言った『丘のずっと上』というのは、ったのだ。

空飛ぶ巨大な岩盤の上に建てられた白亜の城。その美しさに加え、ソに思えるほどの静けさ。

城の中を歩くアリサは疑問を抱いた。

「ここにラシークがいるのかしら……」

「もちろんだ。わしはここにおる」城の大広間にひとりの男が立ってた。

「ようこそ、ラシークだ」男は静かな口調で言った。

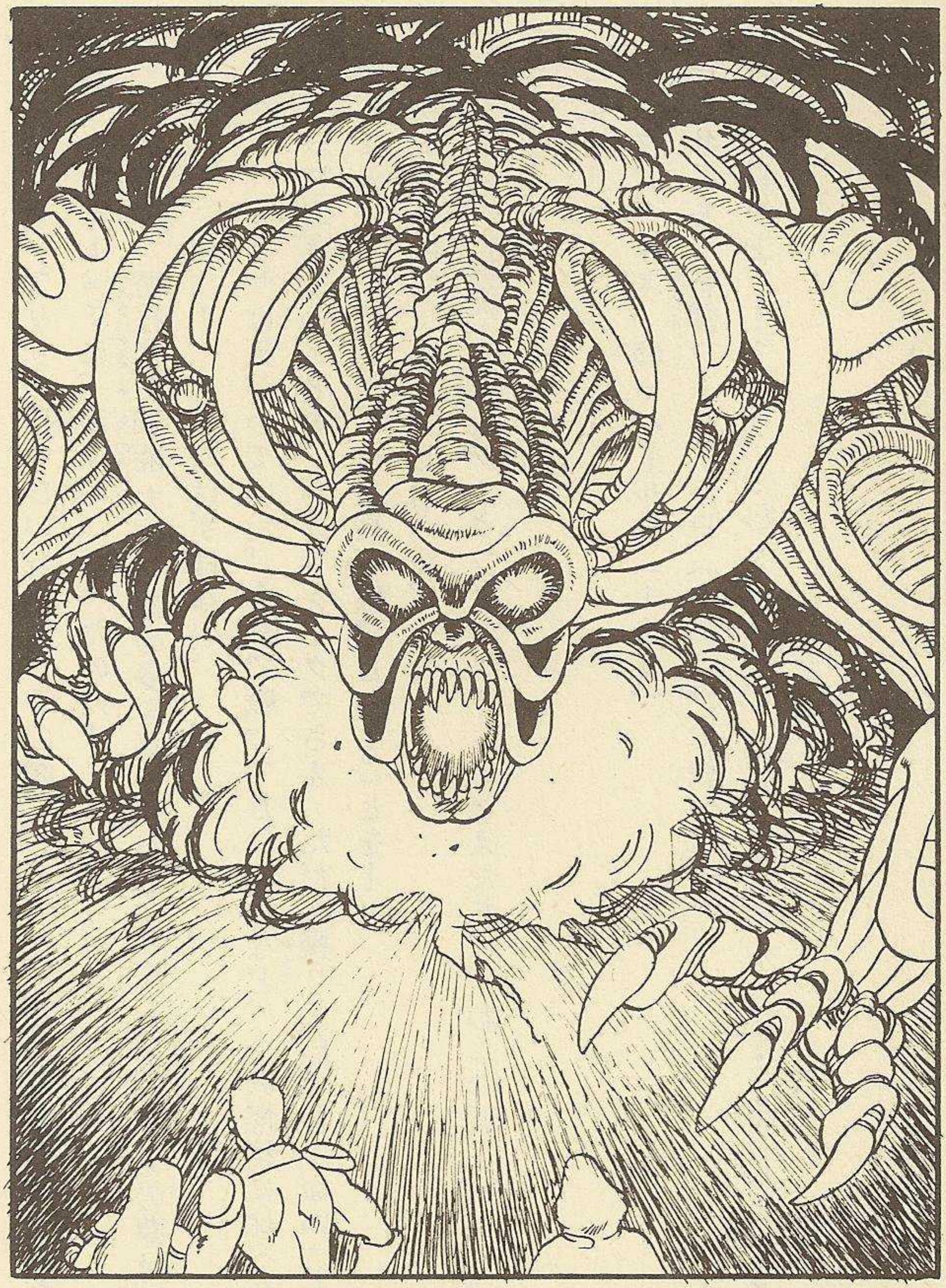
⇩325へ

ハッチの中から、黒い霧のようなものが流れ出てきた。一瞬、渦を巻いたかと思うと、それは怪物の姿に実体化した！

発達した筋肉と機械を融合させたようなメタリック・ブルーの巨体。下半身は、まだ黒い霧の中にあって見えない。

⇩395へ

324～325



325●霧の中から、メタリック・ブルーの巨大な怪物が現われた。
今まで戦った敵など、こいつに比べればザコだ！

なによりも、アリサの目をひいたのは、その顔だった。モタビア総督の家で見た悪夢の怪物――ナイトメアに、瓜ふたつだったのだ！

アリサの持つ潜在的予知能力が、あの夢を見させたのか？　ならば、あの夢は正夢？

――いや、違う！　そんなはずはない。

しかし、アリサは気づいていた。今まで戦ってきた相手など、この怪物に比べれば、単なるザコに過ぎないことを。あのラシークでさえ、ただの操り人形でしかないことを。そして、この怪物こそが倒すべき真の敵だということを！

怪物の赤い目が、ピクリと動いた。

〈わが名は、『混沌の魔王』ダークファルス！　おまえたちは、わしの新しいしもべとなってもらう〉

「なにを！」

ダークファルス　55＋バトルP（1のA）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のJ）で戦います。

●敵よりPが上……⇩392へ

●下……⇩372へ

326〜328

行き止まりの所に、赤いロボットが待ちかまえていた。戦闘用にチューンアップされたマシンガーダー　43＋バトルP（1のG）

マシンガーダーだ！

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のA）で戦います。

●敵よりPが上……⇩350へ

●下……⇩390へ

326

ちょうど突き当たりの所で、アリサは宝箱を見つけた。

●マジックPが3以上……⇩293へ

●2以下……⇩345へ

327

突っ込んだ所にゴーレムが立っていた。

全身を茶色の毛に覆われた、筋肉の化け物。強いタロス系モンスターの中でも、最強の敵だ！

ゴーレム　46＋バトルP（1のJ）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のD）で戦います。

328

●敵よりPが上……⇩394へ

329

アリサは、まだ慎重だった。
離れた所から、さらにフレエリ――火球をダークファルスに叩きつける！
怪物がのけぞっているうちに、すばやく自分の剣を拾う。
勝負はまだわからない。このダークファルスという怪物、まだまだ底力を見せていない。
いや、敵の攻撃を待っているようではだめだ。こちらから攻めなくては！
「アリサ、オレたちがついていることを忘れるなよ」と、タイロン。
（そうよ、みんながいるんだわ！）
ダークファルス　58＋バトルP（1のG）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のD）で戦います。
●敵よりPが上……⇩420へ

330

中に入っていたのは、体力増強用のルオギニンだった。こういうところでは、お金より
もこちらのほうが役に立つ（HPプラス4）。
●下……⇩379へ

329〜332

アリサたちは、もと来た通路をもどり、さらに西のほうへ。

331

勝負を長びかせれば、勝ち目はない。
マンモスの牙をかわし、アリサはジャンプ。巨獣の額に、剣を突き立てた！
「みんな、よけて！」
額から血しぶきをあげ、マンモスは走り出した。必死で身をかわすタイロンたち。
モスは、奥の壁をぶち抜き、頭をそこにめりこませて停止した。
「ふう、ブレーキの壊れた重戦車ってとこね」（マジックPプラス1）
●L字路を東に進む……⇩373へ　●北に進む……⇩26へ

332

「死ぬのはあぁあ、おまえだあぁあ！」
ラシークの姿が、一瞬ぶれたかと思うと、突然アリサたちの後ろに現われた。そして、
胴体からミサイルを発射した！　轟音とともに、床が吹っ飛ぶ。直撃ではなかったものの、
かなりのダメージだ（HPマイナス2）。
「く、部屋の中でミサイルを使うなんて、気違いじみてるわ！」

⇩402へ

「ふふふ！　わしの体には高速移動が可能な加速装置と、ミサイル・ランチャーが内蔵されておるのだぁ！　きさまらごときに勝ち目はないわぁ！」

●レーザーガンを持っている ⇩236へ

●持っていない……⇩364へ

333

「ラエルマベリー？　そういえば聞いたことがあるわ」

アリサは、モタビア総督の屋敷でロボットが言っていたことを思いだした。

そのことについて、いろいろデゾリアンに聞いてみた。

その結果わかったのは、ラエルマベリーは、アルプラチノ高原特産の果実ということだった。普通の食料にもなるが、ジャコウネコという生物が食べると、特殊な現象が起こるという。

「ジャコウネコ？　特殊な現象？　どうしてそれが御禁制の品になってしまうの？」

その時には、デゾリアンはとっくに外に出ていった。謎だらけのアリサたちを残して。

⇩287へ

334

ミャウ、タイロン、ルツがたちどころに火だるまとなった。

アリサは、満身の力をこめて切りかかったが、フロストドラゴンの攻撃が終わった跡には、骨さえ残っていなかった。炎の圧力に押しもどされてしまった。かなる魔術でも復活は不可能！

アリサの冒険は終わった。

335

END

アイスデッカーをアウクバルに置き、アリサたちは歩いて塔に向かった。氷原のあちこちに深いクレバス（割れ目）があるというので、そうしたのだ。一行が谷間の底に着いたころ、ちょうど吹雪も止んできた。

「ねえ、見えるでしょ。谷の向こう側に塔が建っているの。きっと、あれがそうよ」

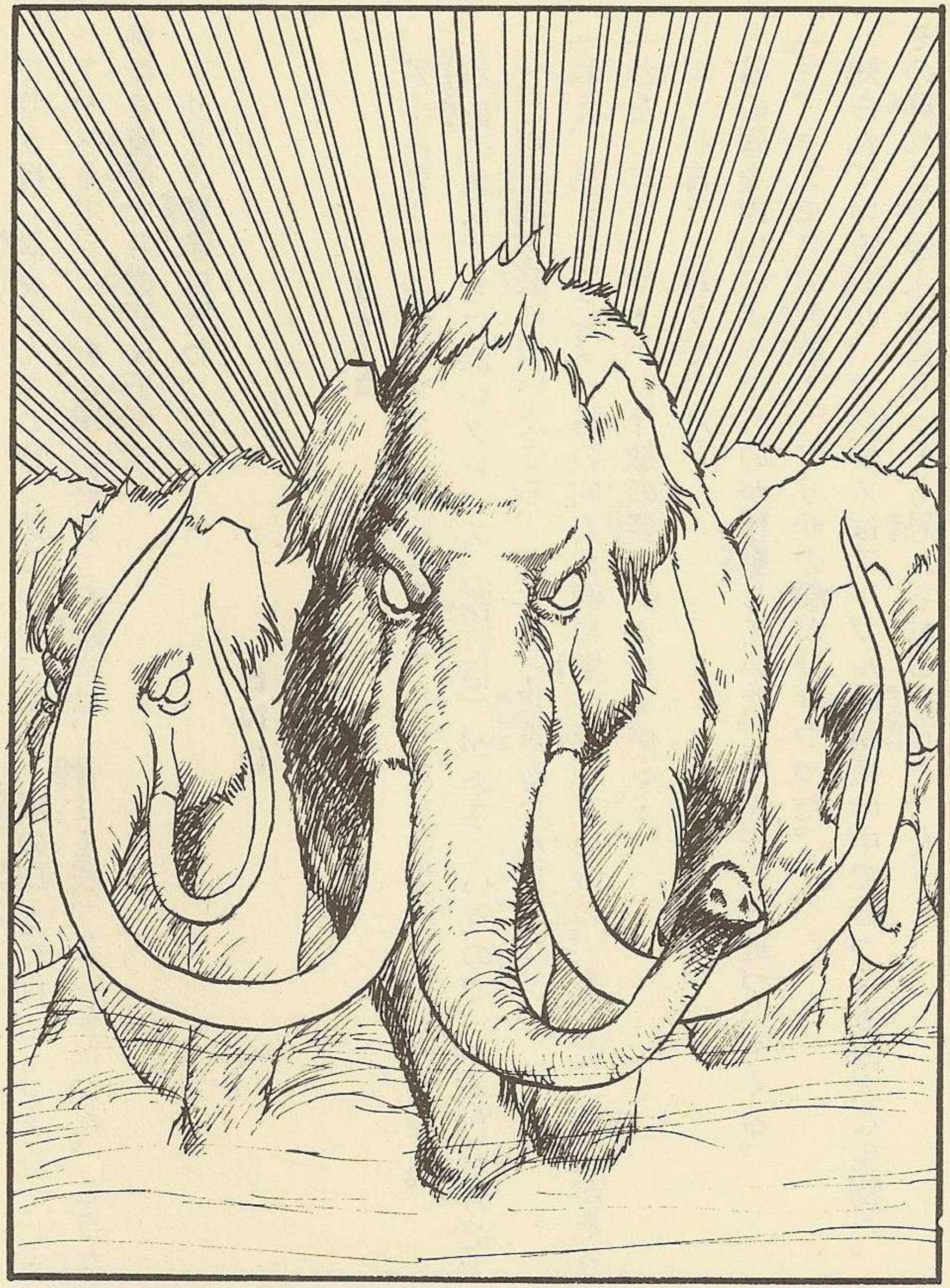
「わたしには、やっかいな敵の姿も見えますが……」

ルツが言うとおりだった。

谷の底を黒山のようなものが移動していた。だんだんと近づいてくる。

「マ、マンモスの大群！」アリサの顔がひきつった。

知られている限り、マンモスはアルゴル太陽系の中でもっとも巨大な生物だ。そして、その群れこそが人々にもっとも恐れられる存在だった！



335●マンモスの大群(たいぐん)が現われた！　アルゴル太陽系の中で、もっとも恐(おそ)れられている存在(そんざい)だ。切り抜(ぬ)けられるか!?

336〜337

●ミサイル・ランチャーを使う（ある人のみ）……⇩363へ
●超能力を使う（マジックPが8以上のみ）……⇩306へ
●どちらもない……⇩297へ

336

中に入っていたのは、体力増強用のルオギニン飲んで、HPプラス4）。
が設置しているのだろう。
逆にこれを利用しない手はない（ルオギニン
アリサたちは、L字路を、
●南に進む……⇩412へ　●東に進む……⇩402へ

337

〈タンドレ！〉
恐るべきデスベアラーは、いきなり必殺の魔術を使った！
〈ふふふふ。戦いというのは、どんな方法であろうと勝てば良いのだ。勝てばな……〉
が、アリサたちを直撃！　あわれ、黒こげになり、床に転がった。
END

ラシークは、杖を高く差し上げた。

338

「ヒール！」アリサは無意識のうちに、その体力回復の超能力を使った（HPプラス3）。

急に立ち上がったアリサたちを見て、ラシークは手を止めた。

⇩360へ

339

〈待った！〉ミャウが、宝箱を開けようとしたアリサを止めた。

〈爆弾が仕掛けられているよ〉ミャウは、ラブットという超能力で箱のワナを見抜き、それを解除した（**マジックPマイナス2**）。

「ふー、危ない危ない。助かったわ、ミャウ」

宝箱に入っていたのは、ルオギニンという体力増強の薬だった（**これを飲んで、HPプラス4**）。アリサたちは、もと来た通路にもどった。

⇩294へ

340

デゾリアンヘッドたちは、ビームガンを撃ってきた。狭い場所での銃撃戦！

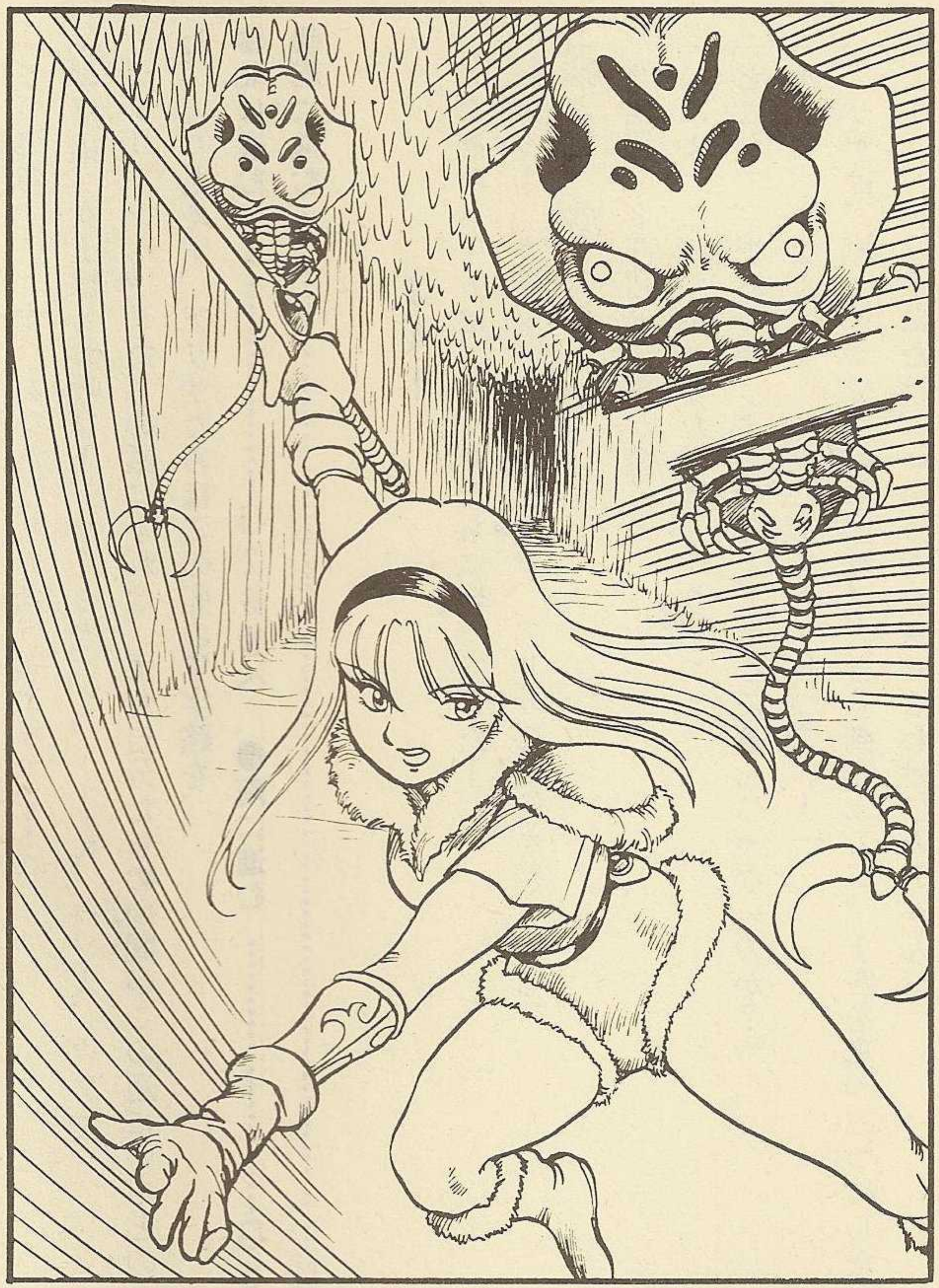
アリサたちは、飛んでくるビームを恐れず、突っこんでいった。敵はあわて、かえって狙いは不正確になる。アリサの剣が、デゾリアンヘッドたちをなぎはらった！

「こ、降参でぇす。あなたたちのほうがエーイ！」
「おほほ、女王様とお呼び！　なんちゃって。――え、ウソよ、ウソ」
デゾリアンヘッドたちの話によれば、まだ自分たちの仲間がこの辺にいるとのことだった。とりあえず、アリサたちはこの先のT字路を、

●北に進む……⇩269へ
●西に進む……⇩341
●南に進む……⇩373へ

エクゼキューターは、アリサたちに迫ってきた！
ヒュッ！　カギヅメのついた尾が、アリサの首筋をかすめる。
「おっと、危ない！」
2匹目、3匹目と攻撃が続く。
「なによ、こいつら。あたしばっかり狙ってるんじゃないのか？」
「どこかで、恨みを買うようなことでもしてきたんじゃない！」
「そんなバカなこと――それにしても、しつこい！」
アリサは、思いきって反撃に出た。大きく剣をふるい、1匹を真っ二つにした！
「よーし、アリサにだけ、いいカッコさせるわけにもいかんな」

●西に進む……⇩341



341●「えーい！」アリサは、思いきって反撃(はんげき)に出た。大きく剣をふるい、エクゼキュートを真っ二つにした！

342〜343

エクゼキューターの尾をつかみ、壁に叩きつけるタイロン。
残りの2匹も、ミャウとルツがとどめを刺していた（マジックPプラス1）。
●L字路を南に進む……⇩246へ　●東に進む……⇩386へ

助けてくれた礼を言うと、デゾリアンはさっさと外に出ていった。
「なんだったんだ、今の？」
「さあ。とにかく、あたしたちも早く出ましょう。そして、パルマ星にもどるのよ！」
スクレまでもどったアリサたちは、さっそくルベノ号を離陸させた。
⇩362へ

343

地上に出た一行は、さっき聞いたアウクバルに向かうことにした。
ルベノ号に搭載されている寒冷地用ビークル、アイスデッカーを発車させる。
しばらく雪原の上を走ったあと、一面氷でできた崖にぶち当たった。
「洞窟がふたつ並んでいるわよ」
「地下通路の入り口だろ。どちらもアウクバルに通じているそうだがな」
●右から入る……⇩304へ　●左から入る……⇩270へ

アリサは、キングセイバーと激しい剣の打ち合いをした。ときおりをも、うまく受け流して戦う。

「ち、しぶとい小娘め！」―キングセイバーは腰のビームガンを抜いた。

だが、ルツにすぐ叩き落とされてしまう。

「いけませんな、女の子相手の勝負にこんなものを使うとは」

「バカ者、勝負は勝てばいいのだ――ぐっ！」―アリサの剣が、キングセイバーの胸をヨロイごとつらぬいた。

「あんたの言うことは正しいわ。ただし、あたしが勝てばね」

アリサたちはキングセイバーがふさごうとしていた通路を進んだ。

345

アリサが手を触れたとたん、宝箱はボン！　と破裂した。

「くっ！　爆弾ね」―アリサは、腕を押さえてうめいた。幸い、小さな爆発だったが（**戦闘Pマイナス1、HPマイナス2**）。

「覚えてらっしゃいよ」―見えない敵に向かってアリサは叫んだ。

一行は、もと来た通路をもどる。

⇩26へ

344

⇩226へ

344〜347

〈しぶといヤツらだ〉

ダークファルスが、稲妻を吐こうと、口を開けた。まさにその瞬間！

の口に吸いこまれるように刺さった！

〈ぐおおお

L字の曲がり角に出た。

⇩397へ

●東に進む ……348

「フレエリ！」

ダークファルスの胸に命中し、さしもの怪物も動きをひるませた。

「だめだ、この程度では倒せない。もっと強力な術を使えればいいのだが」

かんだ。

⇩368へ

●南に進む ……349

（マジックPマイナス2）

ルツの杖から火球が飛んだ！

⇩419へ

ルツが、唇を

下を見おろすタイロンのポケットから、ラエルマベリーが転がった。デゾリス星で取った時に比べて、より毒々しい赤色になっている。

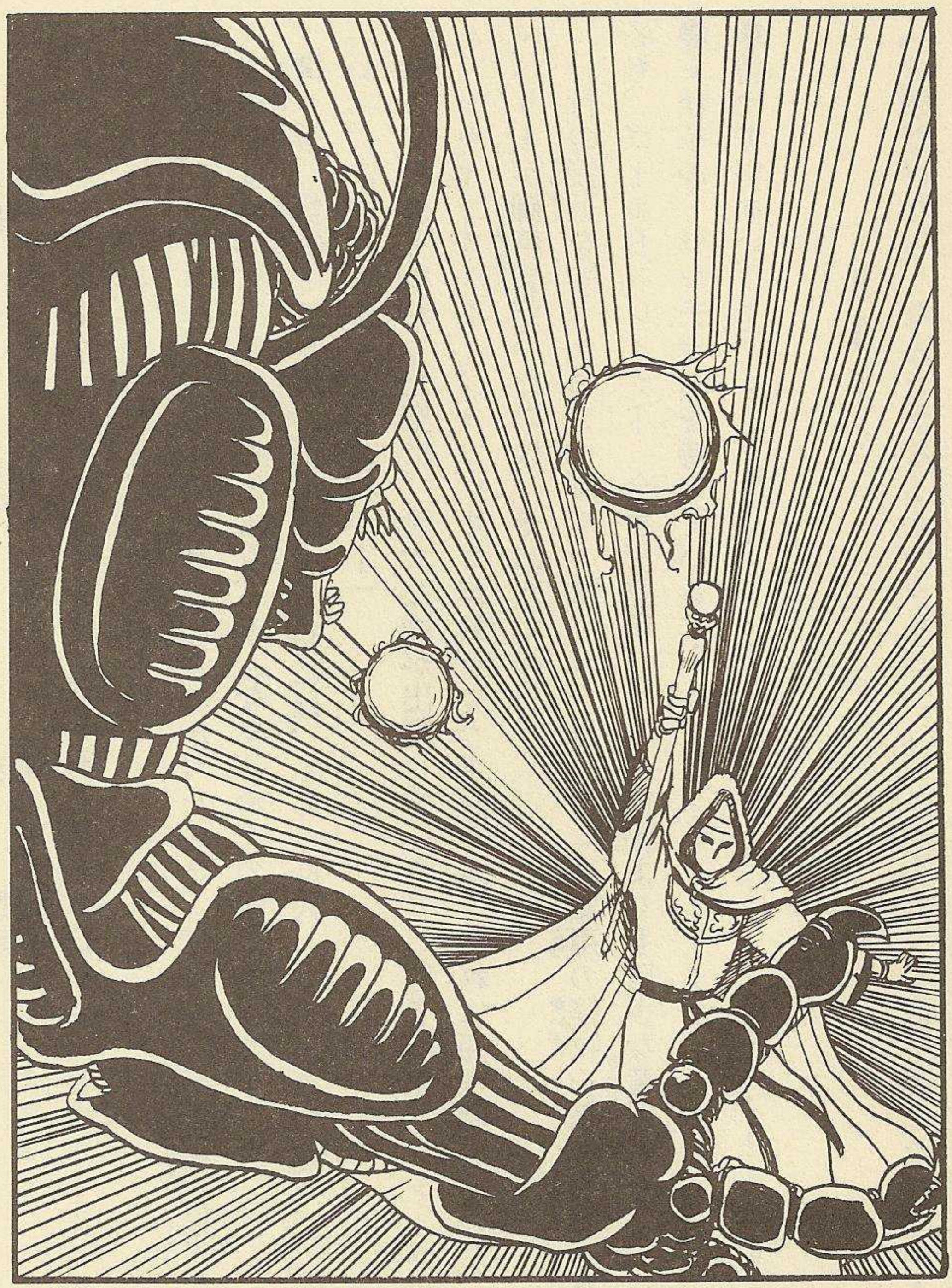
アリサたちは知らなかったが、ラエルマベリーはラコニアン・ポットで保存しなければ、有毒物質が生じるのだ。

そのラエルマベリーを本能的にミャウがかじった。

突然、ミャウの体は熱を帯び、まばゆい光に包まれた。そして、みるみるうちにミャウ

⇩350へ

348～350



349●フレエリ！　ルツは、火球(かきゅう)をダークファルスに叩(たた)きつけた。
さしもの怪物(かいぶつ)もひるんだようだが、勝負はまだこれから。

は、大きな翼を持った美しい獣へと変わった（毒のため戦闘Pマイナス3）。

「ミャウ！　ラエルマベリーを食べると、不思議な現象が起こるって言ってたな……ジャコウネコって、ミャウのことだったのか！」

「なによ、タイロン。飼い主のくせに知らなかったの？　でもなんか表情が苦しそう」

〈だいじょうぶ！　そんなことより、みんな早くボクの背に乗って！〉

間一髪、怪物どもが屋上に出てきた時には、ミャウはバヤマーレの空高くにいた。

「ねぇ、あれ見て！　お、お城が！」

今までなにもなかった空に、巨大な城が出現していた。これこそが、ラシークの本拠地エア・キャッスル！　ジャコウネコが飛び立った時のみ、それは姿を現わすのだ。ラエルマベリーが御禁制だったのは、そのためだ。

一行の接近を知ったエア・キャッスルは、さっそく迎撃用の怪物を飛び立たせた。その名も、ゴールドレイク！　今まで登場したどの怪物よりも巨大な竜だった！

●ミサイル・ランチャーを持っている……⇨409へ

●持っていない……⇨313へ

351

「2頭だけなら、なんとかなるか」タイロンはレーザーガンを取り出した。発射！

351〜352

レーザーが、マンモスの長い鼻を切り落とした。タイロンが銃を動かすと、そのとおりにレーザービームが動き、巨獣を切り裂いていく。

大出力のレーザーガンだから可能で、ニードルガンやヒートガンではこうはいかない。

ちょうど銃のエネルギーが尽きた時、マンモスは絶叫して倒れた。

サたちが共同で片づけていた（戦闘Pプラス1、マジックPプラス2）。

「すごい威力だな、タイロン殿」と、ルツ。

「こいつが効くのは、せいぜい1頭か2頭さ。それ以上だと、撃っている間にほかのヤツにやられる」

タイロンは、エネルギー・カートリッジを交換して、そう言った。

一行はアウクバル周辺にもどり、ぐるぐる回っているうちにもうひとつの塔を発見した。

「これがコロナの塔かも。だって、村の半分はウソつきだって言ってたでしょ」アリサは、自分に言いかせるように言った。

⇩285へ

352

「階段だわ。きっとラシークは上のほうにいるはず」

アリサたちは、慎重に階段を上っていった。

⇩377へ

マシンガーダーが、左手に仕こまれたビームガンを発射した！
それをかわしたアリサはダッシュ！
右手を顔の前でかまえた。
だが、アリサの剣はマシンガーダーの胸をぶち抜いていた！　もはやその技は、弱点を狙わなくても、すごい威力をもっていたのだ。
「おいおい、オレたちの出番も残しておいてくれよ」
舌を出すアリサ。このあと一行は、もと来た道をもどっていった。

353

いきなりマンモスの鼻が伸び、アリサをつかまえた。すごい力で締め上げてくる（HP**マイナス2**、**戦闘Pマイナス1**）。さらに巨獣は、その獲物を牙に突き刺そうとした。

⇩378へ

354

「くっ！　そうはさせるか！」
間一髪、アリサはマンモスの額に剣を突き立てた！
「ブオォォッ！」マンモスは彼女を放り投げ、すさまじい勢いで走りだした！
必死で身をかわすタイロンたち。マンモスは、奥の壁をぶち抜き、頭をそこにめりこませて停止した。

353〜356

「ブレーキの壊れた重戦車ってとこね。いたた」

●L字路を東に進む……⇩373へ

355

こちらも、わかったことはほぼ同じだった。ただ……。

「なにい、コロナの塔が南にあるだと！　アホこくでねぇ！　西地区の連中こそ、ウソつきだぁ。ホントの塔は北にあるだよ！」（一にチェックを入れる）

●北に進む……⇩26へ

●南の塔に向かう……⇩400へ

356

ちょうど突き当たりの所でアリサは宝箱を見つけた。

（開ける場合は、現在の戦闘Pにバトル P（2のE）を足す。それが奇数か、偶数か？）

●奇数……⇩308へ

●偶数……⇩330へ

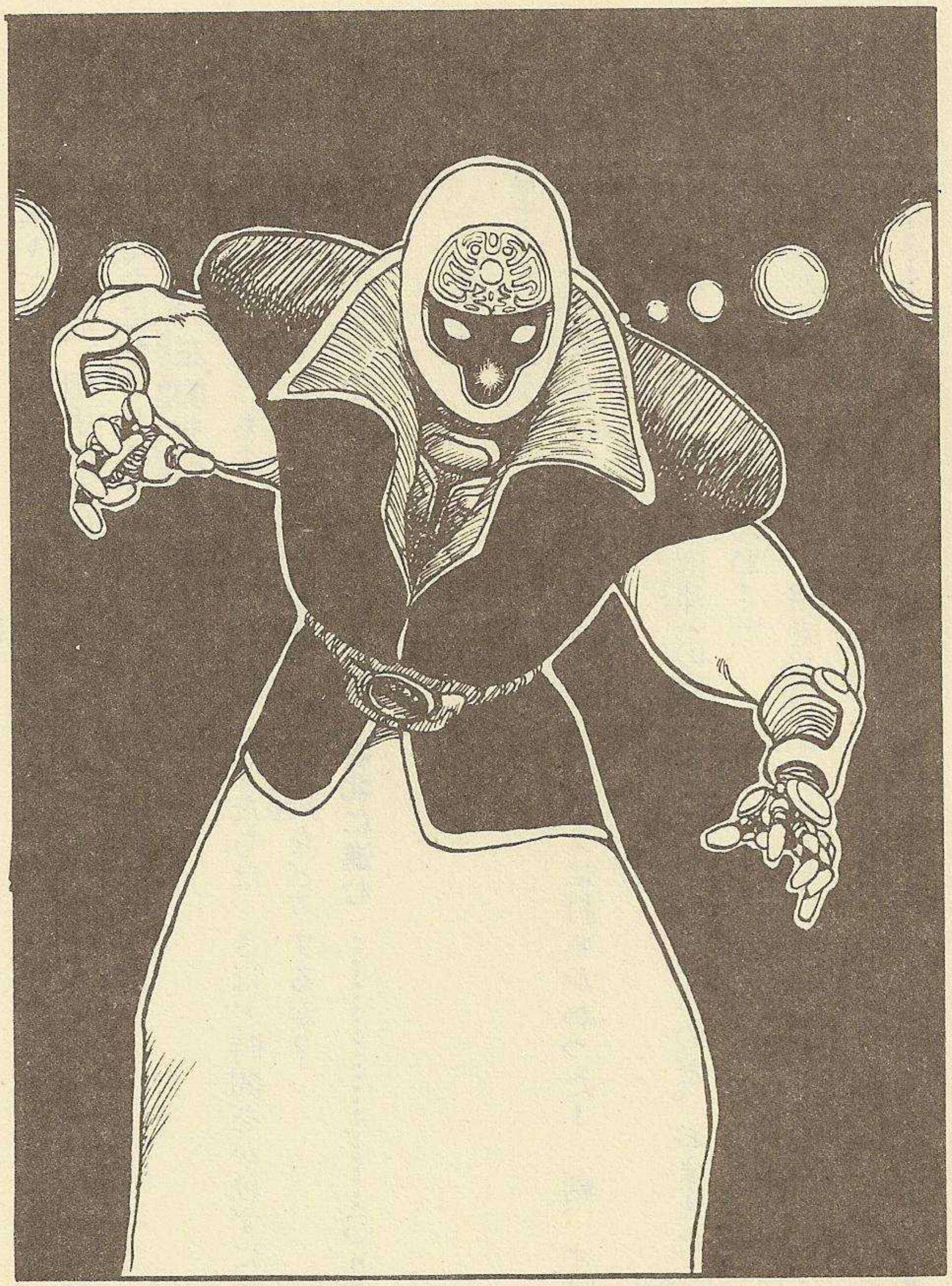
●開けないで、西のほうへもどる……⇩402へ

広間のような所に出た。その中心に、青い服を着た怪人物がひとり。
「おまえがアリサとやらか。よくぞ、ここまでこれたものだな。ふふふ……」
「ラシークか!?」
「ふふふ、だと言ったらどうする？」
「殺す！」

●敵よりPが上　ラシーク＋バトルP（1のB）　357
●敵より戦闘P＋バトルP（2のG）　アリサたち　382へ
●下　……⇩　332へ
●下で戦います。　359
●北に進む　……⇩　246へ
●西に進む　……⇩　386へ
●北に進む　……⇩　358
L字の曲がり角にでた。

マッドストーカーどもと、激しい剣の戦いは、腕をもがれたり頭を落としたりしながらも戦い続けた。

357～359



357●広間のような所で、怪人物が立っていた。「ラシークか!?」

「ふふふ、だと言ったらどうする？」「殺す！」

「なによ、こいつら！　しつこいのは嫌いよ！」
アリサの剣が偶然、相手のあばらの部分に入った。人間なら、ちょうど心臓のあった場所だ。――と、たんにマッドストーカーはバラバラに崩れ落ちた。
「そうか。みんな、左胸を狙うのよ！」
弱点がわかれば、こっちのものだった。アリサたちは、さほど時間をかけずにマッドストーカーを全滅させてしまった。その後、曲がり角をどうするか？

●東に進む……⇩294へ

●北に進む……⇩228へ

360

「死ぬのはそっちよ、ラシーク！」
アリサたちは、突風のようなすばやさで、ラシークに打ちかかった！
杖が、怪人の体に突き刺さる。
「ははは、ムダだ。わしの体は、『混沌』の魔力で保護されているのだ。おまえたちの貧弱な武器では、かすり傷さえつかんわ！」
ラシークの杖が電光を放った！　身を投げ出すように、それをかわすアリサ。
「どこか……どこかに弱点があるはずよ……」

●頭を狙う……⇩406へ

●杖を狙う……⇩322へ

360〜362

フタを開けたとたん、アリサははじけとんだ！　宝箱に爆弾が仕掛けられていたのだ。

威力は小さく、幸い大きなケガこそはなかったが（HPマイナス3、戦闘Pマイナス1）。

「いたた、もー、なんてひどいことをするの！」

ぶつぶつ言いながら、アリサたちはもと来た通路にもどった。

⇩294へ

361

362

「まぁ、アリサ！　すっかり見違えちゃって！」スエロがアリサに抱きついてきた。

パルマ星の居住区にもどったアリサは、叔母の家に立ち寄ったのだった。

アリサが仲間たちを紹介すると、スエロ叔母は彼らに深々とおじぎをした。

「いろいろとご迷惑をかけていると思いますが、これからもよろしくお願いします」

「いやなに、お互い様ですよ。それより、この辺りはどうですか？」

スエロ叔母の顔がくもった。税金は高くなる一方で、それに反対する人々はみんな怪物に殺されているという。どうやら、邪教の力により、別の世界からどんどん怪物が呼び集められているようだった。

「ラシークめ、なんとか早くヤツの息の根を止めなくては！」

「今晩くらいは、ここで泊まっていきなさい。部屋はありますから、タイロンさんやルツ

さんたちも。とにかく、体を休めないと勝てる相手にも勝てませんよ」
アリサたちはスエロの言うとおりにした。
横になったとたん、アリサは深い眠りに落ちていった。そして、兄の夢を見た……（H
Pプラス3、マジックPプラス2）。

⇩391へ

363

「早くもこいつの出番か！」タイロンはミサイル・ランチャーを肩に固定した。
「でも、弾頭は1発だけよ！　倒せるのは、せいぜい2、3頭だわ」
「まかせなさい！」
ランチャーが火を噴いた！　ミサイルは白い尾を引き、氷壁にぶつかって爆発した！
「げっ！　外れちゃったじゃない。ヘタくそ！」
「――と思うだろ。ところが」
突然、氷壁が音をたてて崩れ始めた！　今の衝撃が雪崩をひき起こしたのだ。次々と落ちる巨大な氷の塊が、谷底のマンモスたちを押し潰していった。
「すっごーい！　一発大逆転だわ！」
ところが、雪崩はマンモスだけではなく、タイロンってアルゴル一の天才だわ！」
「はぁ……前言取り消し。やっぱり、塔も倒していたのだった……。アルゴル一のドジだわ」

「あのなぁ」（ミサイル・ランチャーを失う）

●ーにチェックがある……⇩374へ　●ない……⇩272へ

363

「これがとどめだぁ！　バラバラになって、あの世の兄の所にいけっ！」ラシークがミサイルを発射！　今度は直撃だった。

アリサたちは、ラシークの言うとおりになってしまった……。

END

364

アリサの剣が、最初の1匹を真っ二つにした。

「こんなヤツら、大したことない――うっ！」

後ろからの攻撃だった。ヒュッと音をたて、エクゼキュートの長い尾が、アリサの首にからみつく。その先端のカギヅメが、肩口に突き刺さった！　ちょっとした毒があるらしく、視界がゆらぎ始めた（**戦闘Pマイナス1、HPマイナス1**）。

「このやろうめ！」タイロンはその尾をひきちぎり、本体を壁に叩きつけた。

残りの2匹もミャウとルツがとどめを刺した。

365

「だいじょうぶか？」
「平気よ。ちょっと足がふらつくだけ。それより、首に跡ついちゃったらどうしよう」
●**L字路を南に進む**……⇩**246**へ　●**東に進む**……⇩**386**へ

366

〈タンドレ！〉
稲妻が、アリサたちを直撃！　アリサたちは、黒こげになり、床に転がるかと思えた。
――だが、事実は逆だった。
反対にデスベアラーのほうが転がっていた。
ほんのわずかの差で、ルツのタンドレが先に決まっていたのだ。
●**東に進む**……⇩**417**へ　●**北に進む**……⇩**348**へ

367

やった！　今度こそダメージを与えたか!?
アリサは、自分の剣を抜き取った。とどめを刺そうと思ったとたん、怪物のブラックファルスの口から、太い腕が、アリサの体をはじき飛ばした！（**戦闘Pマイナス2**）

366〜368

なんというヤツだ。口の中に剣を突っこまれ、まだこれだけ動けるとはアリサは！

「アリサ、改めてこの怪物の恐ろしさに身の毛のよだつ思いがした。

（そうよ、オレたちがついていることを忘れるなよ」と、タイロン。

ダークフォルス　58＋バトルP（1のG）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のD）で戦います。

●敵よりP20へ　●下……⇩398へ

368

L字の曲がり角で、ルツが一行を止めた。優れた超能力者にしかわからないような、かすかな気配を感じたのだ。

やがて、壁をすり抜け、黒いヨロイに身を固めた怪人が姿を現わした。

「おまえも『混沌』からの使いか！」ルツは、師匠を殺した者の名を口にした。

へなるほど、ダークマローダーを倒したのは、おまえらか。いかにも、わしは『混沌』の使いデスベアラー。おまえらの命はわしがもらった！〉

デスベアラー　45＋バトルP（1のI）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のC）で戦います。

●敵よりPが上……⇩365へ　●下……⇩385へ

369

「やーっ」気合いをこめ、ダークファルスめがけて切りこんだ！

アリサたち　ダークファルス　57＋バトルP（1のC）

●敵よりPが上　戦闘（せんとう）P＋バトルP（2のH）で戦います。

……⇩346へ　●下……⇩398へ

370

アリサたちは、とっさに身を伏（ふ）せ、フロストドラゴンの炎（ほのお）をさけた。りざま、竜（りゅう）の腹（はら）の下に潜（もぐ）りこんだ。柔（やわ）らかい腹に剣を突（つ）き刺（さ）す！

一方、飛び上がったミャウは、竜の目を攻撃した。

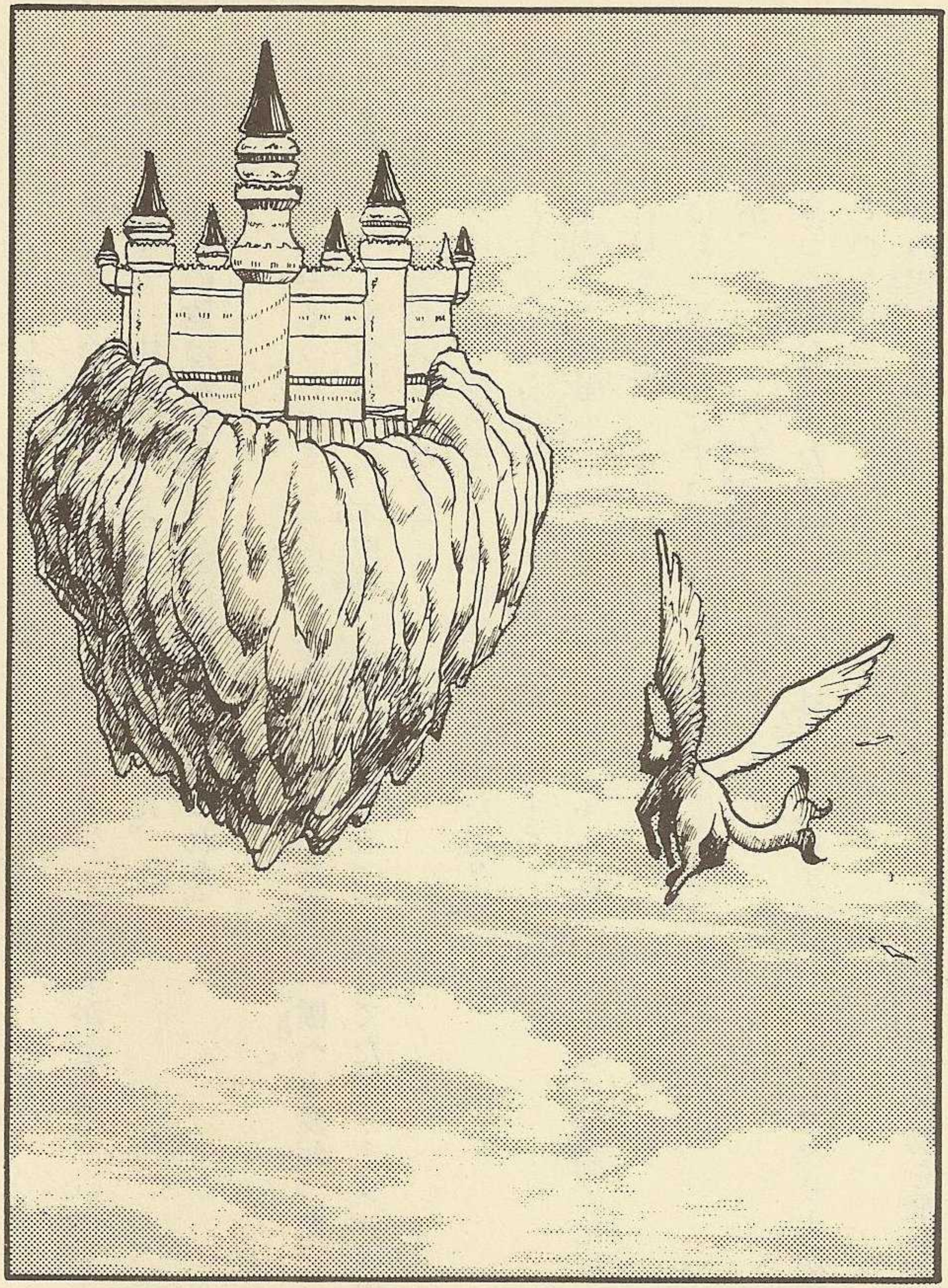
たまらずフロストドラゴンは、すさまじい絶叫（ぜっきょう）をあげてひっくり返る。タイロンが、その首を切り落とし、とどめを刺した。

意外とアッケなく勝負がついたが、それだけアリサたちに力がついたということだろう。

●L字路を東に進む……⇩267へ　●北に進む……⇩381へ

369〜371

下を見おろすうちにミャウは、大きな翼を持った美しい獣へと変わった。
が頭を突っこんで、中のラエルマベリーをかじった。
突然、ミャウの体は熱を帯び、まばゆい光に包まれた。
「ミャウ!?」
そして、みるみるうちにミャウは、大きな翼を持った美しい獣へと変わった。
「ラエルマベリーを食べると、不思議な現象が起こるって言ってたな……ジャコウネコったとだったのか！」
て、ミャウのこと
「なによ、タイロン。飼い主のくせに知らなかったの？」
〈そんなことより、みんな早くボクの背に乗って！〉
間一髪、怪物どもが屋上に出てきた時には、ミャウはバヤマーレの空高くにいた。
「ねぇ、あれ見て！　お、お城が！」
今までなにもなかったはずの空に、巨大な城が出現していた。
これこそが、ジャコウネコラシークの本拠地エア・キャッスル！
ジャコウネコが飛び立った時のみ、それは姿を現わすのだ。ラエルマベリーが御禁制だったのは、そのためだ。
アリサたちの接近を知ったエア・キャッスルは、さっそく迎撃用の怪物を飛び立たせた。



371●突然、姿(すがた)を現わしたエア・キャッスル！　アリサたちは、ラシークを倒すため、その悪魔(あくま)の城めがけ、飛び上がった。

372〜373

その名も、ゴールドドレイク！　今まで登場したどの怪物よりも巨大な竜だった！

●ミサイル・ランチャーを持っている……⇩409へ

●持っていない……⇩313へ

372

ダークファルスの目が、不気味な輝きを増した。

金縛りの魔術だ！

いきなりアリサたちは、その強力な術にかかってしまった。手足はおろか、口さえもきくことができない。

●HPが4以上……⇩392へ

●3以下……⇩410へ

373

アリサたちは、L字の曲がり角に出た。

●北に進む……⇩311へ

●西に進む……⇩303へ

アウクバルの連中の話では、北のほうに、もうひとつ塔があるはずだった。こうなれば、そちらに向かうしかない。

374

一行はいったん村にもどり、再出発。今度はアイスデッカーに乗って！ ⇩**400**へ

375

「やーっ！」アリサとミャウが飛び上がった！

空中から攻撃をかけると見せかけて、ヤツらの背後に降り立つ。思ったとおり、アイスマンたちは動きが鈍い。

「今よ！」

アリサは、巨人の踵に剣を突き立てた！ とたんに、アイスマンの全身にヒビが入り、その体は崩れ落ちた。ここが弱点だ。

それからは、こっちのもの。残りの敵もルツたちが片づけた（**マジックPプラス2**）。

広間の奥にあった宝箱から、ラコニア・アーマーができたヨロイを発見した（**ラストに記入し、戦闘Pプラス5**）。

入手、アイテムリ

「不思議ね。こかいることに気づいた。

のヨロイ、あたしにぴったりだわ。――だれ？」アリサは宝箱の陰にだれ

374～377

「わわ、こ、殺さないでください」デゾリアンがあわてて飛び出してきた。
「ラエルマベリーを取りに来ていたら、この塔の連中につかまってしまったんですよ」
●Cにチェックがある……⇩333へ
●ない……⇩399へ

376

見つけた階段を、アリサたちは上っていった。かなりの距離を上り、上の階に到着する。
L字の曲がり角を北に折れ、T字路の所で立ち止まった。
さて、どちらに進もうかと考えていると、後ろのシャッターが閉じた。もうこれで下りられない。
●西に進む……⇩328へ
●東に進む……⇩415へ

377

上の階に到着した一行はL字の曲がり角を北に折れ、T字路の所で立ち止まった。
そこでいきなり、後ろのシャッターが閉じた。もうこれで下りられない。
●西に進む……⇩402へ
●東に進む……⇩356へ

アリサたちはT字路に出た。

●南に進む……378

●西に進む……352へ

378

覆いかぶさるように両手を伸ばしてきた。

それをかわし、アリサは怪物の胸に剣を突き立てた！　どうっと倒れるゴーレム。

「あっけないわね。――きゃっ！」

突然、アリサの足首を激痛が走った。ゴーレムの指が食いこんでいた。すごい怪力だ。

ゴーレムは、指の力だけでアリサを逆さに持ち上げ、投げ飛ばした。

が受け止めたが、ふたりとも壁に叩きつけられる！（HPマイナス2）

起き上がろうとしたゴーレムの額を、ルツが杖で突いた。すると、ウソのように怪物は

動かなくなった。神経のツボのような所を狙ったらしい。

「この人を敵に回さなくて良かった……」そういって、アリサは立ち上がった。

一行は、さらにラシークを探し、もと来た通路をもどった。

⇩415へ

●北に進む……326へ

379

⇩397へ

378～382

十字路に出た。
●南に進む……⇨284へ
●東に進む……⇨253へ

380

●北に進む……⇨264へ
●西に進む……⇨222へ

381

L字の曲がり角で、アリサは宝箱を見つけた。
（開ける場合は、現在の戦闘Pにバトルポイント（2のH）を足す。それが奇数か、偶数か？）
●奇数……⇨136へ
●偶数……⇨317へ
●開けないで、南に進む……⇨412へ
●開けないで、東に進む……⇨402へ

382

「死ぬのはあぁ、おまえだあぁあ！」
しかし、爆発は起きなかった。ルツが師匠の形見のフラードマントで、ミサイルをからめとってしまったのだ。このマントにはすごい力が封じられているみたいだ。
「そんなアホな！」
「こんな所でミサイルを使うほうがアホよ！」
ラシークは胴体からミサイルを発射した！

驚くラシークの体を、アリサの剣がつらぬいた。

「おかしいわ、こんなアホがラシーク様の影武者なのだぁ！」

「ふふふふ、さすがアリサ。わしは、ラシークの体を、アリサの剣がつらぬいた。

がおまえらごときにやられるものかぁ！　ふげ」

アリサの剣がそいつの顔を真っ二つにした。「ふん、下劣なヤツ！」

一行は、広間を出て、反対側の通路を進んだ。

⇩401へ

383

回転するラシークの杖の先から、電光が飛んだ！

だが、それはただただけだった。今までの戦いで、ヤツの攻撃のタイミングはもうつかんでいる。2撃目、3撃目も、アリサたちはかわした。

「どうしたの、『混沌』の魔力は、もう品切れ？」

「バカな？」

ラシークは杖を振りかぶると、アリサめがけて打ちかかってきた。

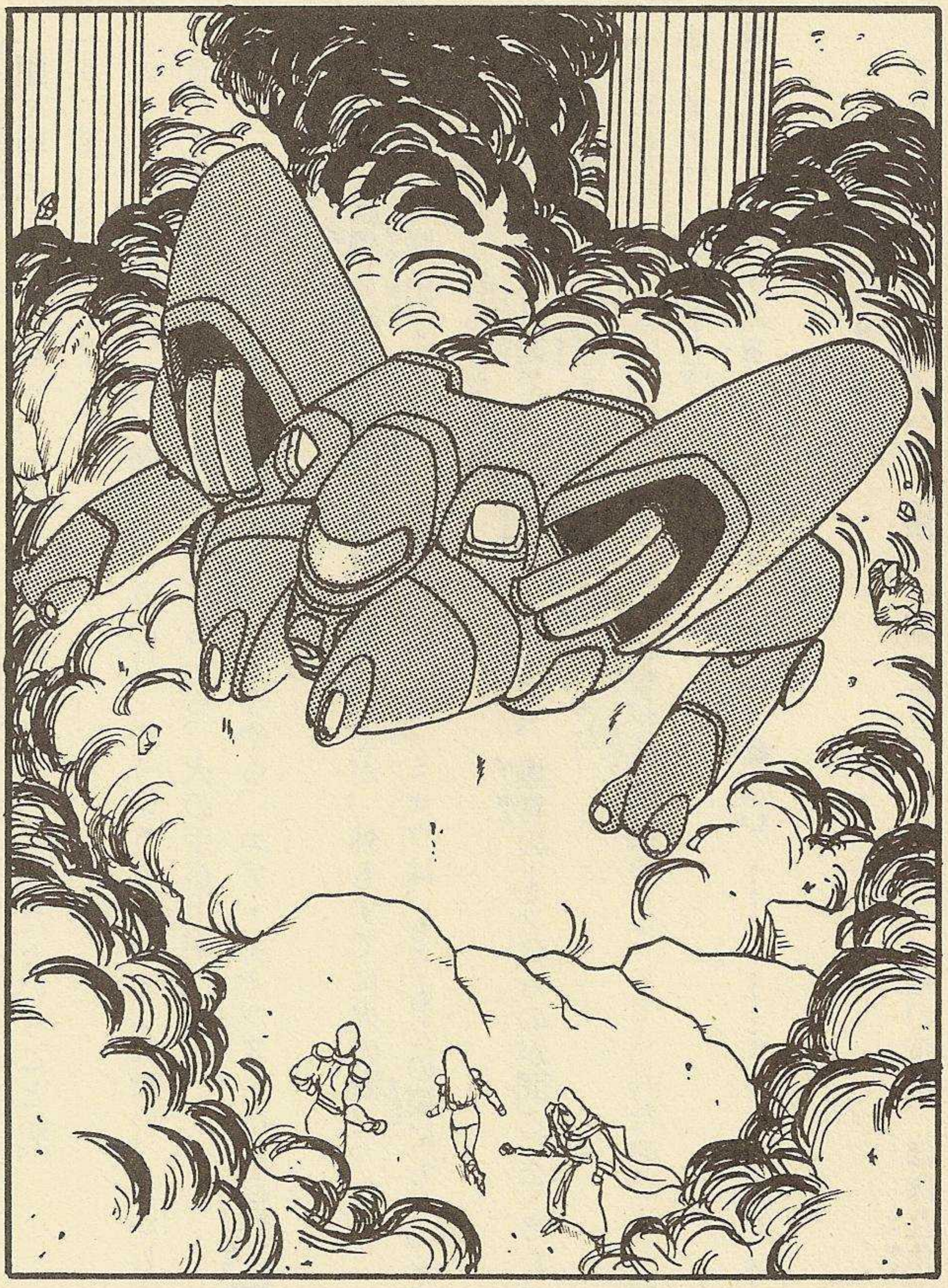
彼女は床を蹴って、身をかわした。

「そーいう戦いなら、あたしは飽きるほど、や・っ・て・き・て・ん・の・よ！」

空中から、ラシークの頭を切り裂いた！　血しぶきがドッと噴き出す。

本物のラシーク様

383



383●エア・キャッスルの自爆装置が作動した。燃え上がる城の外庭にモタビア軍の救援機が！　総督がよこしたのか。

頭が弱点――『混沌』の力もそこには及んでいなかったということか。

「か、勝ったの……？」

あっけない勝利だった。勝負というのは、こういうものかもしれない。しかし……。

ラシークが倒れた直後、城のあちこちから、火の手が上がった。

「おい、アリサ！　急いで脱出するぞ。どうやら、エア・キャッスルにはは自爆装置がしかけられているみたいだ」

一行は、誘爆を続ける城内から飛び出た。だが、外もすでに火の海だった。

「どうやって脱出する気？　ここは空の上よ。ミャウは、もうもとの姿にもどっているし、ラエルマベリーはもうないし」

アリサたちが、外庭で立ち往生しているとと、爆音のようなものが聞こえてきた。煙の間から、接近する航空機の姿が見えた。

「あれは……モタビアの紋章だ。あの総督が救援機をよこしてくれたのか！　助かった」

●Dにチェックがある　……⇩418へ

●ない　……⇩403へ

アリサは、キングセイバーと激しい剣の打ち合いをした。剣の腕は、ほぼ互角。

384

384〜385

しかし、敵には別の武器があった。後ろ脚で立ち上がったかと思うと、前足ですさまじい蹴りを放った！　アリサの小柄な体が吹っ飛んだ！（HPマイナス2）

「とどめだ！」

だが、ルツにキングセイバーは腰のビームガンを抜いた。

「いけませんな」

すぐ叩き落とされてしまう。

「バカ者、勝負にこんなものを持ち出すとは」

「あんたの言うことは正しいわ。ただし、あたしが勝てばいいのだ――ぐっ！」起き上がったアリサの剣が、キングセイバーの胸をヨロイごとつらぬいていた。

アリサたちは勝てばいいのだ――

⇩226へ

385

キングセイバーがふらし、あたしが勝てばね」

アリサの剣が、タイロンのオノが、こさまざまに速攻をかけた。

〈き、きさまらーっ！〉

「どうだ、いかに『混沌』からの使いだろうが、精神集中しなければ魔術は使えまい」

〈ならば、これを食らえ！〉

デスベアラーに攻撃をかける。

巨大なオノを振り上げた。だが、その瞬間！　ルツの杖が、怪人の面当

てを叩き割った。
その中に顔はなく、黒い霧のようなものが
決まったものの形というものがないのだろう
強敵を倒したアリサたちはL字路を、
●東に進む……⇩417へ

L字の曲がり角に出た。
●南に進む……⇩358へ
●東に進む……⇩386へ
●西に進む……⇩387へ

アリサは、アリジゴクの頭を切り落とした。
アリサたちは、なんとかアリジゴク帯を突破した。その足で、『マハルの洞窟』にたどりつく。
洞窟内に入り、T字路の所まで進む。すると、そこで後方にシャッターが落ちた。
「とにかく奥に進むしかないようだな……」
●東に進む……⇩119へ
●西に進む……⇩58へ
●北に進む……⇩348へ

『混沌』の世界では

急上昇して、ミャウは炎をかわした。竜の背中の上に回りこみ、それぞれの武器を振り下ろす！

しかし、表皮は硬く、それほどのダメージは与えられない。

怒ったゴールドレイクは、尻尾をくねらせ、ミャウを打った！　ショックで、アリサは宙に投げ出された！（HPマイナス2）

「くっ！」アリサは必死に巨竜の翼にしがみついた。

（この怪物を倒す手はひとつ）

アリサは決心すると、自分の命綱でもあるゴールドドレイクの翼を切り始めた。

片翼を失ったゴールドドレイクは、きりもみしながら落下！　アリサもその衝撃に気が遠くなっていった……。

――ハッと気がついた時、アリサはがっちりした腕の中にいた。

「タイロン！」

「気がついたかい。あやうくバラバラになるところをキャッチしたんだぜ」

彼女は、顔を赤くしてタイロンから離れると、小声でありがとうと言った。

⇩324へ

デゾリアンヘッドたちはビームガンをこう距離が離れていては不利だった。アリサたちは、思いきって突っこんでとどめのビームが、アリサの額を撃ちぬいた！

389

END

アリサはマシンガーダーのビームをかわし、跳躍した。狙いはヤツのTVカメラだ。ところが、さすが戦闘用ロボット。その行動を予測し、すばやく腕をくりだしてきた。ヨロイごとアリサをはじき飛ばす！（HPマイナス1）

390

とどめを刺そうと寄ってきたマシンガーダーだが、突然、白煙を噴き上げて倒れた。その後ろから、ぬっとタイロンが顔を見せる。

「1対1の対決じゃないんだから、あまり無理するなよ」

この後一行は、もと来た道をもどっていった。

⇩378へ

389〜392

早朝。スエロに見送られ、アリサたちは出発した。

バヤマーレの丘は、港町シオンの北、10キロの所にあった。ラシークが政権を握ってから、丘全体を巨大な城壁で囲ってしまったという。

アリサたちは、検問所のひとつを強引に突破し、丘に足を踏み入れた。そして、丘の頂に建っている巨大な塔を見上げた。

バヤマーレの塔。今までに入ったどんな塔よりも高い。アイスマンの言っていた『丘のずっと上』というのは、きっとここに違いなかった。

一行が塔の中に入ると、後ろのシャッターが音をたてて落下した。

「いつもの脅しね。そんな手なんか、効くもんですか！」

●T字路を東に進む……⇩378へ　●西に進む……⇩348へ

●南に進む……⇩417へ

391

392

ダークファルスの口がカッと開き、稲妻が飛んだ！

それはアリサたちの足元ではじけ、一行は石畳の上に投げ出された。

「うっ！　体は動くか？」

「なんとかねばるわ。まだ戦えるわよ」
「それじゃ、反撃開始だ！」
アリサたちは敵の不意打ちから立ち直り、戦闘体勢に入った。
●マジックPが5以上……⇩407へ
●マジックPが3～4……⇩349へ
●マジックPが2以下……⇩369へ

393

アイスマンは、口から冷気を吹き出した。いや、それはただの息ではなかった。硬い氷の粒が無数に威力だった。直撃を受けたヨロイはまるで月のクレーターのようにくぼんでしまった。
「くっ！」
すさまじい威力だった。直撃を受けたヨロイはまるで月のクレーターのようにくぼんでしまった。もちろん、生身の所などは血まみれだ（HPマイナス4）。
●HPが5以上……⇩375へ
●4以下……⇩413へ

394

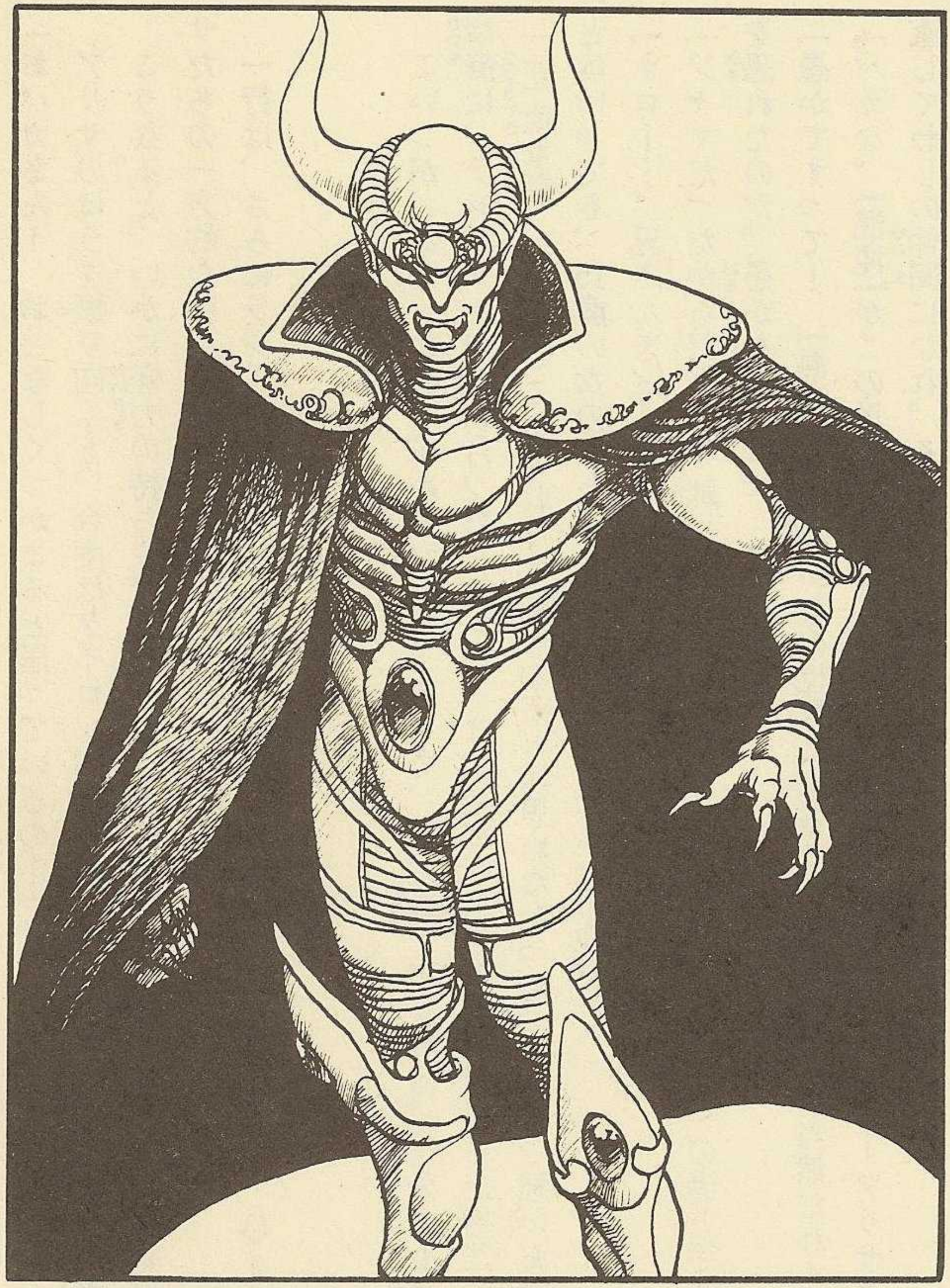
ゴーレムは、覆いかぶさるように両手を伸ばしてきた。
アリサはその手から逃れ、後ろから切りかかった。

「おバカさん！　おとなしくつかまると思っているの！」
アリサのほうを振り向くと、今度はタイロンが後ろから攻撃をかける。
こうなると、いかに怪力の持ち主であろうと、その実力を発揮できない。
サたちの一方的な勝利に終わった。
一行は、さらにラシークを探し、もと来た通路をもどった。

⇩415へ

395

こいつが、あたしの捜し求めていた男。そして、兄の敵。アリサは、自分でも驚くほど冷静に、ラシークと向かい合った。ラシークは、冷たい氷のような目をした男だった。
「正直な話、まさかここに来れる人間がいるとは思わなかった。それも、強いお供がいるとはいってもだ。15歳の女の子とはな……。さすがはネロの妹だ」
「ネロ……。兄さんをどうして……殺したの!?」
「ジャマだったからだよ、単純にね。彼は、わしが邪教の――『混沌』の者と手を結ぶのを恐れたのだ。愚かなことよ」
「愚かですって！　『混沌』の怪物がこの世界に来ることを恐れるのは当然だわ！」
「バカな。『混沌』がこの世を支配する。こんな素晴しいことはない。――アリサよ、考え直してわしの仲間になれ。そうすれば、今までのことを許してやろう」



395●ラシークは、冷たい氷(こおり)のような目をした男だった。「アリサよ、わしの仲間(なかま)になれ。そうすれば、許(ゆる)してやる」

396〜397

「嫌だと言ったら」
「殺す」
ラシークは、どんな脅し文句よりも恐ろしい声で、ぽつんと言った。
ラシーク　50＋バトルP（1のD）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のI）で戦います。
●敵よりP上 ……⇩360へ

396

フロストドラゴンは、真っ赤な火炎を吐き出してきた。
ものすごい高温！　盾やヨロイの表面がかすかに溶け始めた！
意識を失いそうになる（HPマイナス2）。
●HPが4以上 ……⇩370へ
●3以下 ……⇩334へ

397

T字の分岐路に出た。いったい、ラシークはどこにいるのか？
●東に進む ……⇩348へ
●南に進む ……⇩378へ
●西に進む ……⇩417へ

ダークファルスは地面を滑るように動き、アリサたちの攻撃をかわしていた。
何度か切っ先が怪物の体をとらえるが、硬い体にはじかれてしまう。
突然、ダークファルスは予想外の反撃に出た。稲妻を、自分が乗ってきた航空機に浴びせたのだ！
四散する機体。
〈これで、もう逃げられない〉
「ふん、そんなおまえたちは帰ることができない。
アリサは傾斜した石畳にしがみつくように、もう目と鼻の先にあるバヤマーレの丘を指さした。
「ことは先刻ご承知よ！」
周囲の炎はさらに広がり、エア・キャッスルそのものが、今まさに大地に激突しようとしていた……。
「いろいろありがとう、タイロン、ルツ、ミャウ……」
アリサは、『混沌の魔王』とともに散った。15歳の命を犠牲にして、アルゴル太陽系を魔の手から救ったのだ。

UNHAPPY END

398～401

●マジックPが4以上……⇩315へ　●3以下……⇩342へ

399

吹雪のため、視界は白一色となっている。やがて前方に、細長い塔がその姿を浮かび上がらせてきた。

「きっと、あれがコロナの塔よ」

400

⇩285へ

401

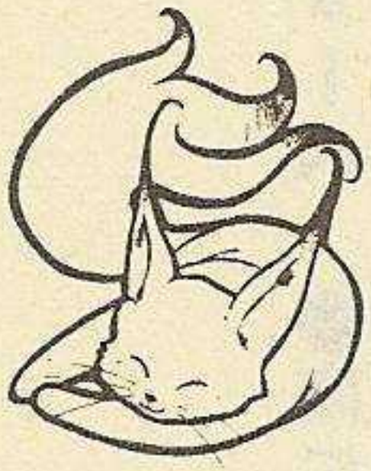
通路の先に短い階段があった。それを上ると、急にどんよりとした曇り空が開けた。

「屋上か。しかし、ラシークはいったいどこにいるんだ？」

「下からいろいろ上がってくるわよ」

●ラエルマベリーとラコニアン・ポットがある……⇩371へ

●ラエルマベリーだけがある　⇩350へ　●どちらもない……⇩291へ



T字路に出た。

●西に進む……⇩402

●東に進む……⇩381へ

402

モタビアからの救援機が、前庭に着陸した。

「急げ！　煙に巻かれるとやっかいだ」

すぐにカチリという音がし、ハッチが内側から開いた。

だが、その瞬間――アリサたちは、庭の石畳に叩きつけられた。救援機の中から、異様な力が噴き出し、一行をはじき飛ばしたのだ！（戦闘Pマイナス1）⇩325へ

「いったい何が!?」

403

急降下して炎をかわすミャウ！　アリサたちは、たてがみにしがみついた。

ゴールドレイクの腹に、はりつくように接近した。

それぞれの武器を、柔かい腹に突き立てる！　真っ赤な血がゴボッとあふれ出た。

●南に進む……⇩267へ

●西に進む……⇩356へ

効果はアリサの予想以上だった。火を発生させる器官のどこかを切り裂いたらしく、切り口から炎が噴き出したのだ！

「危ない！　逃げろ！」急いで離れるミャウ。

次の瞬間、ゴールドドレイクは、まるで発火した気球のようにはじけ飛んだ！

⇩324へ

405

デゾリス。それは、雪と氷に閉ざされた星だった。

開拓されたばかりの星なので、まだ正規の宇宙空港はない。ハプスビーは、ただひとつ造られた植民都市スクレの近くに、ルベノ号を着陸させた。

「うう、寒い。あたし、デゾリスに来たのは初めてよ」色っぽい冬服に着替えたアリサが、ルベノ号から降りた。

「ただの氷原じゃない。ハプスビー、場所を間違えたんじゃないの？」

ヘイイエ。寒サヲ防グタメ、すくれハ、地下ニ造ラレテイルノデス〉

ハプスビーの言うとおりだった。アリサたちは、近くにあったドーム状の入り口を見つけ、その中に入っていった。

「けっこう長いトンネルね。――げっ、あれなに？」

奥のほうから、青いぶよぶよした塊が飛びはねてきた。全部で6匹いる。

「ブルー・スライムだわ！　ホントにここは、スクレなの!?」

ブルー・スライム6匹　31＋バトルP（1のE）

アリサたち　戦闘P＋バトルP（2の1）で戦います。

●敵よりPが上……⇩217へ

●下……⇩279へ

406

タイロンたちが正面から牽制しているうちに、アリサはそっと後ろに回りこんだ。

ラシークの首が回った。

かまわず、アリサは思いっきり飛びかかった。頭めがけて、剣を振り下ろす！　切っ先は頭をかすめ、カブトのツノを1本折った。

「外したか！」

だが、その一撃は思った以上の効果があった。ラシークが、折られたツノを押さえて、うずくまったのだ。

「小娘、もう許さんぞ！」

立ち上がったその顔に、もう冷静さはなかった。

⇩224へ

406〜409

ミャウは、パウマの超能力(ちょうのうりょく)をアリサにかけた（**マジックPマイナス3**）。たんに、アリサは力がみなぎるのを感じた。パウマは、一時的に攻撃力を引き上げることのできる能力なのだ（**戦闘(せんとう)Pプラス3**）。

⇩369へ

408

モタビア星から6時間ほどで、もうパルマ星の青い姿(すがた)が見えてきた。

「今度は、どこをあたってみるの？」と、リクライニング・シートに寝そべったアリサ。

「そうだな。とりあえず、ルベノ博士の所に行こう。また、なにか情報(じょうほう)があるかもしれん」

さっそく、アリサたちは、昼寝(ひるね)をしていた博士の家にルベノ号を着陸(ちゃくりく)させた。

「おまえらなぁ！」とわめいて、博士が出てきたのは言うまでもない。

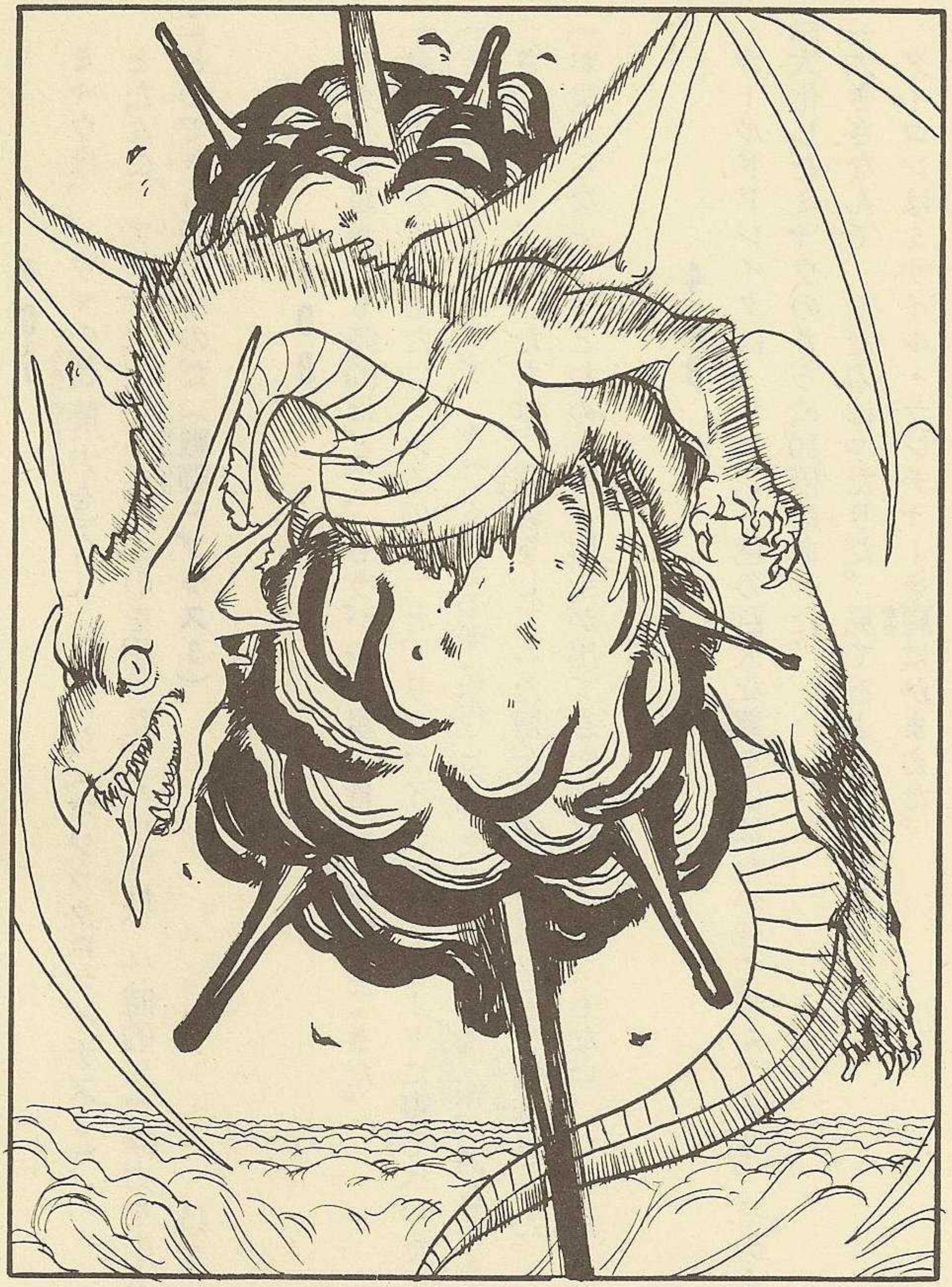
⇩207へ

409

ゴールドレイクは、オレンジ色の巨大な翼(つばさ)をはばたかせて飛んでくる。その全長は、巨大化したミャウのさらに10倍はあった。

「大きさなんて、ただのはったりだ。見てろよ！」

タイロンはミサイル・ランチャーを肩(かた)にかまえた。



409●タイロンの発射(はっしゃ)したミサイルは、ゴールドドレイクのどてっ腹(ぱら)で炸裂(さくれつ)した！　さしもの巨竜(きょりゅう)も１発でおしまいだ。

ゴールドドレイクが炎を吐いて威嚇した。
「バカめ！　このミサイルは熱源を追いかけるんだぜ」
タイロンの言うとおりだった。発射されたミサイルは、まるで生きているような飛翔を見せ、ゴールドドレイクのどてっ腹で炸裂した！
「やったぁ！」
肉片をまき散らかしながら、巨竜は落下していく。
「やれやれ、最後の獲物があんなに大物になったと知ったら、あのハンターのおっさんも喜ぶぜ」
タイロンはそう言って、もうミサイルのなくなったランチャーを放り投げた（**ミサイル**⇩**324へ**）。

こうなっては、ダークファルスの思うがままだった。
まったく抵抗のできないアリサたちに、『混沌の魔王』はゆっくりと近づいてきた。
〈これから、おまえたちをわがしもべに改造する。そして、ラシークのかわりに、この世界を制覇する先兵となるのだ〉
それは、殺されるよりも屈辱的なことだ。

だが、今のアリサには、「ノー！」と叫ぶことさえできなかった。

END

411

一行は塔の下にたどり着いた。

「悪趣味！　壁の中、ヘビの彫刻が入っているわ」

アリサが細い塔を見上げてつぶやく。

中に入った彼女たちが、T字路にさしかかった時、突然、後方にシャッターが落ちた。

「ふふふ、ここはメデューサの塔じゃ！　死にに来たか、バカ者どもが」女の不気味な声が、どこからともなく聞こえてきた。

「間違いない、あれはあの化け物の声だ」

タイロンの言う化け物とは、もちろんメデューサのことだった。勇者が負けた唯一の怪物、メデューサを探し出して今度こそ殺してやろう」

「行こう！」

●北に進む……⇩234へ

●南に進む……⇩261へ

411〜414

アリサたちの前に、巨大な竜が立ちふさがった。ドラゴンワイズ以上に凶暴といわれる、フロストドラゴン　48＋バトルP（1のB）

フロストドラゴン　48＋バトルP（1のB）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のF）で戦います。
●敵よりPが上……⇩370へ　●下……⇩396へ

413

ダメージが大きく、アリサたちはまともに動くことすらできなかった。

「言ったとおりになったろう。人間というのは、あっさりと死んでしまうものなのだよ」

「そ、そんなバカな……」

そう言うアリサの背を、アイスマンの巨大な足が踏みつけた。

END

414

いきなり、ラシークの杖が電光を発した。

その攻撃からは、だれも逃れることはできなかった。アリサ、タイロンはもとより、身

の軽いミャウ、風のように動けるルツでさえ電光を受け、床に倒れた。

「今のは、ほんの小手調べだぞ」

ラシークはそう言って、足を1歩踏み出した。

●マジックPが3以上……⇩305へ

●マジックPが2以下……⇩308へ

415

「待て！　このアリサたちの前に、金色のヨロイに身を包んだ半人半馬が現われた。キングセイバー。親衛隊の名にかけて、ここできさまらを殺す！」

アリサたちの前に、金色のヨロイに身を包んだ半人半馬が現われた。キングセイバー。親衛隊の名にかけて、ここできさまらを殺す！」

親衛隊も、相当、位が高そうなヤツは、すらりと剣を抜いた。

キングセイバー（1～47＋バトルP（1のF）

アリサたち戦闘P＋バトルP（2のA）で戦います。

●敵よりPが上……⇩344へ

416

ルツは、死者をよみがえらせるリバスの呪文を唱えた（マジックPマイナス5）。

「ん……あれ？　あたし、生き返っちゃったの？」起き上がったアリサが背のびをした。

●下……⇩384へ

「あのな、主人公がオレたちを残して死んでどうするんだよ」とタイロン。
「あの場合、仕方ないでしょ。――あれ、宝箱があるわ。お金と剣が入っている」（ラコニアン・ソードを入手し、戦闘Pプラス5。プラス200メセタ）
「それは、ラコニア製の剣ですね。そんなすごい物を手に入れた以上、長居は無用のようだ」ルツが言った。
⇩17へ

417

アリサたちはT字路に出た。
●東に進む ……⇩376へ
●西に進む ……⇩376へ
●北に進む ……⇩397へ

418

モタビアからの救援機が前庭に着陸した。
「待って！」駆け寄ろうとする一行をアリサが止めた。
「どうした？」モタビアの情報部がいろいろ探っているって、総督が言っていたろう。ここの位置がわかったって不思議なことじゃないわ」
「そんなこと……⇩368へ

アリサは、得体の知れない不安を口に出せなかった。ただ、頭にこびりついているのは、モタビア総督の顔にあった火傷の跡……。
救援機のハッチが、ゆっくりと開いた。

⇩419

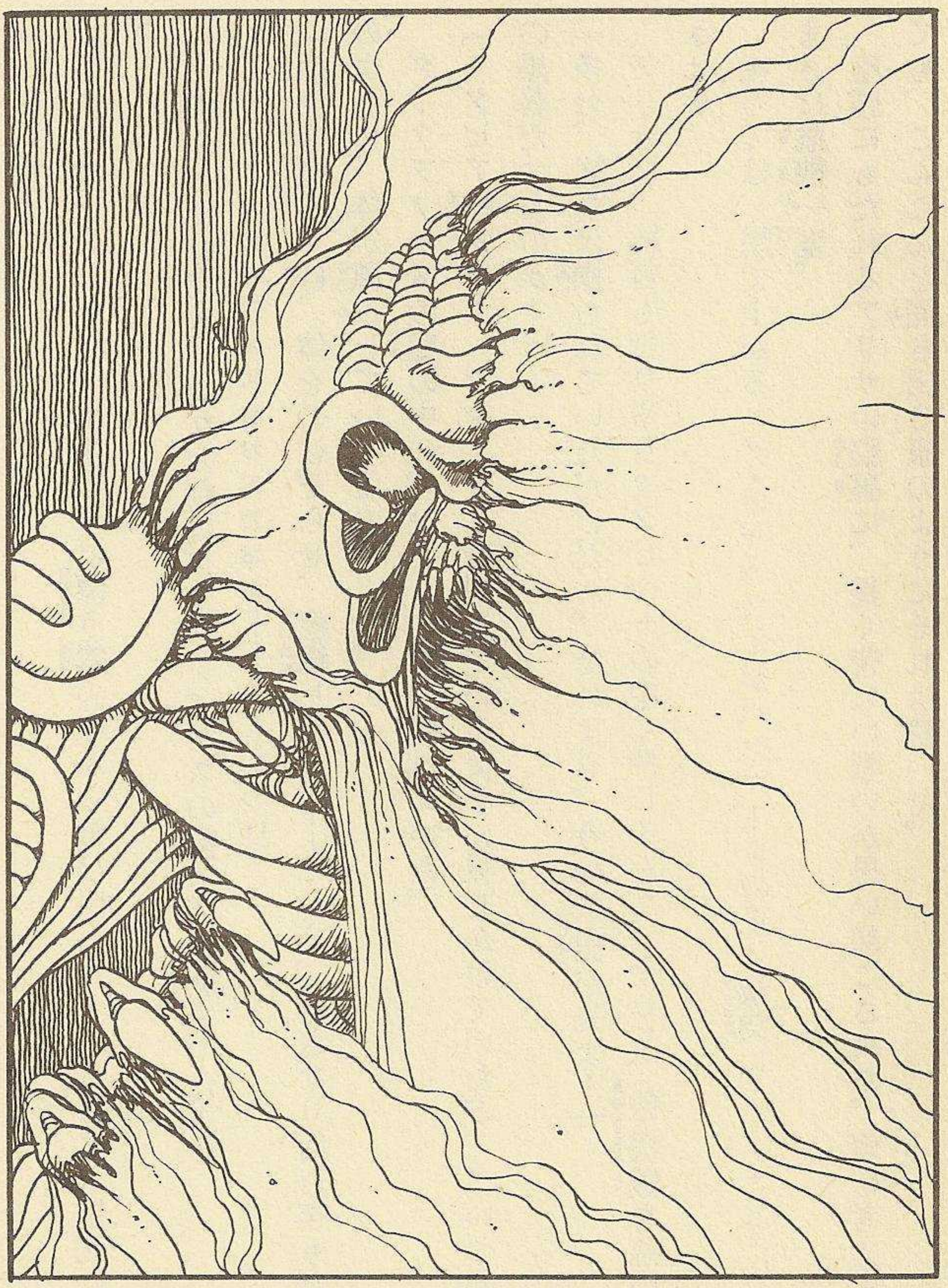
「とにかく、もう一度攻撃よ！」
ダークファルス　56＋バトルP（1のI）
アリサたち　戦闘P＋バトルP（2のB）で戦います。
●敵よりPが上……⇩346へ　●下……⇩398へ

⇩420

タイロンとルツが、ダークファルスの左右から攻めた！
『混沌の魔王』のパワーはすさまじく、歴戦の勇者と超人を相手にして、それぞれ片手で互角以上の戦いを見せていた。
さらに、ミャウが後ろから飛びかかろうが、まったく気にしないという余裕！
ダークファルスは、唸り声をあげると、この3人を一気にはね飛ばした。
へむ、あの娘はどこにいった!?〉

⇩325へ

419~420



420●『混沌の魔王』は、まるで何百年もたったかのように、風化していった。アリサはついに兄の敵をとったのだ！

「ここよ！」

アリサは、ダークファルスの下に漂う霧の中から飛び出した！　まさに、一瞬のスキを突き、彼女の剣はダークファルスの額に突き刺さった！

だ！

へぐおおおおおおおおおおおおおおおお――――っ!!〉

『混沌の魔王』は、体をのけぞらせ、痙攣した。――そして、いきなり何百年もたったかのように、体が風化していったのだ……。

ダークファルスの塵の中に、ひとりの男が倒れていた。

「モタビア総督だ！　ラシークと敵対しているように見せかけていたが、こいつがすべての黒幕だったのか！」

「多分、総督は操られていただけだわ。それより、今は脱出が先よ！」

アリサは、総督もむりやりコクピットの中に押しこんだ。そして、救援機を急いで発進させる。

後方では、燃え上がるエア・キャッスルがバヤマーレの丘に激突しようとしていた……。

まさに危機一髪。

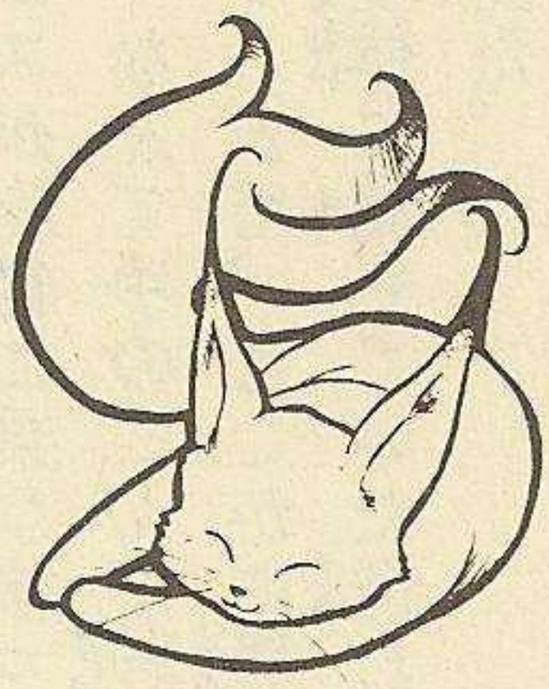
座席にもたれるアリサの脳裏に、長く苦しい戦いが思い起こされた。何も考えまいとしても、こんこんと涌き出る泉のようにそれは続いた。

420

兄さん……。

そうつぶやくと、アリサは深い眠りに落ちた。

HAPPY END（⇩エピローグに続きます）



エピローグ

「おお、みんな済まなかったな……。わしの心と体は、どうやら悪しき魔力に犯されていたらしい……」

地上――バヤマーレの丘で、目を覚ましたモタビア総督が言った。

「それにしても、グークファルスが総督に乗り移ってあやつり、さらにそこからラシークをあやつっていたなんて……。なんて手のこんだ計画だったの」

「本当に終わったんだろうな？　まだ、どこかに黒幕が隠れているなんてことは？」

「それはだいじょうぶ。惑星全体に満ちていた怪しげな気配は、もう完全に消えました」

タイロンの疑問に、ルツが答えた。

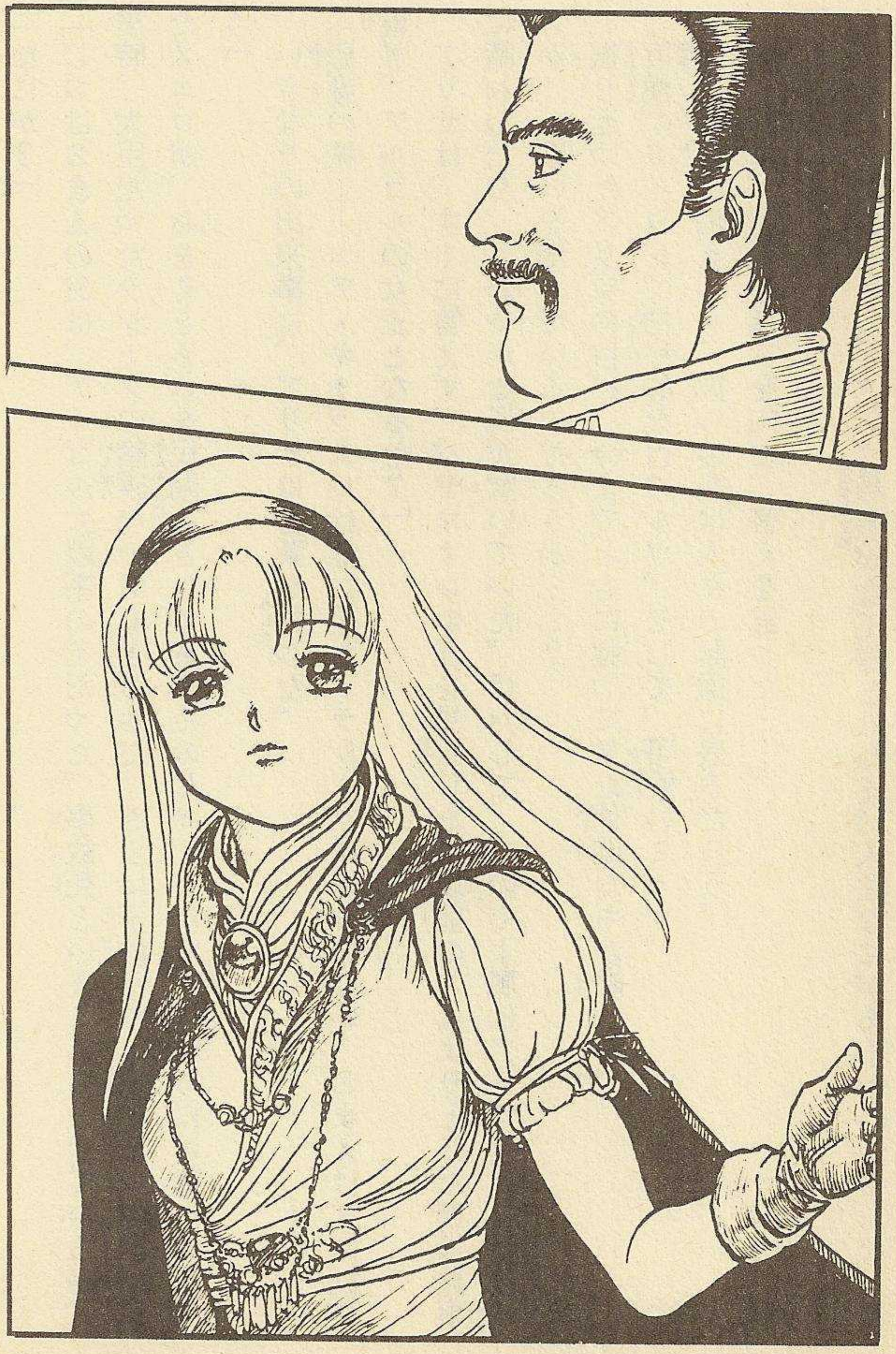
「思いかえすだけで、背筋が寒くなってくる。わしの体の中に、あんな怪物がいたとはな。まるで気がつかなかった。恐ろしいヤツ……。よくぞ、ダークファルスを退治してくれた。もう少し遅かったら、大変なことになっていただろう。心から礼を言うぞ」

「これは、あたし自身のためにもやったことです。殺された兄さんの敵を討つために……。でも、ラシークも、『混沌』の怪物にあやつられていただけなんですね」

アリサの目に涙が光った。

「アリサよ。――おまえに話したいことがある」総督が、ゆっくりと起き上がった。

エピローグ



「なにか？」
「じつはおまえの父は、アルゴル太陽系の王だった。事故死ということになっているが、当時、大臣だったラシークの陰謀なのはあきらかだ。さらに子供たちも狙われるのを恐れたスエロが、おまえとネロを民間人として育てたのじゃ。だから、仇討ちには違いなかろう」
いきなりの出来事に、アリサは言葉を失った。
「悪魔の城――エア・キャッスルは地に落ち、ラシークはもういない。おまえは父の後を継ぎ、アルゴルの女王となるか？」
アリサは、すぐに答えず、バヤマーレの丘を見渡した。以前のどんよりとした空は見事に晴れわたり、さわやかな風が吹いていた。はたして、このそよ風はアリサたちの長く苦しかった戦いを知っているのだろうか……？
振り返っても、今までともに戦ってきた仲間たちが映った。巨漢のタイロン。神秘的な目のルツが消えても、彼らの名は人々の記憶に残るだろう。
闇の記憶が消えても、総督のほうを向き、答えを言った……。
「それにしても、あのジャジャ馬娘が女王様とはねえ。人生なにがあるかわからんな、ル

エピローグ

ツの旦那」
「わたしは、秘かにそうではないかと思っていたのですが。あの娘の目は、女王の目だ」
「はん？　ウソだろ」
「本当ですよ。もっとも、あのアリサさんが、王宮の中でおとなしくしているはずがないというタイロンどのの意見には賛成です」
「そうだろ。そう思って、オレはひとつ手を打っておいたんだ」
朝のけだるい日差しの中で、アリサは目を覚ました。ベッドも寝室もものより大きく、はるかに立派だった。いや、それどころではない。兄に比べれば、この王宮は別世界といって良かった。
（でも、なにか物足りない）
アリサの枕元で、ガサリと音がした。小さな動物が窓を開けて、飛び前に使っていた
「ミャウ！　どうしたの？　え、この手紙を見ろって？」
その手紙は、未開の星デゾリスに探検に行くというタイロンの手紙だと暮らしていた家
今日の8時。場所は、ルベノ博士の家。
「もう！　あと2時間しかないじゃないの！　待ってて、今ここを抜けこんできたのだ。
アリサは、勢いよくベッドから飛び出した。出発時間は、出すから」

行動記録紙

バトルポイント表(バトルP)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1										
2										

戦闘ポイント(戦闘P)

0▶

ヒットポイント(HP)

10▶

マジックポイント(マジックP)

O▶

お金(メセタ)

O▶

アイテムリスト

アルファベット・チェック

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J

あとがき

主人公アリサのキャラクターづくりには苦労しました。なんとしても前の仕事が『桃太郎電鉄』でしたからねぇ。「『アリサどの、敵を倒して、ウハウハのハ』とタイロンは言ったぞ。ハッハッハ」あやうく、こう書くところだった。結果的には、かなりのジャジャ馬娘になりましたが、それはそれで可愛いものです。

うーむ、どうも頭の切り替えがうまくいかん。『桃太郎伝説』（ギャグ）、『イース』（シリアス）、『桃太郎電鉄』（ギャグ）と書き続けてきて、少々頭が混乱しております。この『アンタシースター』は、シリアス90パーセント、ギャグ10パーセントというところでしょうか。

もともとこの話は、セガのTVゲームが土台になっています。ロボット、宇宙船、レーザーガンが登場する一方、竜や魔法使いも出てくる楽しいRPG。地下迷宮のアニメーション画面、特にエンディングなんかは感動ものでした。

SFとヒロイック・ファンタジー（剣と魔法ものね）が合体したところなどは、まさに私好み、機会があれば、小説にもしたいですね。

こんな風に科学と魔法がごっちゃになっている話は、私の知っているだけでもいくつかありますが、F・セイバーヘーゲンというアメリカの作家の書いた『西の反逆者』には、核

あとがき

戦争後、荒廃し魔法が復活した世界に、〈象〉というダースンの場します。

L・ニーヴンの『ガラスの短剣』『魔法の国が消えていく』といったウーズは、剣と魔法の世界に科学的なルールを持ちこんで成功した作品です。ゲームのジャンルに与えた影響も大きく、ウォーロックというゲームファンも多いのではないでしょうか？　また、本書にも登場した『混沌』のイメージは、M・ムアコックのエターナル・チャンピオン・シリーズ（「エレコーゼ・サーガ」とか「エルリック・サーガ」とかいろいろあります）から取りました。いずれも、中高校生くらいから読めますので、機会があれば手に取ってみてください。

さて、壮大なスケールの『ファンタシースターII』ですが、この春にはその続編がメガドライブ用として発売されます。今度はグラフィック（なんと戦闘時に敵味方キャラとも動くとか）も、ストーリーもさらにパワーアップされるそうで、今から楽しみです。（私はまだメガドライブ持っていないけど……）

最後に。青木・クニヌーヌ・邦夫さん、すてきなアリサを描いてくれてありがとう。続編やる時は、またよろしくお願いしますだ。

※大出光貴　１９６１年、北海道富良野市生まれ。血液型Ｂ、さそり座だよーん。

クイズに答えてメガドライブをもらおう！

セガから読者プレゼント

セガ・メガドライブ
ファンタシースターⅡのカセット
をセットで2名様に。

クイズ

①、ミャウを売っていたのは、黒髪（くろかみ）のクニヌーヌ？　それも金髪（きんぱつ）のクニヌーヌ？

②、タイロンがみつかったのは、メデューサの洞窟（どうくつ）？　それともメデューサの塔（とう）？

③、ルツの師匠（ししょう）の名前は？

④、最後の敵の名前は？

応募方法
官製はがきにクイズの答と、あなたの①氏名②住所③年齢④電話番号をはっきり書いて、〒112　東京都文京区小石川郵便局私書箱50号　双葉社ゲームブックPS係まで、お送り下さい。

締切
5月31日（当日消印有効）

抽選方法
クイズ正解者の中から抽選で2名の方にプレゼントします。なお当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

編集部から

三惑星をめぐっての戦い、『ファンタシースター』はいかがでしたか？

キミは無事、兄の敵を討ち、アルゴル太陽系に平和をもたらすことができたでしょうか？

当編集部では、今後ともゲームを素材にしたゲームブックを、次々と発表していく予定です。

つきましては、すでに発表しております「ゲームブックシリーズ」を含め、当シリーズに対する御意見、御感想をお寄せいただければ幸いです。また、これからゲームブックにして欲しいゲームの希望などもお待ちしております。

〒162 東京都新宿区東五軒町3番28号（株）双葉社CTR「冒険ゲームブック」編集部 ファンタシースター係まで、あなたの御氏名、御住所、御年令、感想を書いていただいた本のタイトルを明記の上、お寄せ下さい。

お寄せいただいた方の中から抽選で、ゲームブックの最新刊をプレゼントいたします。

企画・構成／スタジオ・ハード
制作／大内めぐみ
文／大出光貴
作画／青木邦夫
©セガ・エンタープライゼス

ファンタシースター
アリサの冒険

双葉文庫　　冒険ゲームブックシリーズ　す 02-47

著　者　大　出　光　貴
制　作　スタジオ•ハード
発行者　清　水　文　人
発行所　株式会社双葉社
〒162　東京都新宿区東五軒町 3 番 28 号
TEL　東京(268)5111（代表）
振替　東京 8-117299
印　刷
製　本　大日本印刷株式会社

©FUTABASHA1989©Mitsutaka Ode/ST・HARD 1989 Printed in Japan
ISBN4-575-76096-X　C0193（落丁•乱丁はお取りかえいたします）
定価・発行日はカバーに表示してあります

双葉文庫

FUTABASHA ADVENTURE BOOK SERIES

ファンタシースター

アリサの冒険

ストーリー

アルゴル太陽系に重大な危機がせまっていた。国王ラシークが、アルゴルを邪教の者に売り渡してしまったのだ。それぞれの惑星に現われた怪物たちは、人々を襲いはじめた！

アリサは、パルマ星に住む15歳の女の子。兄のネロとふたりで平和に暮らしていた。ところがある日、兄が殺されてしまった！　国王の秘密をさぐっていたネロは、その部下にやられてしまったのだ。

「兄さんのかたきは、あたしが討つ！」

だが、旅に出たアリサを待っていたのは、想像を絶する運命だった……。

ＳＦファンタジーＲＰＧの傑作が、ついにゲームブックになった！

©セガ・エンタープライゼス

定価430円(本体417円)
ISBN4-575-76096-X C0193 P430E　双葉文庫